

大洲市内遺跡調査報告書Ⅱ

—弥生時代遺跡の調査—

村島宮の首遺跡
都谷遺跡

令和4（2022）年3月

愛媛県大洲市教育委員会



村島宮の首遺跡 全景(西から)



郡谷遺跡と神南山(北西から)

大洲市内遺跡調査報告書Ⅱ

—弥生時代遺跡の調査—

村島宮の首遺跡
都谷遺跡

令和4（2022）年3月

愛媛県大洲市教育委員会

序 文

大洲市は、愛媛県南部の南予地方に属し、市内を流れる肱川とともに歴史を積み重ねてきました。近年では、4つの櫓が現存する大洲城跡や、本市出身の豪商・河内寅次郎がつくり出した景勝地にたたずむ臥龍山荘を軸とした、近世から近代にかけての古建築物の観光活用に取り組んでいます。

一方、本市には先史時代から連綿と人びとの営みが続いており、その痕跡として多くの遺跡が残っています。大洲市教育委員会では様々な遺跡の調査を実施しており、令和元(2019)年度からは国庫補助を受けることで、さらに事業を拡充して進めてまいりました。

本報告書は、平成26(2014)年度から断続的に調査を進めてきた、村島宮の首遺跡と都谷遺跡の調査成果の一部をまとめたものです。いずれも昭和初頭には遺跡の存在が知られていたものの、長らくその実態は明らかになっていませんでした。今回の一連の調査は、とくに大洲盆地における弥生時代中期の様相を理解し、復元する上で重要な成果となっています。皆様の学術研究、教育などの基礎的資料として御活用いただけることを切に願います。

本市は平成30(2018)年の西日本豪雨において未曾有の水害に遭い、保管していた埋蔵文化財も、その収蔵庫が天井まで浸水するなどの大きな被害を受けました。被災した文化財の救出、復旧に当たっては、市内外を問わず多くの方々にご助けいただき、多大な御支援を賜りました。被災以降、今般の調査事業を進めることができたのは、ひとえにこれら皆様のお力添えあつてのことであり、この紙上をお借りして深謝いたします。

また、この調査事業を進めるに当たり、御指導御助言を賜りました専門家の方々や関係各位、並びに、調査に対して御協力・御支援をいただいた土地所有者や地元の皆様に対し、厚く御礼を申し上げます。

令和4(2022)年3月

大洲市教育委員会
教育長 東 山 宏

例 言

1. 本書は、大洲市教育委員会が平成26(2014)年度～28(2016)年度までに実施した調査の成果報告書である。
2. 調査事業にあたり、下記の指導を得た。
下條 信行（考古学、愛媛大学名誉教授）
日和佐 宣正（考古学、愛媛県教育委員会 文化財保護課 主幹）
3. 調査は、下記が担当した。
岡崎 壮一（大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員）
藏本 諭（大洲市教育委員会 文化スポーツ課 学芸員）
4. 調査および本報告書の作成に関する体制は、序説に記載する。
5. 試掘調査作業については、太田忠一、奥野 一、亀井泰基、菊地利男、中原 功、森田 修の協力を得た。整理作業については、主に榊上知恵子(大洲市埋蔵文化財センター 会計年度任用職員)が作業にあたった。
6. 表示した座標・標高・方位等は、世界測地系平面直角座標系IV系にしたがった。
7. 土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967)に準拠している。
8. 本書に掲載した地形図(図2-01、図3-01)は、大洲市農林水産部農林水産課から提供を受けた等高線図(林野庁作成公共測量成果)を基図とした。なお、この等高線図は、林野庁長官の承認を得て複製したものである(承認番号 令和元年7月22日 元林整治第246号)。
9. 村島宮の首遺跡における基準点測量は株式会社ダイニンに業務委託し、無人航空機による航空レーザー測量は株式会社四航コンサルタントに業務委託した。
10. 本書に掲載したトレンチ平面図・断面図等は岡崎・藏本が作成し、浄書ならびに製図は岡崎・藏本・榊上が行った。
11. 本書に掲載した遺物実測図の作成・浄書は岡崎・藏本・榊上が行い、製図は藏本が行った。
12. 本書で使用した調査時の写真は岡崎・藏本が撮影し、遺物写真の撮影は藏本・榊上のほか、白石尚寛(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員)の協力を得た。
13. 本書の執筆・編集は、岡崎・藏本が行った。なお、第2章を岡崎が執筆し、序説・第1章・第3章を藏本が執筆した。
14. 遺構については、SH(段状遺構)、SK(土坑)、SD(溝)、SX(性格不明遺構)、SP(ピット・柱穴)とし、遺構番号は各トレンチごとに通し番号を付した。掲載しているトレンチ図、遺構図の縮尺は20分の1で作成し、作成時の方位は世界標準座標方眼北としている。

15. 論考として、下條信行氏より玉稿を賜った。
16. 調査の遂行にあたり、次の職員から助言、協力を得た。

白石尚寛(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員)

17. 調査の遂行にあたり、次の方々よりご指導・ご助力を賜った(順不同、敬称略)。

村上恭通(愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター)、柴田昌見(愛媛大学理蔵文化財調査室)、榑原正幸(愛媛大学社会共創学部)、禰宜田佳男(大阪府立弥生文化博物館)、中村 豊(徳島大学大学院社会産業理工学研究部)、端野晋平(徳島大学理蔵文化財調査室)、三阪一徳(岡山理科大学学芸員教育センター)、田尻義了、足達達朗(以上、九州大学比較社会研究院)、福永煥大(九州大学人文科学研究院)、持永社志朗(愛媛県教育委員会文化財保護課)、加島次郎(公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団)、高木邦宏、兒玉洋志(以上、西予市教育委員会)、廣瀬岳志(宇和島市教育委員会)、幡上敬一(鬼北町教育委員会)、高山 剛、亀澤一平(以上、松野町教育委員会)、中野良一、多田 仁、忠政啓文、松井康之

有友正本、有友泰範、池田 進、上田悦子、大野 貢、山中 誠、大洲市農林水産部農山漁村整備課、大洲市菅田公民館、大洲市新谷公民館

目次

巻頭図版

序文

例言

目次

挿図目次

表目次

写真目次

図版目次

序説	（藏本論）	1
1. 調査事業にいたる経緯		1
2. 調査の目的・経過		1
3. 試掘調査・整理作業の体制		2
第1章 大洲市の環境	（藏本論）	5
1. 地理的環境		5
2. 歴史的環境		6
3. 弥生時代の大洲地域		9
第2章 村島宮の首遺跡の調査	（岡崎壮一）	13
1. 調査にいたる経緯と目的		13
2. 遺跡の立地環境		13
3. 調査の概要		15
4. 調査の成果		17
5. 過去の採集資料の整理		66
6. まとめ		81
第3章 都谷遺跡の調査	（藏本論）	91
1. 調査にいたる経緯と目的		91
2. 遺跡の立地環境		91

3. 調査の概要	92
4. 採集資料の整理	95
5. 2015年度調査区の調査（1次調査）	99
6. A区の調査（2次調査）	105
7. C区の調査（2次調査）	109
8. まとめ	111
論考 幅と厚さの相関図から読む弥生伐採石斧の型式学	下條信行 117
はじめに	117
1. 長さの違いは幅・厚さの違いとして現れる	120
2. 北部九州の初期稲作期の伐採石斧と韓半島南部および北部九州中期の伐採石斧との比較	124

図 版

挿図目次

第1章 大洲市の環境

図 1-01 愛媛県大洲市の位置	5
図 1-02 調査対象と市内主要遺跡	7
図 1-03 大洲市内弥生時代遺跡分布図	10

第2章 村島宮の首遺跡の調査

図 2-01 村島宮の首遺跡 全体地形図	14
図 2-02 村島宮の首遺跡 A区トレンチ配置図	16
図 2-03 村島宮の首遺跡 A-1 トレンチ平面断面図	18
図 2-04 村島宮の首遺跡 A-1 トレンチ出土遺物実測図 (1)	19
図 2-05 村島宮の首遺跡 A-1 トレンチ出土遺物実測図 (2)	20
図 2-06 村島宮の首遺跡 A-2 トレンチ平面断面図	21
図 2-07 村島宮の首遺跡 A-3 トレンチ平面断面図	21
図 2-08 村島宮の首遺跡 A-4 トレンチ平面断面図	21
図 2-09 村島宮の首遺跡 A-5 トレンチ平面断面図	22
図 2-10 村島宮の首遺跡 A-5 トレンチ出土遺物実測図	22
図 2-11 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ平面断面図 (1)	24
図 2-12 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ平面断面図 (2)	25
図 2-13 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ出土遺物実測図 (1)	26
図 2-14 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ出土遺物実測図 (2)	27
図 2-15 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ出土遺物実測図 (3)	28
図 2-16 村島宮の首遺跡 A-6 トレンチ出土遺物実測図 (4)	29
図 2-17 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ平面断面図 (1)	30
図 2-18 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ平面断面図 (2)	31
図 2-19 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (1)	33
図 2-20 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (2)	34
図 2-21 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (3)	35
図 2-22 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (4)	36
図 2-23 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (5)	37
図 2-24 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (6)	38
図 2-25 村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (7)	39

図 2-26	村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (8)	40
図 2-27	村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (9)	41
図 2-28	村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (10)	42
図 2-29	村島宮の首遺跡 A-7 トレンチ出土遺物実測図 (11)	43
図 2-30	村島宮の首遺跡 A-8 トレンチ平面断面図	44
図 2-31	村島宮の首遺跡 A-8 トレンチ出土遺物実測図	45
図 2-32	村島宮の首遺跡 A-9 トレンチ平面断面図	46
図 2-33	村島宮の首遺跡 A-9 トレンチ出土遺物実測図 (1)	47
図 2-34	村島宮の首遺跡 A-9 トレンチ出土遺物実測図 (2)	48
図 2-35	村島宮の首遺跡 A-9 トレンチ出土遺物実測図 (3)	49
図 2-36	村島宮の首遺跡 A-10 トレンチ平面断面図	50
図 2-37	村島宮の首遺跡 A-11 トレンチ平面断面図	50
図 2-38	村島宮の首遺跡 A-12 トレンチ平面断面図	50
図 2-39	村島宮の首遺跡 A-13 トレンチ平面断面図	51
図 2-40	村島宮の首遺跡 A-14 トレンチ平面断面図	51
図 2-41	村島宮の首遺跡 A-15 トレンチ平面断面図	52
図 2-42	村島宮の首遺跡 A-15 トレンチ出土遺物実測図 (1)	53
図 2-43	村島宮の首遺跡 A-15 トレンチ出土遺物実測図 (2)	54
図 2-44	村島宮の首遺跡 A-15 トレンチ出土遺物実測図 (3)	55
図 2-45	村島宮の首遺跡 A-15 トレンチ出土遺物実測図 (4)	56
図 2-46	村島宮の首遺跡 A-16 トレンチ平面断面図	58
図 2-47	村島宮の首遺跡 A-16 トレンチ出土遺物実測図	58
図 2-48	村島宮の首遺跡 A-17 トレンチ平面断面図	59
図 2-49	村島宮の首遺跡 A-17 トレンチ出土遺物実測図 (1)	60
図 2-50	村島宮の首遺跡 A-17 トレンチ出土遺物実測図 (2)	61
図 2-51	村島宮の首遺跡 A-18 トレンチ平面断面図	62
図 2-52	村島宮の首遺跡 A-18 トレンチ出土遺物実測図	62
図 2-53	村島宮の首遺跡 A-19 トレンチ平面断面図	63
図 2-54	村島宮の首遺跡 A-19 トレンチ出土遺物実測図	63
図 2-55	村島宮の首遺跡 A-20 トレンチ平面断面図	64
図 2-56	村島宮の首遺跡 A-21 トレンチ平面断面図	64
図 2-57	村島宮の首遺跡 A-21 トレンチ出土遺物実測図	64
図 2-58	村島宮の首遺跡 A区表面採集遺物実測図	65

図 2-59	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (1)	67
図 2-60	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (2)	68
図 2-61	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (3)	69
図 2-62	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (4)	70
図 2-63	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (5)	71
図 2-64	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (6)	72
図 2-65	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (7)	73
図 2-66	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (8)	74
図 2-67	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (9)	75
図 2-68	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (10)	76
図 2-69	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (11)	77
図 2-70	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (12)	78
図 2-71	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (13)	79
図 2-72	村島宮の首遺跡 奇贈採集資料実測図 (14)	80

第3章 都谷遺跡の調査

図 3-01	都谷遺跡 全体地形図	93
図 3-02	都谷遺跡 表面採集資料実測図 (1)	95
図 3-03	都谷遺跡 表面採集資料実測図 (2)	96
図 3-04	都谷遺跡 表面採集資料実測図 (3)	97
図 3-05	都谷遺跡 表面採集資料実測図 (4)	97
図 3-06	都谷遺跡 表面採集資料実測図 (5)	98
図 3-07	都谷遺跡 参考採集資料実測図	99
図 3-08	都谷遺跡 1 トレンチ平衡面図	100
図 3-09	都谷遺跡 2 トレンチ平衡面図	100
図 3-10	都谷遺跡 2 トレンチ出土遺物実測図	101
図 3-11	都谷遺跡 2 トレンチ周辺採集遺物実測図	101
図 3-12	都谷遺跡 3 トレンチ平衡面図	102
図 3-13	都谷遺跡 4 トレンチ出土遺物実測図	102
図 3-14	都谷遺跡 4 トレンチ平衡面図	102
図 3-15	都谷遺跡 5 トレンチ平衡面図	103
図 3-16	都谷遺跡 6 トレンチ平衡面図	103
図 3-17	都谷遺跡 その他表面採集遺物実測図	104

図 3-18	都谷遺跡 A-1 トレンチ断面図	105
図 3-19	都谷遺跡 A-2 トレンチ断面図	105
図 3-20	都谷遺跡 A-3 トレンチ断面図	105
図 3-21	都谷遺跡 A-2 トレンチ出土遺物実測図	106
図 3-22	都谷遺跡 A-4 トレンチ断面図	106
図 3-23	都谷遺跡 A-5 トレンチ断面図	106
図 3-24	都谷遺跡 A 区表面採集遺物実測図	108
図 3-25	都谷遺跡 C-1 トレンチ断面図	110
図 3-26	都谷遺跡 C-2 トレンチ断面図	110
図 3-27	都谷遺跡 C-2 トレンチ出土遺物実測図	110
図 3-28	都谷遺跡 C 区表面採集遺物実測図	110

論考 幅と厚さの相関図から読む弥生伐採石斧の型式学

図 4-01	関係遺跡分布図	118
図 4-02	今山石斧の幅厚相関図	120
図 4-03	3点法(長・幅・厚)による今山石斧の型式表現	121
図 4-04	高槻遺跡第9地点出土伐採石斧の幅厚相関図	123
図 4-05	玄界灘沿岸初期稲作期の伐採石斧の幅厚相関図	124
図 4-06	韓国無紋土器時代の伐採石斧の幅厚相関図	125
図 4-07	各地域および各遺跡出土の大形・小形の伐採石斧	127
図 4-08	韓半島南部の大形・小形の伐採石斧	128

表目次

第2章 村島宮の首遺跡の調査	
表 2-01 村島宮の首遺跡 土器一覧表	82
表 2-02 村島宮の首遺跡 石器・石製品一覧表	85
表 2-03 村島宮の首遺跡 金属製品一覧表	90
第3章 都谷遺跡の調査	
表 3-01 都谷遺跡 土器一覧表	113
表 3-02 都谷遺跡 石器・石製品一覧表	114
論考 幅と厚さの相関図から読む弥生伐採石斧の型式学	
表 4-01 今山石斧の分類と法量一覧	120
表 4-02 北九州市・高槻遺跡第9地点出土伐採石斧法量一覧	123
表 4-03 玄界灘沿岸の初期稲作期の伐採石斧法量一覧	124
表 4-04 韓国無紋土器時代の伐採石斧法量一覧	125

写真目次

第1章 大洲市の環境	
写真 1-01 塚穴古墳 石室内部	8
写真 1-02 大洲城跡	8
第2章 村島宮の首遺跡の調査	
写真 2-01 作業状況（1次調査）	15
写真 2-02 現地指導の様子（3次調査）	15
第3章 都谷遺跡の調査	
写真 3-01 採集された遺物の現地確認	91
写真 3-02 現地指導の様子（2次調査）	91

図版目次

図版 1

1. 村鳥宮の首遺跡 A区近景
2. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ
段伏遺構検出状況(西から)

図版 2

1. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ 完掘状況(西から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ 完掘状況(東から)

図版 3

1. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ 西壁土層断面
2. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ 遺物出土状況

図版 4

1. 村鳥宮の首遺跡 A-2トレンチ 完掘状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-2トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-3トレンチ 完掘状況(北から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-3トレンチ 西壁土層断面

図版 5

1. 村鳥宮の首遺跡 A-4トレンチ 完掘状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-4トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-5トレンチ 完掘状況(東から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-5トレンチ 完掘状況(北から)
5. 村鳥宮の首遺跡 A-5トレンチ 西壁土層断面

図版 6

1. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ 完掘状況(西から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ 完掘状況(北から)

図版 7

1. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ
SK02完掘状況(西から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ
SK02土層断面(北から)
3. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ 土層断面(中央壁)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ 西壁土層断面

図版 8

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 完掘状況(東から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 完掘状況(西から)

図版 9

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 土層断面(中央壁)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ SD01遺物出土状況
4. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 遺物出土状況

図版 10

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 作業状況(1)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ 作業状況(2)
3. 村鳥宮の首遺跡 A-8トレンチ 完掘状況(南から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-8トレンチ 西壁土層断面
5. 村鳥宮の首遺跡 A-10トレンチ 完掘状況(北から)
6. 村鳥宮の首遺跡 A-10トレンチ 西壁土層断面

図版 11

1. 村鳥宮の首遺跡 A-9トレンチ 東壁土層断面
2. 村鳥宮の首遺跡 A-9トレンチ
段伏遺構検出状況(北から)

図版 12

1. 村鳥宮の首遺跡 A-11トレンチ 完掘状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-11トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-13トレンチ 完掘状況(北から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-13トレンチ 西壁土層断面
5. 村鳥宮の首遺跡 A-12トレンチ 完掘状況(北から)
6. 村鳥宮の首遺跡 A-12トレンチ 西壁土層断面

図版 13

1. 村鳥宮の首遺跡 A-14トレンチ 完掘状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-14トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-15トレンチ
遺物出土状況(東から)

4. 村鳥宮の首遺跡 A-15トレンチ
遺物出土状況(西から)

図版14

1. 村鳥宮の首遺跡 A-15トレンチ 完器状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-15トレンチ 西壁土層断面

図版15

1. 村鳥宮の首遺跡 A-17トレンチ 完器状況(東から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-17トレンチ 完器状況(西から)

図版16

1. 村鳥宮の首遺跡 A-17トレンチ 西壁土層断面
2. 村鳥宮の首遺跡 A-17トレンチ 中央壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-17トレンチ
遺物出土状況(北から)

図版17

1. 村鳥宮の首遺跡 A-16トレンチ 完器状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-16トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-18トレンチ 完器状況(北から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-18トレンチ 西壁土層断面

図版18

1. 村鳥宮の首遺跡 A-19トレンチ 完器状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-19トレンチ 西壁土層断面

図版19

1. 村鳥宮の首遺跡 A-20トレンチ 完器状況(北から)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-20トレンチ 西壁土層断面
3. 村鳥宮の首遺跡 A-21トレンチ 完器状況(北から)
4. 村鳥宮の首遺跡 A-21トレンチ西壁土層断面

図版20

1. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ出土遺物(1)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-1トレンチ出土遺物(2)

図版21

1. 村鳥宮の首遺跡 A-5トレンチ出土遺物(1)

2. 村鳥宮の首遺跡 A-5トレンチ出土遺物(2)
3. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(1)

図版22

1. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(2)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(3)

図版23

1. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(4)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(5)
3. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(6)

図版24

1. 村鳥宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物(7)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(1)

図版25

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(2)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(3)

図版26

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(4)

図版27

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(5)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(6)

図版28

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(7)

図版29

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(8)

図版30

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(9)
2. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(10)

図版31

1. 村鳥宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(11)

図版32

1. 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(12)
2. 村島宮の首遺跡 A-8トレンチ出土遺物
3. 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物(1)
4. 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物(2)

図版33

1. 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物(3)

図版34

1. 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物(1)

図版35

1. 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物(2)

図版36

1. 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物(3)
2. 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物(4)

図版37

1. 村島宮の首遺跡 A-16トレンチ出土遺物(1)
2. 村島宮の首遺跡 A-16トレンチ出土遺物(2)
3. 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物(1)
4. 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物(2)

図版38

1. 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物(3)
2. 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物(4)
3. 村島宮の首遺跡 A-18トレンチ出土遺物
4. 村島宮の首遺跡 A-19トレンチ出土遺物(1)
5. 村島宮の首遺跡 A-19トレンチ出土遺物(2)
6. 村島宮の首遺跡 A-21トレンチ出土遺物

図版39

1. 村島宮の首遺跡 A区表面採集遺物

図版40

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(1)

図版41

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(2)

図版42

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(3)

図版43

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(4)

図版44

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(5)

図版45

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(6)

図版46

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(7)

図版47

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(8)

図版48

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(9)

図版49

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(10)

図版50

1. 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料(11)

図版51

1. 都谷遺跡 2015年度調査区・A区 俯瞰(南西から)
2. 都谷遺跡 2015年度調査区 近景

図版52

1. 都谷遺跡 1トレンチ 完掘状況・北壁土層断面
2. 都谷遺跡 2トレンチ 作業状況
3. 都谷遺跡 2トレンチ 掘削坑完掘状況(南西から)
4. 都谷遺跡 2トレンチ 完掘状況・北壁土層断面
5. 都谷遺跡 3トレンチ 完掘状況・北壁土層断面

6. 都谷遺跡 4トレンチ 完掘状況・北壁土層断面
7. 都谷遺跡 5トレンチ 完掘状況・北壁土層断面
8. 都谷遺跡 6トレンチ 完掘状況・北壁土層断面

図版53

1. 都谷遺跡 A-1トレンチ 作業状況
2. 都谷遺跡 A-1トレンチ 完掘状況・東壁土層断面
3. 都谷遺跡 A-2トレンチ 東壁土層断面
4. 都谷遺跡 A-2トレンチ 完掘状況(北西から)

図版54

1. 都谷遺跡 A-3トレンチ 完掘状況・東壁土層断面
2. 都谷遺跡 A-4トレンチ 完掘状況・東壁土層断面
3. 都谷遺跡 A-5トレンチ 完掘状況・北壁土層断面

図版55

1. 都谷遺跡 C区 俯瞰(西から)
2. 都谷遺跡 C-1トレンチ作業状況
3. 都谷遺跡 C-1トレンチ 完掘状況・東壁土層断面
4. 都谷遺跡 C-2トレンチ 完掘状況・東壁土層断面

図版56

1. 都谷遺跡 採集資料(1)
2. 都谷遺跡 採集資料(2)

図版57

1. 都谷遺跡 採集資料(3)

図版58

1. 都谷遺跡 採集資料(4)
2. 都谷遺跡 採取資料(5)

図版59

1. 都谷遺跡 参考採集資料
2. 都谷遺跡 2トレンチ出土遺物(1)
3. 都谷遺跡 2トレンチ出土遺物(2)
4. 都谷遺跡 2トレンチ周辺表面採集遺物

図版60

1. 都谷遺跡 4トレンチ出土遺物

2. 都谷遺跡 表面採集遺物(1)
3. 都谷遺跡 表面採集遺物(2)

図版61

1. 都谷遺跡 A-2トレンチ出土遺物
2. 都谷遺跡 A区表面採集遺物(1)

図版62

1. 都谷遺跡 A区表面採集遺物(2)
2. 都谷遺跡 C-2トレンチ出土遺物
3. 都谷遺跡 C区表面採集遺物

序 説

1. 調査事業にいたる経緯

大洲市内には142件の埋蔵文化財包蔵地があり、そのうち約7割が中世城館跡、約2割が弥生時代遺跡となっている。ただし、これまで実際に調査された遺跡の数は、ごくわずかに留まっている。これは、幸いにも市内の新規開発が少なかったということを示す以上に、遺跡の正確な範囲や構造について、長らく把握されてきていなかったことを示しているといえる。この状態が続けば、遺跡の価値や重要性が知られぬまま、新たな開発や自然災害によって遺跡が損傷あるいは滅失することにつながりかねず、大きな懸念事項となっている。このなかには、市内に留まらず愛媛県内に

おける学史上でも重要な遺跡が含まれており、調査による実態の解明が希求されてきた。

平成20年代以降は、とくに弥生時代遺跡に関する資料の寄贈や発見が相次いでおり、以上の懸念を踏まえたうえで、大洲市教育委員会は、平成26(2014)年度から、重要な弥生時代遺跡の調査を断続的に進めている。令和元(2019)年度からは国庫補助を受けて調査を進めている。

この報告書では、大洲市菅田町菅田に所在する村島宮の首遺跡、および、大洲市新谷に所在する都谷遺跡の調査成果の一部について報告する。

2. 調査の目的・経過

前項のとおり、事業は平成26(2014)年度から開始し、大洲市単独事業として市内の弥生時代遺跡の範囲確認調査を進めた。令和元(2019)年度からは国庫補助を受け、大洲市内遺跡発掘調査等事業として事業を展開し、上記の弥生時代遺跡の調査に加えて、中世城館跡の調査、そして遍路が利用した街道の調査を進めている。事業主体は大洲市であり、実際の発掘調査・整理作業を大洲市教育委員会文化スポーツ課が担当した。

事業の目的は、遺跡範囲や遺構の存否を確認したうえで、文化財的な価値付けを行い、遺跡の適切な保存・保護を図り、そして遺跡の重要性を周知することにある。とくに、研究史上重要性が認識されているが、遺跡範囲や遺構の存在が長年不詳であった弥生時代遺跡(村島宮の首遺跡、都谷遺跡)を対象として、試掘調査および過去の採集資料や寄贈資料の整理を行った。

令和3年度までに、村島宮の首遺跡および都谷遺跡で計6回にわたる試掘調査を実施しているが、本書では、村島宮の首遺跡で1～3次調査の一部、都谷遺跡で1～2次調査の一部の成果を報

告する。以降の調査成果については、機をあらためて報告する予定としている。

年度ごとの事業概要については、以下のとおりである。なお、各遺跡の調査にいたる詳細な経緯や経過については、各章で整理し掲載している。

【平成26(2014)年度】

村島宮の首遺跡の試掘調査に着手(1次)。

【平成27(2015)年度】

村島宮の首遺跡の試掘調査を継続(2次)。

都谷遺跡の試掘調査に着手(1次)。

【平成28(2016)年度】

村島宮の首遺跡の試掘調査を継続(3次)。現地説明会を実施。

都谷遺跡の試掘調査を継続(2次)。

【平成29(2017)年度】

村島宮の首遺跡の試掘調査を継続(4次)。現地説明会を実施。

都谷遺跡の試掘調査を継続(3次)。

【平成30(2018)年度】

都谷遺跡の試掘調査を継続(4次)。

村島宮の首遺跡については、平成30年7月豪雨

(西日本豪雨)の影響により、試掘調査を断念。

[令和元(2019)年度]

これまで大洲市単独事業であったが、本年度より国庫補助を受けて事業を展開することとなる。

村島宮の首遺跡の試掘調査を再開(5次)。

都谷遺跡の試掘調査を継続(5次)。現地説明会を実施。

[令和2(2020)年度]

村島宮の首遺跡の試掘調査を継続(6次)。

都谷遺跡の試掘調査を継続(6次)。

[令和3(2021)年度]

村島宮の首遺跡の調査を継続(6次)。

本報告書、刊行。

なお、調査で出土、発見した遺物や記録類の整理は随時進めている。

3. 試掘調査・整理事業の体制

本事業における大洲市教育委員会の試掘調査および整理事業の体制は、以下のとおりである。

平成26(2014)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 二宮 隆久

教育部長 稲田 宏

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 森野 啓二

課長補佐 深部 一男

係長 白石 尚寛(日本史)

主査 岡崎 壮一(考古学)

学芸員 藏本 論(考古学)

平成28(2016)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 二宮 隆久

教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 森野 啓二

課長補佐 谷野 勝則

係長 白石 尚寛(日本史)

係長 岡崎 壮一(考古学)

学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

委託職員 樹上 知恵子

平成27(2015)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 二宮 隆久

教育部長 松本 一繁

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 森野 啓二

課長補佐 谷野 勝則

係長 白石 尚寛(日本史)

係長 岡崎 壮一(考古学)

学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

委託職員 樹上 知恵子

平成29(2017)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 二宮 隆久

教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 森野 啓二

課長補佐 谷野 勝則

係長 白石 尚寛(日本史)

係長 岡崎 壮一(考古学)

学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

委託職員 樹上 知恵子

平成30(2018)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 二宮 隆久
 教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 村上 司ノリ
 課長補佐 谷野 勝則
 係長 白石 尚寛(日本史)
 係長 岡崎 壮一(考古学)
 学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

嘱託職員 樹上 知恵子

令和2(2020)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 東山 宏
 教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 村上 司
 課長補佐 脇坂 剛
 専門員 白石 尚寛(日本史)
 専門員 岡崎 壮一(考古学)
 学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

会計監理員 樹上 知恵子

令和元(2019)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 東山 宏ノリ
 教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 村上 司
 課長補佐 脇坂 剛
 専門員 白石 尚寛(日本史)
 係長 岡崎 壮一(考古学)
 学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

嘱託職員 樹上 知恵子

令和3(2021)年度

[大洲市教育委員会]

教育長 東山 宏
 教育部長 井上 徹

[大洲市教育委員会 文化スポーツ課]

課長 脇坂 剛
 課長補佐 大津 宝文タカラ
 専門員 白石 尚寛(日本史)
 専門員 岡崎 壮一(考古学)
 学芸員 藏本 論(考古学)

[大洲市埋蔵文化財センター]

会計監理員 樹上 知恵子

以上の体制のもと、実際の発掘調査は岡崎、藏本が担当した。このうち、岡崎が村島宮の首遺跡の調査を主に担当し、藏本が都谷遺跡の調査を主に担当した。整理作業は岡崎、藏本、樹上が担当した。

第1章 大洲市の環境

1. 地理的環境

愛媛県は、その東部と島嶼部とを東予、中部を中予、西南部を南予と呼び、大きく3地域に区分されている。このうち大洲市は南予に属し、県庁所在地である松山市から、直線距離で西南に約50kmにある。東は喜多郡内子町、西は八幡浜市、北は伊予市、南は西予市に接する。平成17(2005)年1月11日に、(旧)大洲市、喜多郡長浜町、肱川町、河辺村が合併し、現在の市域が形成された。

大洲市は、市域の中心を一級河川である肱川と、その支流である河辺川、矢落川などが流れ、流域に沿って田畑や集落、市街地が形成されている。市域総面積432.12km²のうち、林野面積が72.9%に及んでおり、豊かな農林業地域を形成している。中央部は大洲盆地が開き、盆地の周囲は高山寺山(標高561.2m)や神南山(標高710.4m)、妙見山(標高535.3m)などの山塊に囲繞される。西部は伊予灘に面し、東部は四国山地に接し、内子町との境界にある雨乞山(標高1213.3m)が市内では最高所である。

大洲市は、こうした山海に囲まれるため、東西方向で気候が大きく異なる。海に接する西部は典型的な瀬戸内海式気候であり、温暖少雨な気候となっている。中央部は内陸性盆地型気候に属しているため、昼夜の温度変化の差が大きい。また、夏は高温多湿になり、秋から冬にかけては霧や霜が発生して日照時間が短いという特徴がある。東部の山間部は内陸性気候に属し、寒暖の差が著しい。

大洲盆地を蛇行しながら流れる肱川は、愛媛県下では最長であり、幹川流路延長103km、流域面積1,210km²を測る。大洲盆地は肱川の氾濫原であり、近年では平成30年7月豪雨によって大規模な浸水被害を受けるなど、河川整備が進んでもなお水害の常襲地として知られる。これは、肱川が瀬戸内海に注ぐ河川としては河床勾配が非常に緩やかであること、盆地から河口に向かうほど狭隘な

谷が形成され、平野の広がりが少ない先行河川であること、盆地に支流が集中することなどに起因する。そのため、集落は盆地底よりも盆地縁辺部の河岸段丘上に形成される傾向が強い。

大洲地域は、中央構造線と御荷鉾構造線とに挟まれた三波川帯(三波川変成コンプレックス)と、御荷鉾構造線と仏像構造線とに挟まれた秩父帯(秩父帯北帯の付加コンプレックス)との両方にまたがっている。前者は、白亜紀に低温高压型変成作用によって生じた変成岩類が主体であり、後者は、前期ジュラ紀に形成された泥質混在岩および泥岩が主体となる(坂野・水野・宮崎2010)。

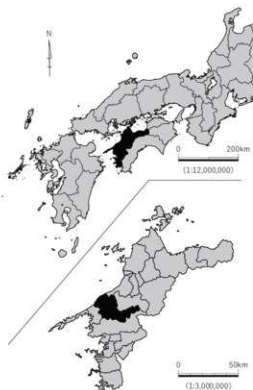


図1-01 大洲市位置図

2. 歴史的環境

旧石器時代 低丘陵地の上須成地区で、旧石器時代にさかのぼると考えられる石器が数点採集されている。また、肥川中流域右岸の河岸段丘上にある長瀬遺跡では、角錐状石器が採集されている。今のところ市内で確認されている旧石器資料はわずかだが、肥川流域で主要石材となる赤色珪質岩は、神南山とその周辺で産出することが知られている。このため、近年では石材や集団の移動についても言及されるようになってきた。

縄文時代 新谷地区の田合遺跡で縄文時代早期の押型土器が出土するほか、石鏡、トロトロ石器などの石器も出土している。また、柚木遺跡では新富士橋架橋工事の際、河床面下13～15mで押型土器が出土したとされる。前期～中期の遺物は、今のところ確実な出土例がない。後期は、田合遺跡、慶雲寺遺跡などで沈線土器片が採集されているほか、常森遺跡では磨製石斧が出土したとされる。晩期については、慶雲寺遺跡で沈線文を施した深鉢が採集されている。

また、肥川の河岸段丘上に位置する馬場ノナル遺跡、長瀬遺跡では、ササカイト、姫島産黒曜石、チャートなどの石鏡や剥片などが採集されている。これら資料は、これまで縄文時代前期と評価されてきたが、時期の判明する土器が採集されておらず、詳細は不明である。また、近年では山鳥坂ダム建設工事に伴う試掘調査によって岩谷岩除遺跡の存在が明らかになっており、ここでは縄文時代後期の厚手無文土器数点と赤色珪質岩剥片が出土している。

弥生時代 弥生時代については、次節で述べる。

古墳時代 古墳時代の集落遺跡は、今のところ発見されていない。矢落川遺跡で須恵器片や土師器片が出土したとの報告もあるが、出土状況などの詳細は判然としない。

大洲市内で現在までに確認されている古墳は、久米地区の阿蔵古墳1基、新谷地区の田合古墳2基(1号墳、2号墳)、塚穴古墳1基の4基であり、出土遺物や石室形態から、いずれも古墳時代後期

に属すると考えられる。

大正8(1919)年に調査された阿蔵古墳では、須恵器のほか、鉄剣や金環などが出土している。田合1号墳は、直径約10mの円墳で墳丘を周溝が圍繞する。内部主体は両袖式の横穴式石室であり、調査時には下半部のみ残されていた。石室内の出土遺物は須恵器提瓶・横瓶・短頸壺・坏・蓋、土師器甕、鉄製刀子・耳環などで、時期は6世紀後半に位置付けられている。墳形は不明だが、2号墳も部分的に堀割されており、こちらも両袖式の横穴式石室と考えられる。塚穴古墳は、大洲市内で現存する唯一の古墳である。墳径約10mの円墳で、内部主体は横穴式石室である。出土遺物は今のところ確認されていない。

古代 大宝律令による国郡里制の制定を受け(大宝元(701)年)、伊予国南部に宇和郡が設置される。貞観8(866)年には、組織再編によって宇和郡の北部が分立し、喜多郡が成立した。喜多郡は、矢野郷、久米郷、新屋郷の3郷からなり、このうち久米郷と新屋郷とが現在の大洲市域に相当する。

『扶桑略記』には、承平4(934)年、藤原純友の乱に乗じた海賊が、喜多郡の不動殿(公的な貯蔵米)3千石あまりを奪取したという記録も残る。

大洲地域における古代の考古学的資料は少ない。ただし、大叉遺跡と新谷川西遺跡とでは、緑軸陶器、赤色塗彩土師器、暗文入り土師器などが出土しており、官衙のような公的施設が付近に存在した可能性を示している。

中世 承久3(1221)年の承久の乱前後に、宇都宮氏が伊予国守護として任官する。宇都宮氏は、代々伊予国守護のほか喜多郡地頭職を与えられており、喜多郡は宇都宮氏の一族の所領であった。元弘3(1333)年の鎌倉幕府討幕の際には、喜多郡地頭宇都宮貞泰の代官などが反幕勢力と激しく戦ったものの、結果的に宇都宮氏は元弘の変によって守護の地位を追われている。しかし、宇都宮氏一族は喜多郡地頭としての勢力は残しつつ、

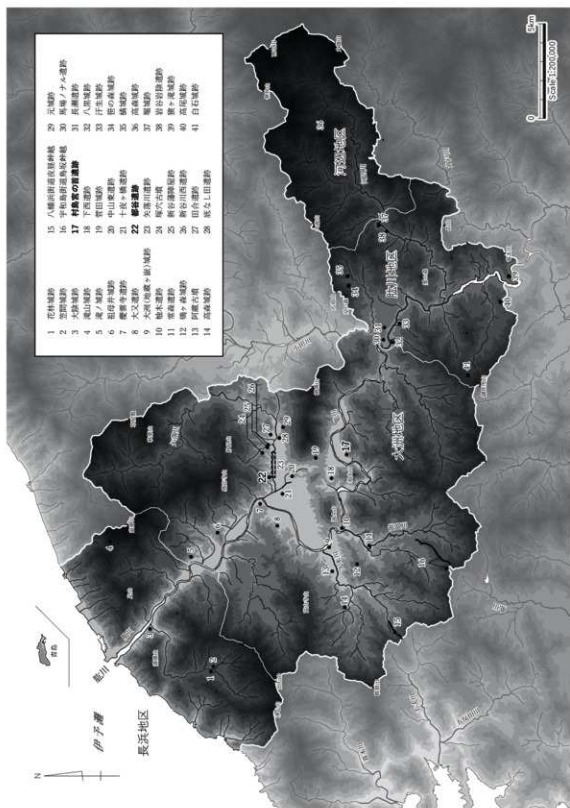


図1-02 調査対象と市内主要通路

室町、戦国期には有力な国人領主となった。宇都宮氏の居城は、地蔵ヶ嶺城(のちの大洲城)とされる。

戦国期における喜多郡は、宇都宮氏を中心とする多くの在地領主が存在したほか、喜多郡の北にある河野氏、南にある西園寺氏に挟まれており、緊張の絶えない地域であった。永祿11(1568)年には、喜多郡と宇和郡との境界にあたる鳥坂峠において、河野氏・毛利氏と宇都宮氏・土佐一条氏との間で、「鳥坂合戦」が勃発している。この合戦は、南予としては戦国期最大の衝突として位置付けられている。合戦の背景には、(1)河野氏が宇都宮氏に対して任官勧告をしたこと、(2)南予の国郡境目の小競り合いが複雑に発展したことなどの要因が考えられている。

この合戦に敗退した宇都宮氏と一条氏は衰退することとなり、宇都宮氏の求心力を失った喜多郡は、中小の在地領主が乱立するようになる。そのため、肱川下流域では、河野氏・毛利氏に帰属する領主が現れるようになる。とくに、宇都宮氏に従って下野国から移ってきたとされる津々喜谷氏は、南北朝時代よりこの地域で活動していた肱川下流域の有力領主である。肱川中流域では、大野氏のように、土佐の長宗我部氏と結び付く領主も現れている。

天正3(1575)年には、長宗我部元親が土佐国を統一し、さらには国境を越えて喜多郡・宇和郡にも侵攻している。とくに宇和郡では、西園寺氏らが一進一退の攻防を続けたものの、三滝城(西予市城川町)が攻略され、御荘(愛南町)や三間(宇

和島市)が制圧されるなどしており、結果として西園寺氏は長宗我部氏に服属している。

以上のような争乱を背景に、大洲地域には大小さまざまな城館が築かれている。大洲地域の城館跡は、大半が山城である。こうした山城は、河川沿いや交通の要衝となる地点に集中して立地する傾向にあり、基本的に比高差は200mを超えない位置にある。なかには、地蔵ヶ嶺城、菅田城、祖母井城、滝ノ城、大際城など、地域支配の拠点となる城もある。一方、標高820mの河辺高森城、標高726mの滝山城などは、突出して高い地点に築城されているが、これは遠方を見通すことができるという地理的特性を活かし、周辺の警戒や監視の役割を担ったことが想定されている。

このほか中世喜多郡の情勢については、津々喜谷氏の菩提寺である西禅寺に残された「西禅寺文書」(愛媛県指定有形文化財)にみることで、当時の情勢を考察するうえで基礎的な資料である。ただし、中世喜多郡について記された史料はまとまっておらず、考古学的資料も限られている。このため、当時の状況を探るには、『大洲秘録』や『大洲舊記』など江戸期以降に編纂された記録類に依拠せねばならないことが多い。

近世 天正13(1585)年、豊臣秀吉による四国征伐により、大津城(地蔵ヶ嶺城の後身、現在の大洲城)は小早川隆景が統治する。天正14(1586)年には、伊予国内の城郭整理が行われ、祖母井(祖母井城)、滝之城(滝ノ城)、下須成(大際城)の統合などが命じられるなか、大津城は存城となった。以降、戸田勝隆、藤堂高虎、脇坂安治・安元が入



写真1-01 塚穴古墳 石室内部



写真1-02 大洲城跡

城している。なお、大津城の近世城郭化は、藤堂高虎以降に行われたと考えられているが、明確な時期を示す史料が残されておらず、諸説紛々とした状態にある。元和3(1617)年、伯爵国米子藩から加藤貞泰が大津城へ入城すると(6万石)、以降は明治期にいたるまで、大洲藩は加藤家が13代にわたって統治することになる。なお、「大洲」という名称の初出は、万治元(1658)年を待たねばならない。

寛永16(1639)年には、藩内分知のかたちで新谷藩(1万石)が成立している。

考古学的調査は、大洲城跡や新谷藩陣屋跡などで行われている。平成11(1999)年に実施された

大洲城天守跡の発掘調査では、天守の建替え痕跡が確認され、新旧2時期にわたる天守の存在が想定されている。また、豊臣秀吉や秀吉直臣の居城で出土例がある菊紋瓦なども発見されており、大洲城が重要な城郭に位置付けられていたと考えられる。このほか大洲城跡では、平成29(2017)年から断続的に石垣保存修理工事が実施されており、絵図に描写のない石垣の存在が明らかになるなど、現在も新たな成果があがっている。新谷藩陣屋跡では、陣屋内の建物礎石を検出し、また、評定所や調見所であった麟鳳閣(愛媛県指定有形文化財)に関連する石敷遺構を検出するなどの成果がある。

3. 弥生時代の大洲地域

大洲市内で弥生時代遺跡の存在が明らかとなったのは昭和4(1929)年3月下旬のことである。新谷地区の灌漑用貯水池の工事に伴って弥生土器と磨製石斧が出土しており、現在は底なし田遺跡として知られている。

この昭和初期という時期は、折しも市内で少彦名命の伝説や巨石文化に対する探究がにわかに高揚した頃にあたり、こうした活動の一環で弥生時代遺跡が次々と発見されている。とくに、学生時代から大洲との関わりがあった樋口清之氏による業績が大きく、「伊予大洲の古代文化」[梁瀬神陵奉讃會 編1930]や「伊豫國喜多郡地方遺蹟概説」[樋口1933]では、今回報告する村島宮の首遺跡や郡谷遺跡を含め、大洲盆地を中心に多くの遺跡が見出されている。以降は、地元郷土史家や長井數秋氏らによって市内各地で遺物が採集されており、採集資料を中心とした研究が進められてきた。

市内の弥生時代遺跡は、全時期を通じて大洲盆地の縁辺部に形成される傾向にあり、盆地底部は少ない。十夜ヶ橋遺跡などは氾濫原中央部に位置し、試掘調査によって弥生土器が出土しているものの、これまで遺構は発見されていない。大洲盆地以外では、鬼川河口部右岸の御建山(標高243m)南側斜面で弥生土器数点を発見したという

新聞記事が残る(昭和18(1943)年)。ただし、採集された遺物は現在までに伝えられておらず、実態は不明のままとなっている。

前期にさかのぼる資料はわずかだが、いわゆる遠賀川式土器である有段口縁の壺や如意形口縁の甕が慶雲寺遺跡で採集されている。これらは北部九州に起源を求めることができ、稲作農耕や文化が大洲盆地にも到達していたことを示している。ただし、こうした北部九州的な資料は例外的であることから、すぐさま定着するにはいたらなかったとみられる。

前期末～中期初頭の遺跡としては、冒頭に挙げた底なし田遺跡が代表例である。高速道路建設に伴って約3,000㎡が調査されており、遺構は検出されなかったものの、包含層から多数の土器、石器が出土している。土器には、南子から土佐にかけて分布する地域色の強い「西南四国型甕」も認められる。縄文時代早期の押型文土器の出土や円墳の存在で知られる田合遺跡でも、この時期の土器が認められる。

中期は、大洲盆地全体で遺跡や遺物の量が増える傾向にある。矢落川最下流部の河床中には矢落川遺跡が広がり、ここでは河川改修の際に多数の土器が出土している。とくに、口縁端部に断面

三角形の突帯を貼り付けた逆L字形口縁の甕が目立っている。大叉遺跡では、胴上半部に重弧文を施した東九州系の壺が出土している。中期中葉は今回報告する都谷遺跡、中期後葉は村島宮の首遺跡が代表例であり、いずれも「都谷式土器」「村島式土器」の標式遺跡とされている。また、元城跡では凹線文が施された壺、高坏が出土しているほか、石廬丁も発見されており、慶雲寺畑遺跡(慶雲寺経塚)でも凹線文の施された壺が採集されている。

遺跡の立地をみると、前期末～中期初頭までの

慶雲寺遺跡や底なし田遺跡が、河川沿いや山の麓に位置しているのに比べ、中期前半以降の各遺跡は丘陵上もしくは山腹のような高台に遺跡が形成されている。また、中期前半の大叉遺跡が標高約20m、比高差約10mであるのに対し、中期後葉の元城跡は標高約120m、比高差約100mとなるなど、徐々に高度が上がる傾向も看守できる。従来、氈川による水害や盆地特有の霧を忌避するため、高台に遺跡が形成されたと説明されてきたが、この時期は瀬戸内海沿岸一円で広義の高酸性集落が展開する時期にあたるため、近隣地域の動向も



図1-03 大洲市内弥生時代遺跡分布図(カシミール3Dを利用して作成)

視野に入れる必要がある。

後期は、下西遺跡や田合遺跡、矢落川遺跡で「く」字状口縁の甕が発見されている。高台を中心とする中山東遺跡ではタタキ技法の甕も採集されている。大洲城跡では、試掘調査において平面プランが円形の竪穴建物が検出されているほか、周辺を試掘調査した際には多量の近世遺物のなかに弥生土器がまじっていることがある。このように、中期から引き続いて後期でも、立地は高台を指向す

る傾向がある。ただし、中期と比較して遺跡数は減少に転じている。約15km南に離れた宇和盆地では、後期から遺跡数が増加しており、大洲盆地とは対称的な動きとなっている。なお、宇和盆地は古墳時代前期古相の前方後円墳である笠置峠古墳をはじめとした古墳の造営が連続と続く一方、大洲盆地では古墳時代の遺物、遺構は極めて断片的となっている。

【参考文献】

- 愛媛県史編さん委員会 編 1986『愛媛県史 資料編 考古』、愛媛県
- 坂野清行・水野清秀・宮崎一博 2010『大洲地域の地質』地域地質研究報告(5 万分の1 地質図幅、高知(13)第59号、NI-53-34-7)、独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
- 樋口清之 1933『伊豫國喜多郡地方遺蹟概説』『史前學雑誌』第5巻第2號、史前學會

- 松岡文一 1964『宇和町出土の彌生式土器』『愛媛考古学』第3巻第2号 愛媛県東宇和郡宇和町調査特輯号、愛媛考古学会
- 梁瀬神陵奉讃會 編1930『伊豫大洲の古代文化』

第2章 村島宮の首遺跡の調査

1. 調査にいたる経緯と目的

村島宮の首遺跡は、昭和初期に地権者や地元郷土史家らによって発見された遺跡で、それは昭和7(1932)年の新聞記事でも報じられている。昭和8(1933)年には國學院大学の樋口清之氏により、石斧や石鏃などを製造した石器製造遺跡であることが指摘され(樋口1933)、さらに昭和12(1937)年には、打製石斧は耕作用であり、形態も製法も一定化した打製石斧の石器製造場であると指摘されている(樋口1937)。

昭和30年代に入り、再び地元や近隣の郷土史家らによって遺物が採集されるようになると、昭和38(1963)年と昭和41(1966)年に長井數秋氏によって土器の編年的研究が行われ、弥生時代中期後半の土器様式として「村島式土器」が提唱されている(長井1963, 1966)。昭和40(1965)年には長井數秋氏、大洲市教育委員会、大洲考古学会、西条農業高等学校による合同の発掘調査が行われている。この調査の詳細は明らかではないが、発掘調査に参加した西条農高生の記録によると(石川1966)、多数の遺物のほかに住居跡を検出し、住

居跡内では焼土を囲んだ石組みの炉跡や柱穴などを発見したとされている。昭和61(1986)年には長井數秋氏によって打製石斧やその未成品、破損品が多量に出土する遺跡として紹介され、弥生時代中期後葉の石器製作跡である可能性が高いと述べられている(愛媛県史編纂委員会 編1986)。それ以後は、実測図や写真は掲載されながらも肝心の出土遺物が所在不明のままだったこともあり、本遺跡が研究の俎上に上ることはなかった。

しかし、平成の後半期になり市内の個人・団体から散逸していた資料が相次いで寄贈されるようになると、これまでいわれてきたような打製石斧だけではなく、太形給刃石斧と呼ばれるような磨製石斧も含まれていることが明らかになった。弥生時代的な磨製石斧の製作遺跡ということになれば、四国内では唯一の珍しい遺跡であり、市内においても極めて重要な遺跡となる可能性が高いことから、大洲市教育委員会では平成26(2014)年度に遺跡の所在や範囲、具体的様相を把握するための試掘調査に着手した。

2. 遺跡の立地環境

村島宮の首遺跡は、大洲の中心市街地から藍川沿いに8kmほど離れた菅田地区に所在する。市内の弥生遺跡のなかでは最も南東に位置し、大洲盆地縁辺部に立地している他の弥生遺跡からはやや孤立した感がある。これより上流側で弥生遺跡は確認されておらず、次に弥生遺跡が確認されるのは約30km上流の西予市野村町である。遺跡は、藍川を臨む中起伏山地の中腹付近で、北面の傾斜地に立地しており、山裾の村島集落からの比高差は約40～100mである。藍川までは直線距離にして約400mあるが、遺跡下の山裾まで氾濫原が迫った地形である。対称的に対岸の藍川右岸側は、神南山山麓が低台地となって緩傾斜地を形成

し、現在でも菅田地区の中心的な集落が展開しており、弥生遺跡も複数箇所確認されている。

遺跡周辺は、昭和の中頃までは段畑として傾斜地をテラス状に造成して畑作地に利用されていたようだが、その後は植林されてスギ・ヒノキの人工林となった。現在はその大半が放置人工林となっており、調査着手時には分け入るのも容易でないほど荒地化していた。

遺跡周辺の地質については、三波川変成岩帯と秩父帯に挟まれた御荷鉾緑色岩帯に含まれ、岩相は変斑れい岩や鉄質片岩を主体に、玄武岩、珉質片岩、チャートが部分的に分布する。



図2-01 村島宮の首遺跡 全体地形図

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査は、遺跡の具体的な位置情報が乏しかったことから、関係者の聞き取り等を頼りに調査区域を大きく2箇所を設定した。平成26(2014)年度の1次調査では、標高約60～75m付近で昭和40年時の発掘調査で住居跡を発見したとされる旧三嶋神社より下側の範囲を「A区」、標高80～100m付近で昭和初期に石斧等を採集したとされる旧三嶋神社から墓地周辺までの範囲を「B区」として設定した。平成27(2015)年度の2次調査以降は、踏査によって新たに遺物が採集された標高110～130m付近の山林部分を「C区」に設定し、さらに平成29(2017)年度の4次調査以降は、より標高の高い部分についても調査区を設定して調査を実施している。

今回の報告では、3次調査までに実施したA区の調査成果とし、B区以降の調査成果については別途報告する予定としている。

(2) 調査の概要と方法

1次調査は、平成26(2014)年5月5日～6日の2日間で実施した。遺跡の確実な一端を掴むために、その手掛かりとなる昭和40年時の発掘調査

箇所の特定に主眼を置きながら、A区4箇所、B区4箇所の計8トレンチの調査を行った。本次調査にあたっては、下條信行愛媛大学名誉教授に調査指導を仰ぎ、各市町教育委員会の埋蔵文化財専門職員である、広瀬岳志(宇和島市)、高木邦宏・兒玉洋志(西予市)、幡上敬一(鬼北町)、高山剛・亀澤一平(松野町)、および、加島次郎(公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター)の参加を得て実施した。なお、調査に協力いただいた諸氏は半ば手弁当での参加であった。記して感謝申し上げる次第である。

2次調査は、平成27(2015)年8月11日～9月11日、平成28(2016)年1月28日～3月29日の期間で実施した。1次調査で検出したA区の遺構の詳細調査および遺跡全体の拡がりを把握することを目的として、A区13箇所、B区8箇所、C区8箇所の計29トレンチの調査を行った。

3次調査は、平成28年6月3日～7月22日、11月4日～12月21日、平成29(2017)年2月22日～3月30日の期間で実施した。2次調査までに検出したA～C区の遺構の詳細調査および遺跡全体の拡がりを把握することを目的として、A区9箇所、B区5箇所、C区1箇所の計15トレンチの調



写真2-01 作業状況(1次調査)



写真2-02 現地指導の様子(3次調査)



図2-02 村島宮の首遺跡 A区トレンチ配置図

査を行った。

調査の方法としては、トレンチは0.5m×2.0mの大きさを基本とし、遺構等が発見されたトレンチについては拡張して遺構の詳細調査を行った。

掘削は人力により実施し、ピットや土坑等遺構の掘削については極力半截に留めるかベルトを残すなどして遺構の保存に努めた。

4. 調査の成果

A区の調査については1次から3次調査までに実施し、計21トレンチを調査した。

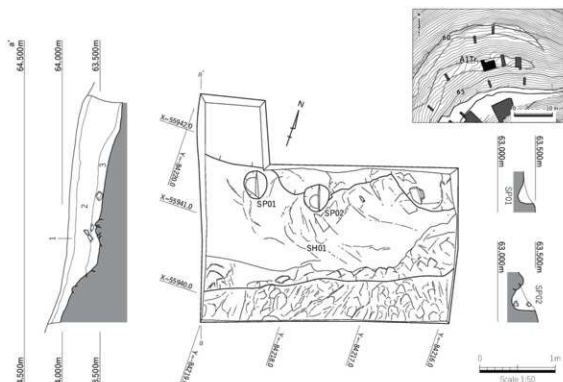
A区の基本層序については、1層が腐葉土を中心とした表土や近現代の造成土あるいは攪乱相当層で、2層は段畑などの造成に伴う削平や盛土によって形成されたと思われる堆積層である。2層は各トレンチで色調など若干の違いはあるが、基本的には褐色系の粘質土で、A区全てのトレンチで共通して確認することができる。2層からは最も多くの遺物が出土しているが、土器片などは細片であることが多く、これは同層が形成された過程に起因しているものと考えられ、削平や盛土の影響を受けて破片化が進んだものと思われる。遺物は大半が弥生期のものであるが、中・近世のものもわずかに出土している。3層以下については各トレンチで様相が異なるが、基本的には弥生期以外の遺物は出していない。地山はシルト質の粘質土層あるいは岩盤が露出した風化面で、基本的にはこの地山が弥生期の遺構面となっている。

出土遺物については、今回出土した土器類はその多くが細片であり、全体形を把握し得るものはほとんど出土しなかった。しかし、本市においては発掘調査事例が少なく、弥生期の資料が十分な状態でないことから、資料の蓄積を図るために細片あるいは遺構外出土資料であっても特徴的なものについては図化を試みた。

また、石器類については、本遺跡の特徴的な遺物である石斧についてみると、今回大きく2種類の石斧が出土した。いずれも緑色玄武岩製で、厚手の磨製石斧と薄手の打製(局部磨製)石斧である。前者は基本的には全面が研磨された厚手の両刃石斧であり、「俊採石斧」と捉えることができる。対して後者は、薄手で基本的に刃部中心に研磨さ

れた局部磨製石斧で、形状は概ね短冊形である。かつて「愛媛県史」などで「打製石斧の製作遺跡」として評価された石斧である。これらは、長さが6cmほどのものから25cmを超えるような大型品まであり、刃部幅も2cmほどのものから6cm近いものまであり、かなりのバラつきがみられる。これらが一律に同じ目的用途のものであるとは考えにくく、こうした用途の解明がまだ不十分であることから、現時点ではこれら打製石斧を「板状石斧」と仮称して報告する。なお、肉眼観察レベルではあるが石材についても両者には差がみられ、簡単にいえば前者は粗く後者は密なもので、さらに後者については薄く剥離する性質もみられることから、おおよそ判別することが可能である。これにより、未成品以外の素材や剥片などについても、石材の質からどちらの石斧に属するものかを判断した。

A-1トレンチ[1・2次調査](図2-03) 昭和40(1965)年の試掘調査で炉跡や柱穴を発見したとされるトレンチの検出を目指し、関係者の証言からその可能性の最も高い平坦部にトレンチを設定した。当初は平坦部に直交するように南北方向の1m×3mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張した。層序は1層が表土、2層がしまりのやや弱い褐色粘質土、3層がしまりのやや強い暗褐色粘質土、地山は岩盤層である。1次調査では、岩盤が落ち込みその前面が平坦部となる部分が検出された。平坦部の地山直上部分で比較的残りの良い細頸壺(3)が出土したほか、これを被覆する3層からも弥生土器片が出土したことから、人工的に削平された遺構である可能性が高いと判断した。2次調査では、この岩盤の落



1層:黒褐色(10YR3/2)粘質土、赤土。2層:褐色(10YR4/4)粘質土、しまりやや強い。3層:暗褐色(10YR3/4)粘質土、岩盤の風化層を若干含む、しまりやや強い、炭粒を若干含む。

SP01:暗褐色(10YR3/4)粘質土、ややシルト質あり、しまりやや強い。
SP02:暗褐色(10YR3/4)粘質土、風化層を若干含む、しまりやや強い。

図2-03 村島宮の首遺跡 A-1トレンチ断面図

ち込み部分と平坦部の拡がりを確認するためにトレンチを拡張し、最終的には2m×3.3m程度のトレンチとした。

調査の結果、岩盤の落ち込みは直線的に延びて東側で折れ曲がる状況が確認され、これと平行する平坦面がその前面で検出された。これらは弥生期と思われる3層に被覆されることから、岩盤の落ち込み部から平坦面にかけての範囲を段状遺構(SH01)とした。

SH01は平面形が南側の壁面は直線的で東側で「く」の字状に折れる。壁面部分で東西の長さ約2.5m、床面の奥行は約1～1.3m、壁高は0.25mを測る。平坦面の北側は自然傾斜で下っていくが、この傾斜部にも3層が堆積している状況から、当時の遺構の形状をある程度保っているものと想定される。3層からは細頸壺(3)のほか弥生土器細片と緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片がわずかに出土した程度である。平坦面内では北側の落ち際付

近でビットが2基(SP01・02)検出された。いずれも径0.35mの円形で、埋土内から遺物の出土はなかった。また、調査時に認識はなかったが、後の調査で見えられた他の段状遺構では壁際に溝が検出されており、本遺構の土層断面図や写真でも壁際に若干の窪みを確認することができることから、壁際には溝があった可能性が高いと考えられる。なお、本トレンチで昭和40年の試掘調査の痕跡は検出されなかった。

遺物は大半が2層からの出土で、図示したもののほかには弥生土器、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが出土している。弥生期以外では近世の煙管(M1)が出土している。

A-1トレンチ出土遺物(図2-04-05) 1～5は弥生土器で、1～3は壺、4～5は甕である。1～2は広口壺の口縁部で、1は外反する口縁部の端部は外方にやや肥厚気味である。2は大きく外反する口縁部の端部が下方に若干肥厚し、端面には

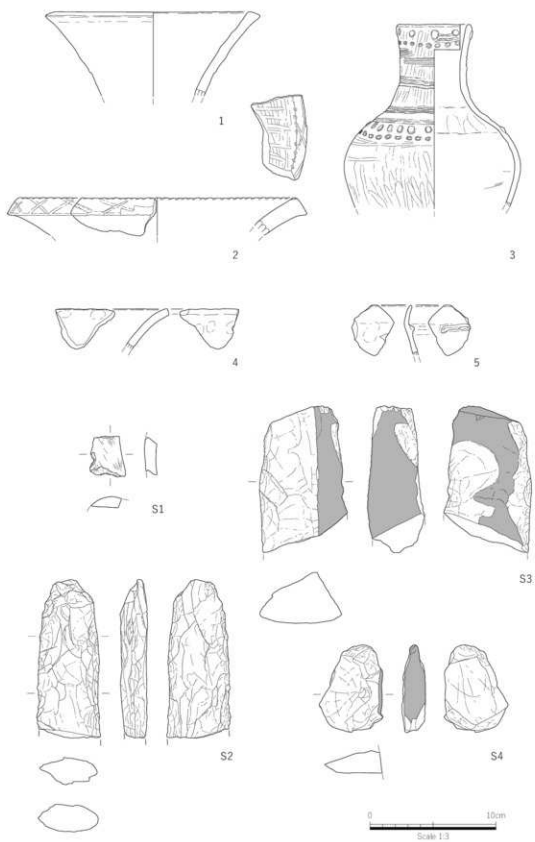


図2-04 A-1トレンチ出土遺物実測図(1)

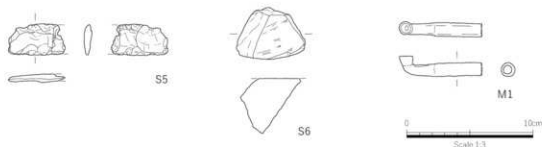


図2-05 A-1トレンチ出土遺物実測図(2)

斜格子文、上端には小さな刻目が施されている。口縁内面にはミガキ調整が施される。3は小型の細頸甕で、球形状の体部から頸部が直立する。頸部には上から円形浮文、竹管文、櫛描直線文2段が巡らされ、肩部にも櫛描直線文2段、円形浮文、竹管文が巡らされている。外面は丁寧なミガキ調整が施される。4・5は甕の口縁部である。4は大きく外反する口縁部で踵部は面取りされている。5は小型の甕で、口縁部は小さく外反し肩部に小さな貼付突起1条が施されている。

S1～S6は石器で、S1～S3は緑色玄武岩、S4は赤色珪質岩である。S1は形状は不明ではあるが、石の材質や表面が研磨されていることから伐採石斧の破片と思われる。S2は板状石斧で、裏面に一部磨滅した部分のみみられることから成品の破損品と考えられる。刃部側を欠損している。基部や両側縁部は細かく加工されている。S3は伐採石斧の未成品である。表面を大きく剥離して断面三角形に成形し、左側縁部に細かい加工を行っている。右側縁部のほか裏面と基部に自然面を残している。S4は赤色珪質岩の石核である。一側面に自然面を残し他は大きく打ち欠いている。S5はサヌカイト製と思われるスクレイパーである。側部を欠損している。刃部は直線的で刃部と背部に細かい加工を行っている。S6は流紋岩製の砥石の破片で、研磨痕を1面のみ残す。目は細かい。

弥生時代以外の遺物では、M1の銅製の煙管が出土している。雁首部分で、火皿が小型化したものである。

A-2トレンチ[1次調査](図2-06) A-1トレンチと同様に昭和40年の試掘調査のトレンチの検

出を目指して、3m東側に設定した。平坦部に直交するように南北方向の1m×3mのトレンチを設定し、時間の制約から西半部分のみを地山まで掘削した。層序は1層が表土と攪乱層、2a層・2b層は褐色粘質土、3a層・3b層はシルト質のある橙色粘質土、4a層は地山風化土を含むふい橙色粘質土、4b層は華大から人頭大の地山形成岩を多量に含む褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.35～0.55mで北側へ緩やかに傾斜する地山が検出され、一部平坦面らしき部分もみられたが、岩盤の凹凸が顕著で表面に風化礫を多く残すことから自然地形と判断した。遺構や昭和40年の試掘調査の痕跡は検出されなかった。トレンチの平面図は未測。

遺物は2層～4層で弥生土器片、緑色玄武岩や赤色珪質岩の破片がわずかに出土した程度で、図示できるものはなかった。

A-3トレンチ[1次調査](図2-07) A-1トレンチの1段上の平坦部で、この部分についても昭和40年の試掘調査地点との関係者の証言があったことからトレンチを設定した。平坦部に直交するように南北方向の0.5m×1.5mのトレンチを設定した。層序は1層が表土、2層が褐色粘質土、3層は岩盤の風化礫を含む明黄褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.3～0.7mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構や遺物のほか、昭和40年時の試掘調査の痕跡は検出されなかった。トレンチの平面図は未測。

A-4トレンチ[1次調査](図2-08) A-1トレンチから1段下の平坦部にいたる傾斜地で、この部分についても昭和40年の試掘調査地点との関係

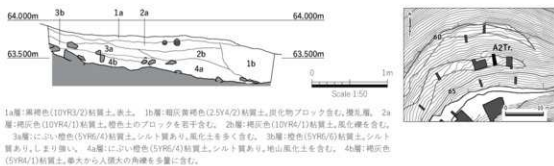


図2-06 村島宮の首遺跡 A-2トレンチ断面図



図2-07 村島宮の首遺跡 A-3トレンチ断面図

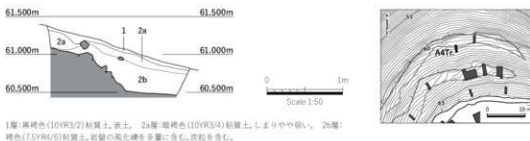


図2-08 村島宮の首遺跡 A-4トレンチ断面図

者の証言があったことからトレンチを設定した。斜面の裾部に南北方向の0.5m×2.0mのトレンチを設定した。層序は1層が表土、2a層が暗褐色粘質土、2b層は準大の地山形成岩を多量に含む褐色粘質土で、地山は岩盤層である。地表下約0.3～0.55mで北方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。北側では平坦部もみられたが、覆土から考えて後世の耕作等による地山整形の痕跡と思われる。遺構や昭和40年の試掘調査の痕跡は検出されなかった。トレンチの平面図は未測。

遺物は1層と2層で弥生土器片、緑色玄武岩の剥片がわずかに出土した程度で、図示できるものはなかった。

A-5トレンチ[2・3次調査](図2-09) A-3トレ

ンチの上方で、道路直下の狭い平坦部にトレンチを設定した。当初は平坦部に直交するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張し、最終的に凸形状のトレンチとした。2次調査では地表下約1.0mで平坦面とその前面に溝状の遺構が検出されたことから、3次調査で遺構部分を中心に東西へ0.5mずつ拡張した。層序は1層が表土と現代の造成土、2層がしまりの弱い褐色粘質土、3a層・3b層はともにしまりのやや強い褐色粘質土、地山はシルト質のある粘質土層である。

遺構は平坦面から北側の落ち際付近で溝状遺構(SD01)と土坑(SK01)が検出された。いずれも地山面での検出である。SD01は東西で長さ13.3m、

幅0.3～0.6m、深さ0.4mを測る。断面はV字状で、溝底は西側に向かって傾斜しており、東側は深さ幅とも収束傾向にある。SK01はSD01に切られ、検出部で長さ0.4m、深さ0.2mを測る。両遺構とも遺物は出土せず時期は不明であるが、これらを被覆する3層からはわずかではあるが弥生土器片が出土していることから弥生期の遺構と判断した。

遺物は大半が2層からの出土で、図示したもののほかには弥生土器、緑色玄武岩や赤色珪質岩の

剥片などが出土している。また弥生期の遺物のほかに中世の瓦器(7)も出土している。

A-5トレンチ出土遺物(図2-10) 6は弥生土器の壺の底部で、平底である。S7～S10は石器で、S7は緑色玄武岩、S8～S9は赤色珪質岩である。S7は剥片で、板状石斧のものと思われる。表面には自然面を残している。S8は小型の石鏃で、形状は正三角形に近く凸底である。S9は剥片で、裏面に広い剥離面がみられる。S10は小型の投彈で、流紋岩製である。

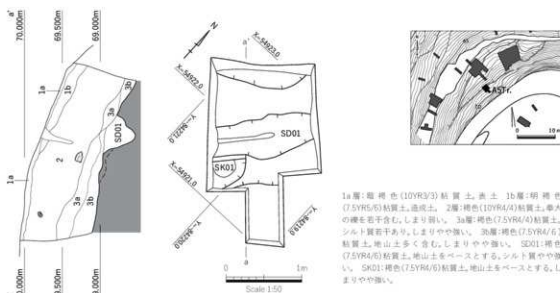


図2-09 村島宮の首遺跡 A-5トレンチ平面図

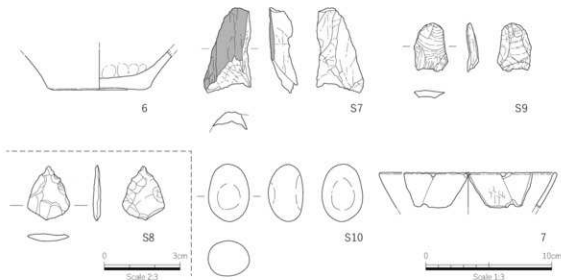


図2-10 村島宮の首遺跡 A-5トレンチ出土遺物実測図

弥生時代以外の遺物では7の瓦器が出土している。堦の口縁部で、端部は丸く、内面にはミガキの痕跡がわずかにみられる。

A-6トレンチ〔2・3次調査〕(図2-11,12) A-3トレンチの1段上の平坦部で、当初は平坦部に直交するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張した。2次調査では遺物が比較的多く出土し、地山の落ち込み部も検出されたことから北側に徐々に拡張していき長さ約6mのトレンチとした。3次調査では落ち込み部の拡がりを確認するために、東側に約2m、西側に約1.5m拡張した。層序は1層が表土、2a層・2b層はともに褐色粘質土、3a層・3b層はともにしまりのやや強い褐色粘質土、地山はシルト質のある粘質土層だが北側の斜面部では岩盤層が露出している。地表下約0.2～0.5mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出されたが、トレンチ中央付近は比較的近いからである。遺構はトレンチ中央付近に集中して検出された。いずれも地山面での検出である。

段状遺構(SH01)は、南側の壁面は直線的だが東側をSK01に切られており全体的な平面形状は不明である。SK02やSP09にも切られる。検出部で東西の長さ約1.1m、床面の奥行は約1.6m、壁高は高いところで0.3mを測る。壁面は緩やかに落ち、床面は比較的平坦で、北側の緩やかに下り始めるまでの平坦面を段状遺構とした。壁面沿いでは周壁溝となるものは検出されなかった。埋土は1層で褐色系の粘質土である。遺物は埋土中から砥石(S27)のほか少量の弥生土器と緑色玄武岩の剥片が出土している。

溝状遺構は平坦部と平行する2条(SD01・SD02)が検出された。SD01は検出部で東西の長さ約1.2m、幅約0.3～0.6m、深さ約0.13mを測り、溝底は平坦である。SD02は検出部で東西の長さ約0.6m、幅約0.2m、深さ約0.1mを測り、丸底である。SK01を切っている。遺物はSD01・02ともに弥生土器の細片がわずかに出土した程度である。

土坑は平坦部に対してやや斜方向の2基

(SK01-SK02)が検出された。SK01は東西の長さ約3.0m、南北の幅約1.2mの不整形円形の平面形で、深さは深いところで0.48mを測る。SH01とSK02を切っている。床面は全体的に東から西へ緩やかに傾斜し、中央部には窪みがみられる。埋土は2層からなり、遺物は埋土中から高坏(17)のほか、弥生土器と赤色珪質岩の剥片などがごく少量出土している。SK02は東西の長さ約1.94m、南北の幅約0.74mの隅丸長方形の平面形で、深さは深いところで0.34mを測る。SH01を切っている。壁面はほぼ直立し、床面は平坦である。埋土は3層からなり、遺物は埋土中から伐採石斧と石廂丁の未成品(S14-S24)のほか、弥生土器と緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などがごく少量出土している。ピットは計9基(SP01～09)が検出された。このうちSP01～08は比較的近くにまとまっており、円形～不整形の平面形を呈し、大きさは長径で0.14～0.33m、深さは0.03～0.35mと様々である。SP01はSK02を切っている。遺物はSP02で甕(8)が出土しているほか、SP06-07から弥生土器細片がごく少量出土している。SP09はトレンチ西壁際で検出され、約0.4mの隅丸長方形の平面形を呈している。SH01を切っている。深さは約0.4mを測り、床面は歪な形状である。埋土は1層で、弥生土器細片がごく少量出土している。これら遺構からSH01→SK02→SK01の切り合い関係が確認でき、少なくとも3時期の変遷が考えられる。

遺物は2層と3層から比較的多く出土しており、図示したもののほかにも緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが出土している。

A-6トレンチ出土遺物(図2-13-16) 8～20は弥生土器で、8～14は甕、15～17は高坏である。8～13の甕は肩部から内傾して立ち上り、口頸部が緩やかに大きく反する形状で、8～11は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁、12・13は粘土帯を貼付けない素口縁のものである。8～12は口縁端部の下端に刻目を施している。8は粘土帯の直下に微隆起突帯を1条巡らしている。口縁端部はやや尖り気味である。9は大型の甕で、幅広

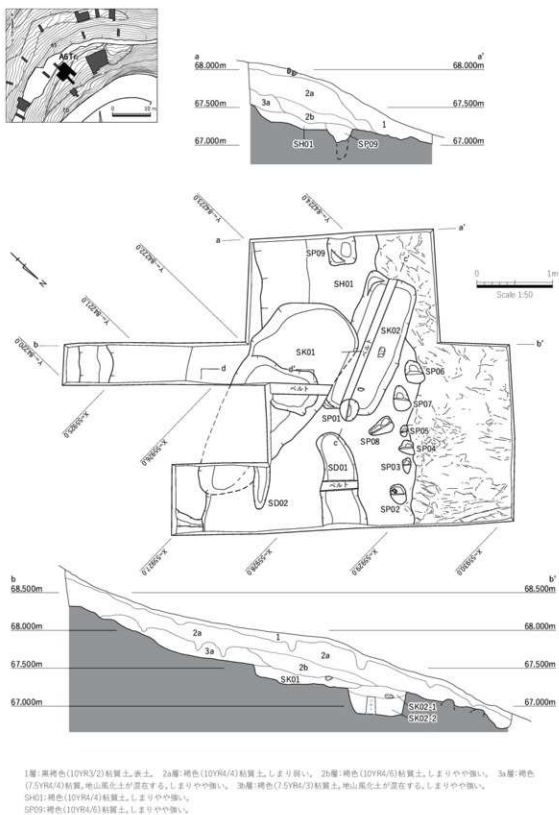


図2-11 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ平面断面図(1)

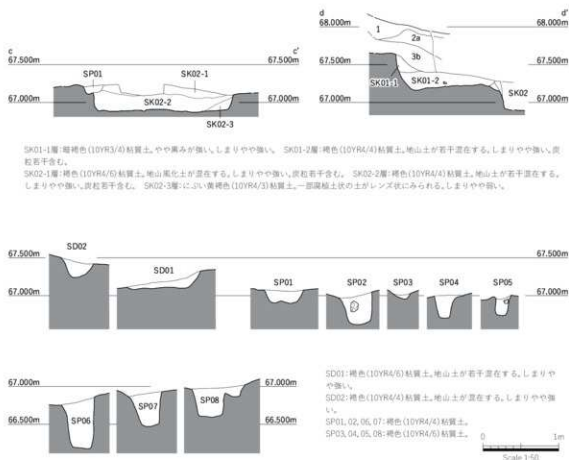


図2-12 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ断面図(2)

の粘土帯は指頭圧痕により扁平となっている。口縁端部はやや凹み下端が肥厚している。10は粘土帯下端の段差が低く、指頭圧痕により一部消えている。口縁端部は面をなす。11は幅広の粘土帯上に指頭圧痕を文様状に連続して施している。粘土帯下端の段差は低く、指頭痕により一部消えた部分もみられる。口縁端部は面をなす。肩部には微隆起突帯を1条巡らしている。12・13は口縁端部をいずれも丸く仕上げている。14は口縁部が内面に稜を成して強く屈曲する折り曲げ口縁のものである。外面屈曲部からやや下がった位置に押圧のある貼付突帯を施している。15・16は高坏の坏口口縁部である。15は口縁端部が外方に拡張され上面は水平となる。上面には焼成前の穿孔がみられる。16は大型の高坏で、口縁部が強く屈曲する折り曲げ口縁で、上面は水平となる。口縁端部は丸く仕上げ、下端には小さい刻目を施している。17は脚

柱部で、中実のものである。14・17は色調が特徴的な橙色系で、焼成や胎土などにも共通点がみられる。18～20は底部で、18が壺で、19・20は壘と思われる。18・19は外底面の中央部がわずかに凹み、接地面が輪状を呈している。20は平底である。

S11～S27は石器である。S11～S19は緑色玄武岩、S20～S23は赤色珪質岩である。S11～S13は板状石斧である。S11は刃部の破片で、両側縁部の一部に研磨痕が残っていることから、先端が細くなる平面形状と思われる。裏表面ともに刃先の狭い範囲のみ丁寧に研磨され、そのほかは広い剥離面を残している。S12も刃部の破片で、半分以上は欠損しているが刃先は弧を描く形状と思われる。刃先のみ丁寧に研磨され、そのほかには打裂痕もみられる。S13は刃部を折損したものである。肩部には広い剥離面を残し、両側縁部と

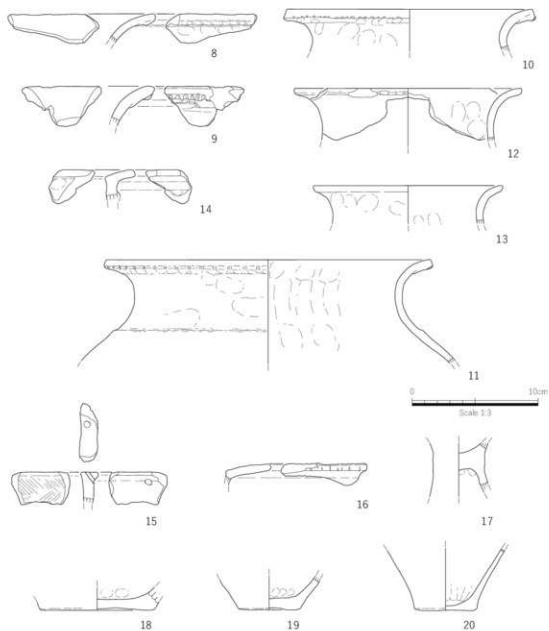


図2-13 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物実測図(1)

基部は細かく加工されている。全体的に使用によると思われる摩耗がみられる。被熱によるものか赤く変色している。S14・S15は未成品で、S14が伐採石斧、S15が板状石斧の未成品である。S14は敲打段階のもので、基部を除き全面に敲打痕がみられるが、一部には自然面や打裂痕も残している。S15は表裏面に広い剥離面を残し、片側の側縁部に細かい打裂痕がみられる。S16は板状石斧

の素材と考えられるものである。表面はほぼ全面に自然面、裏面には広い剥離面がみられる。全体的に細かい打裂痕がみられないことから、自然礫から剥ぎ取った状態のものと思われる。S17～S19は剥片で、S17・S18が伐採石斧、S19が板状石斧と思われる。S17・S18は裏面が大きく剥離し、表面には打裂痕と一部に敲打痕がみられる。打裂成形後の敲打整形が開始された段階のものであ

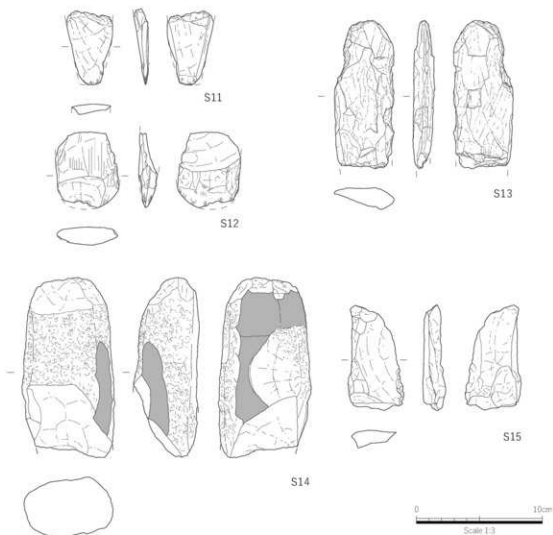


図2-14 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物実測図(2)

る。S19は裏面が大きく剥離し、表面には打裂痕がみられる。S20～S22は赤色珪質岩製の石礫である。S20は形状が二等辺三角形を呈し、一部欠損するが平基となる。S21・S22は全長が3.0cmを越える大型の石礫で、S21は形状が二等辺三角形で基部は有茎、S22は形状が木の葉形を呈し基部は丸みのある凸基である。S23は赤色珪質岩の石核で、表面に自然面、裏面には広い剥離面を残す。S24は緑色片岩製で、裏面が大きく剥離しているものの扁平な楕円形を呈し、両面に研磨痕がみられる。側縁部も研磨により丸く仕上げている。形状から石砲丁もしくはその未成品の可能性があり。S25は扁平な円盤状の礫で、側縁部の下部を

細かい打裂で凹ませているほか、他にも小さく打ち欠いた部分が数箇所確認できることから石錘と判断した。緑色玄武岩製と思われる。S26は小型の投弾で、流紋岩製である。S27は砂岩製の砥石で、表面と側面の一部が残る。残存部分は断面三角形を呈し、2面に研磨痕が確認できる。目はやや粗い。

A-7トレンチ[2・3次調査](図2-17,18) A-6トレンチと同じ平坦部で、東側約6mの位置にトレンチを設定した。当初は平坦部に直交するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張した。2次調査では遺物が比較的多く出土し、段状遺構や溝

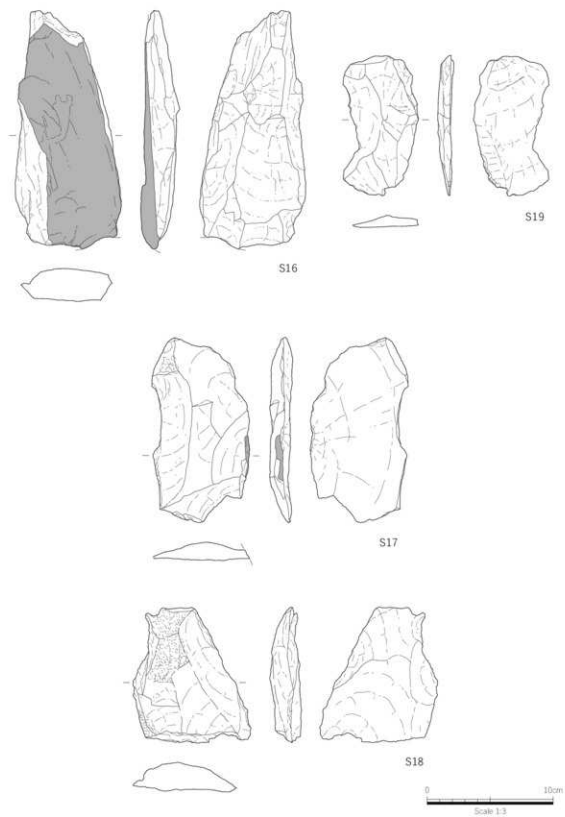


図2-15 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物実測図(3)

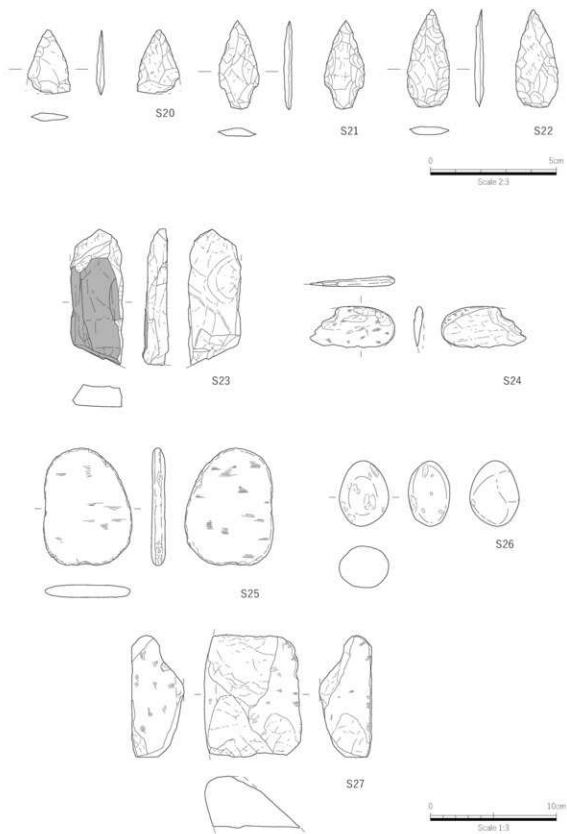


図2-16 村島宮の首遺跡 A-6トレンチ出土遺物実測図(4)

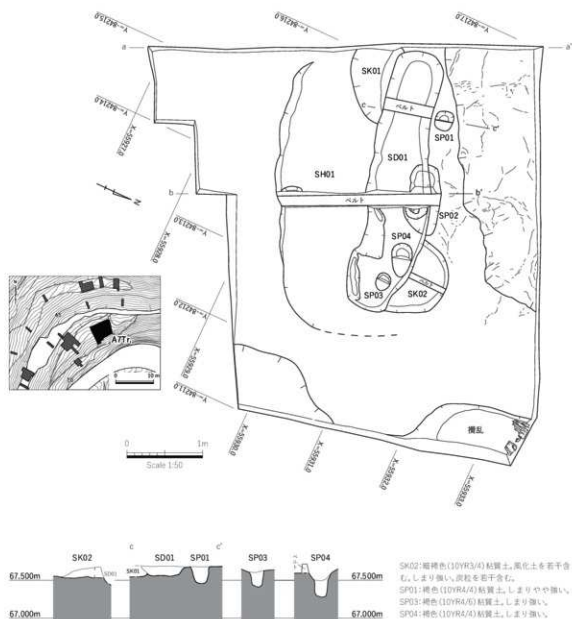
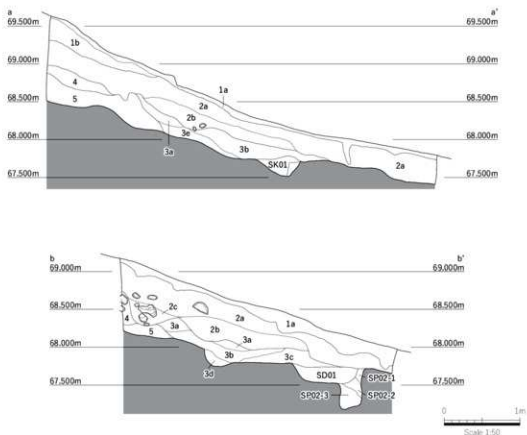


図2-17 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ平面断面図(1)

状遺構などが検出されたことから南・北および東側に徐々に拡張していき約2m×3mのトレンチとした。3次調査では段状遺構と溝状遺構の拡がりやその詳細を確認するために、東側および北側に拡張して最終的には約5m×4mのトレンチとし、地山の傾斜を確認するために北側にも一部1m程度拡張した。層序は1層が表土、2a～2c層はともに褐色系の粘質土、3a～3c層がしまりのやや強い褐色系の粘質土、4層は礫を多く含む黄

褐色粘質土、5層はシルト質の強い明褐色粘質土、地山はシルト質のある粘質土層で、北側の傾斜部では一部岩盤層が露出している。地表下約0.3～1.1mで北方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構はトレンチの中央部で検出され、いずれも地山面での検出である。

段状遺構(SH01)は、平面形は南側の壁面部は直線的で東西の隅でやや弧を描くが、その前面にある平坦面は、北側で下り始める部分以外は周囲



1a層:暗褐色(10YR3/3)粘質土。赤土。1b層:赤褐色(5YR4/5)粘質土。造成土。2a層:褐色(10YR4/6)粘質土。3cm〜5cm大の河原石を多く含む。しまり強い。2b層:褐色(10YR4/4)粘質土。3cm〜5cm大の河原石を含む。しまり強い。2c層:1)赤褐色(10YR4/3)粘質土。赤土。赤褐色(10YR4/3)粘質土。1〜3cm大の中礫若干含む。土器破片。炭粒多く含む。しまりやや強い。2)赤褐色(10YR4/3)粘質土。1〜5cmの中礫若干含む。地山土を若干含む。土器破片。炭粒多く含む。しまりやや強い。3)赤褐色(10YR4/3)粘質土。5cm大の中礫若干含む。地山土を若干含む。炭粒若干含む。しまりやや強い。3a層:褐色(10YR4/5)粘質土。地山土を若干含む。炭粒ごく少量含む。しまりやや強い。3b層:褐色(10YR4/6)粘質土。地山土を多く含む。炭粒若干含む。しまりやや強い。4層:黄褐色(10YR5/6)粘質土。2〜30cm大の片礫・河原石を多く含む。シルト質の地山土がブロック状に存在する。しまり強い。5層:明褐色(5YR5/6)粘質土。シルト質の地山土をベースとする。炭粒ごく少量含む。しまりやや強い。

SD01:暗褐色(10YR3/4)粘質土。地山土を若干含む。炭粒多く含む。しまりやや強い。

SP02-1層:明褐色(7.5YR5/6)粘質土。地山土をベースとする。ややシルト質あり。しまりやや強い。SP02-2層:褐色(10YR4/6)粘質土。ややシルト質あり。しまりやや強い。SP02-3層:褐色(10YR4/4)粘質土。地山土を若干含む。ややシルト質あり。しまりやや強い。

SK01:明赤褐色(5YR5/8)粘質土。シルト質の地山土をベースとする。しまりやや強い。

図2-18 村島宮の首遺跡 A-7トレチ平面断面図(2)

との境界が曖昧であり、全体的な平面形状は不明瞭である。壁面部分で東西の長さ約3.5m、床面の奥行は約2.1m〜2.7m、壁高は0.2mを測る。壁面は西側が比較的きつい傾斜で落ち込むのに対して、東側は緩やかで徐々に平坦面へと移行していく。壁面沿いでは一部凹みが見られたが、周壁溝となるものは検出されなかった。埋土は地形に合わせて南から流入した3層が堆積し、細かく分層できるが、基本的には褐色〜暗褐色の粘質土であ

る。平坦面内では溝状遺構(SD01)が検出されたが、SD01の埋土を3層が被覆している状況から、SH01はSD01埋没後の遺構と考えられる。遺物は床面からの出土はなく、3層中からは弥生土器(22・24・26・28・34・36・38・42・47・51・55・57・61・62・64・65・68)、伐採石斧剥片(S45)、板状石斧(S40)未成品(S47)剥片(S48・S50)、不明石器(S41)、石鏃(S53〜S55)、石核(S61・S63・S64)、鑿形石斧(S66)、磨石(S70)、石皿(S71)、砥石(S72)など

が出土している。

溝状遺構(SD01)はSH01とほぼ平行して検出された。東西の長さ約3.5m、幅約0.65～0.8mで、直線的に延び東南部がやや膨らみをみせる。深さは約0.25mを測り、溝底は平坦ではあるが全体的に西側へ傾斜しており、東南部の壁面際には一部凹みもみられた。埋土は1層で、遺物は板状石斧剥片(S52)が床面で出土したほかは、埋土中から弥生土器(48・53・67)、伐採石斧剥片(S46)、赤色珪質岩の剥片が出土している。

土坑は2基(SK01・02)が検出された。いずれもSD01に切られている。SK01は検出部で東西の長さ約1.0m、南北の長さ約0.8mの楕円形状と推定され、深さは0.2mを測り、溝底は尖り気味である。埋土は1層で、遺物の出土はなかった。SK02は検出部で東西の長さ約1.0m、南北の長さ約0.5mを測り、楕円状の平面形と推定される。深さは0.1mを測り、溝底は平坦である。埋土は1層で、遺物は埋土中から弥生土器(66)、石鏃(S56)などが出土しているがその数は少ない。

ピットは計4基(SP01～04)が検出された。SP01はSH01の平坦面内で、北側の落ち際付近で検出された。径0.25mの円形で、深さは0.22mを測る。SH01に伴うものかは不明である。埋土内から遺物の出土はなかった。SP02は約0.9m×0.5mの不整楕円形で、深さは0.55mを測る。SD01に切られている。埋土は3層からなり、地形に合わせて南からの流入土により堆積した状況を示している。埋土内からは弥生土器と赤色珪質岩の細片が数点出土したのみである。SP03とSP04はSD01の床面で検出された。いずれも深さ0.2mほどで、遺物はSP04で弥生土器細片がわずかに出土したのみである。これら遺構からSK01・SK02→SD01→SH01の切り合い関係が確認でき、少なくとも3時期の変遷が考えられる。

遺物は2層から最も多く出土しており、図示したものほかにも弥生土器、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが数多く出土している。弥生期以外では中世と思われる土師器(69)や近世の埋管(M2)が出土している。また5層からは板状石斧

(S29)が1点出土している。

A-7トレンチ出土遺物(図2-19-29) 21～68は弥生土器で、21～28は壺、29～56は甕である。21は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁で、口縁端部は面をなす。粘土帯の全面に縦長の細い刻目を施している。22は口縁端部の上端を上方へつまみ上げて広い面とし、端部全面に縦長の刻目を施している。23は口縁部が大きく外反し、下方にやや肥厚した口縁端部の上面には断面台形の粘土帯を貼付けている。端部下端に小さめの刻目を施している。オリブ褐色を呈し、他の土器とは色調が異なる。東九州系の可能性がある。24は凹線文系の壺である。口縁部が大きく外反し、口縁端部が上下にやや肥厚する。端部に浅い凹線文が1条施されているが、磨滅しており本来は2条あったものと思われる。また口縁部からやや下がった位置にも沈線状の凹線文が1条確認できる。25は直口口縁の壺と思われる。口縁端部は丸みをもち、端部全面に刻目を施している。26は小型の細頸壺で、口縁部がやや外反する。口縁端部はやや丸みをもつ。外面には櫛波状文と円形浮文を施している。27は広口壺の頸部で、断面三角形の貼付突帯2条が施されている。28は小型の細頸壺の頸部で、上から櫛波直線文2段、断面三角形の小型の突帯2段、櫛波直線文が巡らされている。29～40は肩部から内傾して立ち上り、口頸部が緩やかに大きく外反する甕である。29～34は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁で、35～40は粘土帯を貼付けない素口縁のものである。29・30は細めの粘土帯の下に微隆起突帯を1条巡らしている。口縁端部は29が丸く30は面をなし、いずれも粘土帯上に細い刻目を施している。31・32は粘土帯に盛り上がりを残している。口縁端部は31が尖り気味で、32は面をなし、粘土帯上には細い刻目を施している。33は幅広の粘土帯で、粘土帯上への指頭圧痕により扁平となっている。口縁端部は下方にやや肥厚気味で面をなし、下端には細い刻目を施している。34は大型の甕で、幅広の粘土帯は指頭圧痕とヨコナデにより扁平となっている。口縁端部は下方にやや肥厚して面をなし、端部下端

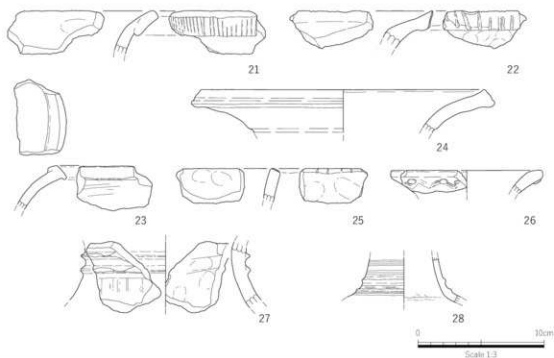


図2-19 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物(1)

に刻目を施している。肩部には断面三角形の貼付突帯2条と2個1セットの棒状の浮文を施している。35は口縁端部のやや下に微隆起突帯を1条貼付けるが、突帯の下をヨコナデすることで部分的に断面三角形形状を呈している。口縁端部は丸く仕上げ、下端には刻目を施している。36～38は口縁端部の下端に刻目を施しているもので、口縁端部は36がやや丸く仕上げ、37・38は面をなしている。38は口縁端部のやや下に板状工具の小口を当てた「ノ」字状の刺突文、肩部に櫛描直線文を施している。39・40は口縁端部に刻目の無いものである。39は外面が粘土帯の幅で若干肥厚し、口縁端部は面をなしている。41は肩部から内傾して立ち上がり、口頸部の外反度はやや緩いものである。口縁端部は面をなしている。器壁が他に比べ非常に薄く特徴的である。42は肩部から内傾して立ち上がり、口頸部がやや間延びして短く外反するものである。口縁端部は上方へ尖り気味でやや丸みもち、下端には小さい刻目を施している。43～46は肩部から内傾して立ち上がり、口頸部の外反度が強いものである。43は口縁端部が下方に

やや肥厚気味で、面をなしている。口縁部外面には指頭圧痕による器面の凹凸が残る。44～46は口縁端部が面をなし、46は凹線状に凹む。いずれも口縁部外面はヨコナデによりやや平滑である。47は口縁部が大きく外方に開くもので、頸部以下の形状は不明である。鉢の可能性もある。口縁端部はやや丸みもち、下端には小さい刻目を施している。48～53は口縁部が内面に稜を成して外方に屈曲するものである。48は大型で口縁部の屈曲が強く、屈曲部内面には明瞭な稜をもつ。口縁端部は面をなし、端部全面に細い刻目を施している。屈曲部外面のやや下の位置には微隆起突帯1条を巡らしている。49～51は屈曲部から口縁端部にかけて破片で、内面の屈曲が49はやや緩やかで50は強い。口縁端部は49は丸みもち、50・51は上方へやや突き出て、51は面をなす。49・50は色調が特徴的な橙色系で、胎土や焼成でも共通点がみられる。52・53は内面の屈曲はやや緩やかで、口縁端部は52は上方へやや突き出て丸みもち、53は面をなしている。54～56は甕の体部で、いずれも肩部から内傾して立ち上がり、口頸部が緩や

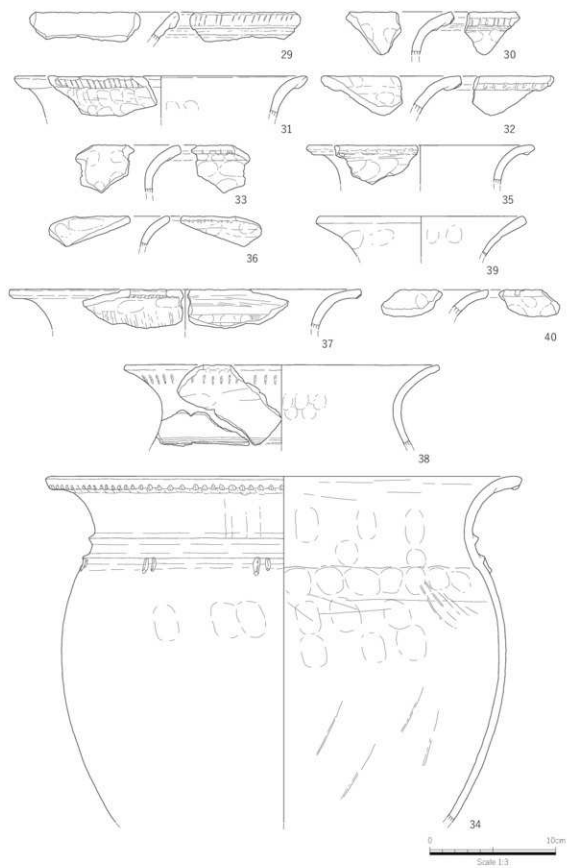


図2-20 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(2)

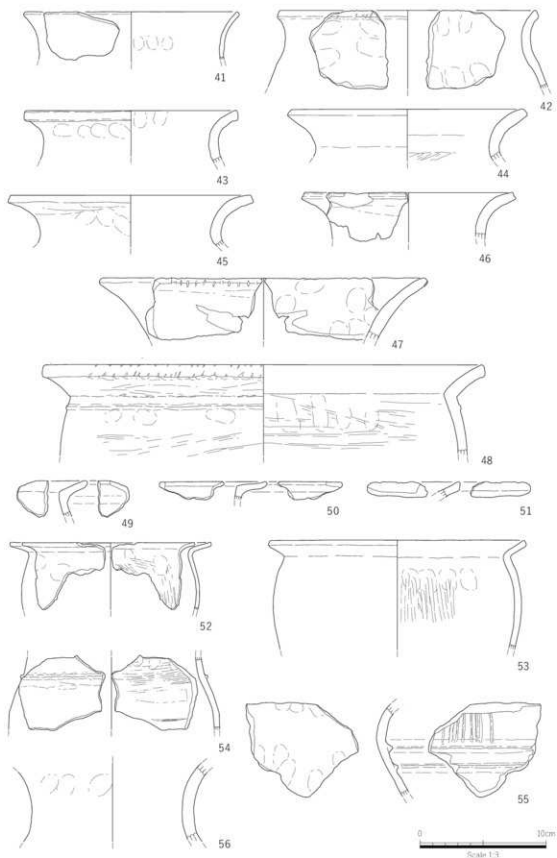


図2-21 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(3)

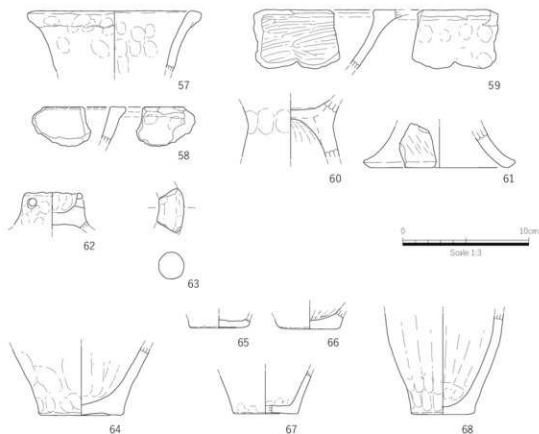


図2-22 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(4)

かに外反する形状のものである。54は肩部に微隆起突帯を1条巡らしている。55は肩部に断面三角形の貼付突帯を2条とその上に縦方向の櫛插直線文を施している。55は大型の甕であり、34と同一個体の可能性がある。57は小型の鉢である。外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁で、粘土帯は指頭圧痕により玉縁状となっている。内外面に指頭圧痕が顕著にみられる。58～61は高坏である。58・59は坏部の口縁部で、58は口縁部が外方にやや拡張され上面が水平となる。59は大型の高坏で、口縁部は端部を欠損しているが、坏部から屈曲して外方に開き上面が水平となるものである。屈曲部内面がやや隆起している。内面にはヘラミガキがみられる。60・61は脚部である。60は坏部との接合は円盤充填である。脚部内面には指押しえの痕跡を明瞭に残している。61は脚部で端部はやや上方に肥厚して丸みをもち、下面はヨコナデによりやや凹んでいる。外面にはヘラミガキがみら

れる。62は蓋の摘み部分と思われる。天井部が上げ底状に大きく凹んでおり、2個の円孔が穿たれている。端部は内側にやや尖り気味で、内外面に指頭圧痕が顕著にみられる。63は把手の破片で、断面は円形である。ジョッキ形土器の把手であろうか。64～68は甕の底部である。64は外底面の中央部がわずかに凹み、接地面が輪状を呈している。65～68はいずれも平底である。66・67は色調が特徴的な橙色系であり、胎土や焼成などでも共通点がみられ口縁部片の49や50とも共通する。

S28～S74は石器である。S28～S52は緑色玄武岩製で、このうちS28～S40は板状石斧の成品である。S28は完形品で平面形は短冊形である。表裏面ともに刃部から下半部にかけて研磨痕がよくみられるが、身部や側縁部には多くの打裂痕を残している。両側縁部は細かく加工されているが、所々研磨され面をなしている。基部は端部のみが研磨され面をなしている。S29～S33は基部側を

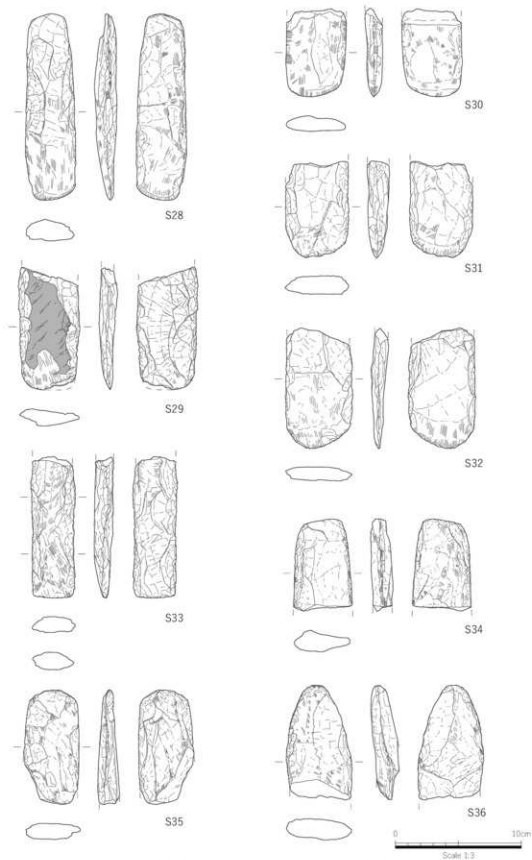


図2-23 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(5)

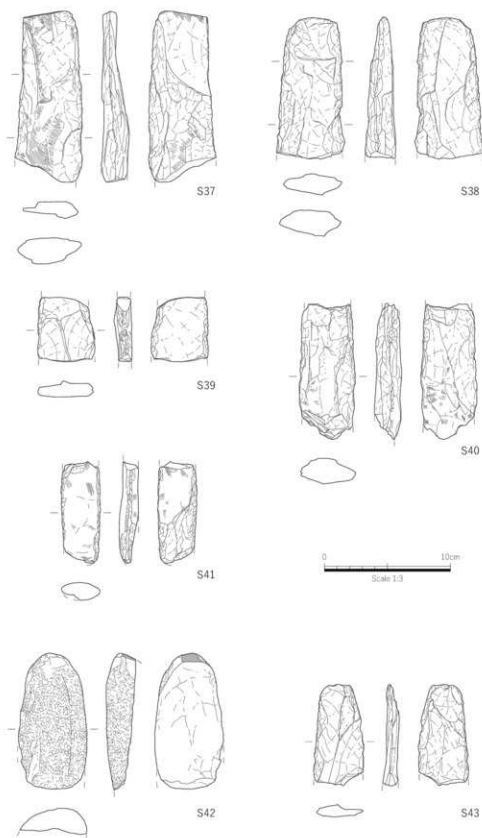


図2-24 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(6)

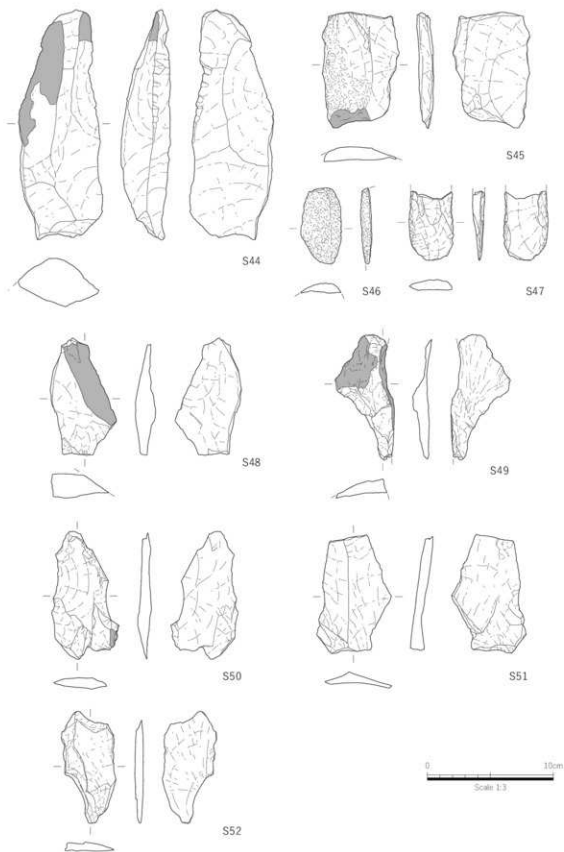


図2-25 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(7)

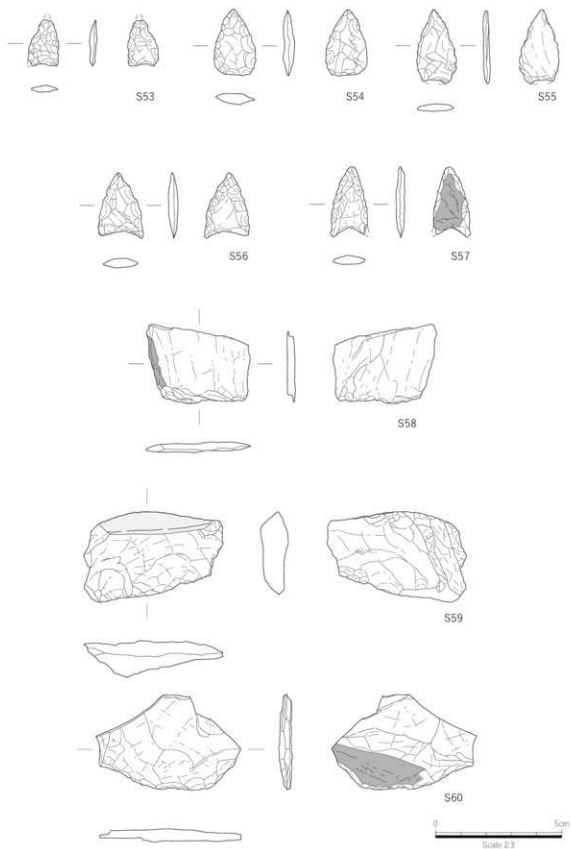


図2-26 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(8)

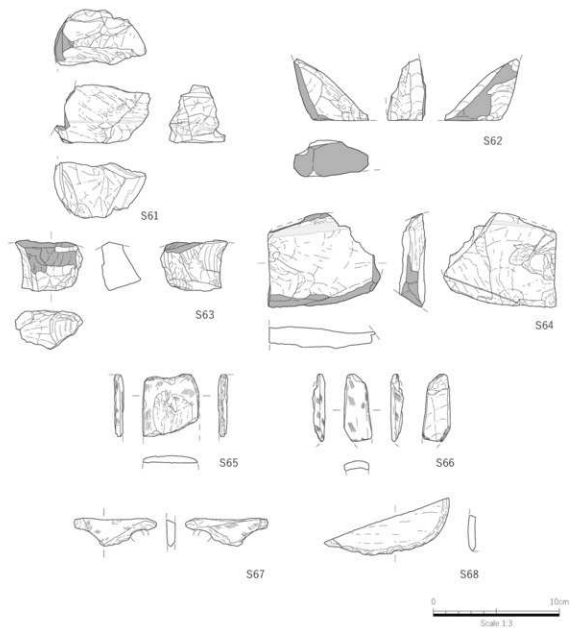


図2-27 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(9)

折損したものである。S29は表裏面ともに刃部付近のみが研磨されており、身部や側縁部には打裂痕を残している。また表面には自然面、裏面には広い剝離面が残している。S30は比較的丁寧な全面が研磨されており、側縁部も研磨により面をなしている。S31・S32は表裏面ともに刃部中心に研磨されており、身部や側縁部には打裂痕を残している。S33は他と比べて細身の形状である。刃部は表裏面ともに剝離面を利用しており、刃部への

研磨は希薄である。身部は表面は中央の凸部を中心に比較的丁寧な研磨されているが、裏面は打裂痕を残したままである。刃部の残るS28～S33のうち、S29・S33以外は刃部が片側に偏っており、さらにS29・S31～S33には刃先の一部に欠損や小さな打点、摩耗が確認できることから、いずれも使用されたものであることがわかる。S34～S38は刃部側を折損したものである。S34・S35は基部が平坦あるいはやや丸みのあるもので、S36は尖

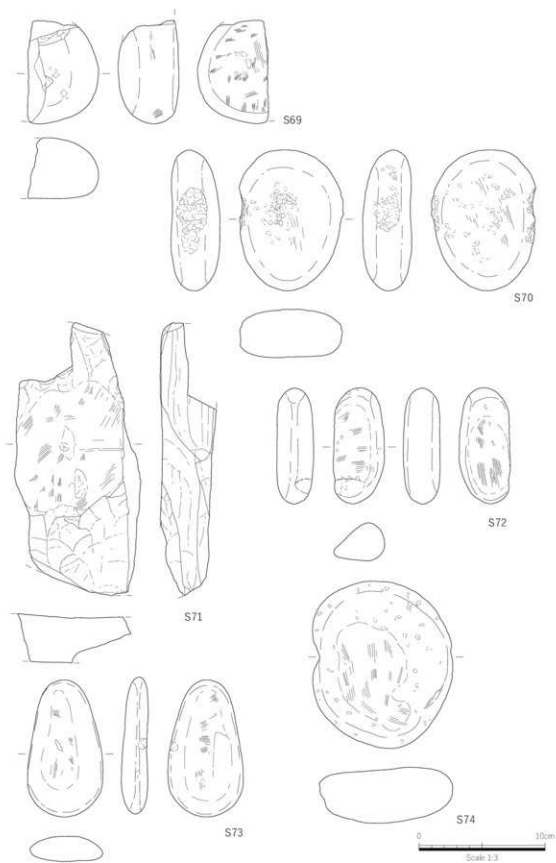


図2-28 村島宮の首遺跡 A-7トレンチ出土遺物実測図(10)



図2-29 村島宮の首遺跡
A-7トレンチ出土遺物実測図(11)

基状のものである。いずれも表裏面に研磨痕が部分的にみられるのみで、基本的には打裂痕を多く残している。側縁部や基部には研磨により面をなしている部分のみみられる。S37-S38は基部が平坦あるいはやや丸みのあるもので、いずれも身は厚めである。S37は表裏面に研磨痕が部分的にみられるのみで、基本的には打裂痕を多く残している。基部は平坦な自然面をそのまま利用している。S38は研磨痕はみられないが、わずかに磨滅痕が認められることから成品と判断した。全面に打裂痕を残し、裏面には広い剥離面も残している。S39-S40は刃部と基部の両方を折損したものである。S39は裏面に広い剥離面を残し、研磨痕は側縁部のみに限られ、研磨された部分は面をなしている。S40は表裏面に研磨痕は部分的にみられるのみで、基本的には打裂痕を多く残している。S41は他の板状石斧とは大きさや形状などが異なることから不明石器とした。上下を欠損するが、先端に向かって丸みを帯び始めている方を刃部側とした。細身で断面形は杏仁形である。裏面の半分が剥離しているが、表裏面ともに全面が研磨され、側縁部だけに細かい打裂痕を残している。S42-S43は未成品で、S42が伐採石斧、S43が板状石斧の未成品である。S42は基部側の未成品で、裏面を大きく剥離している。敲打整形のかなり進んだもので、全面敲打痕で打裂痕はほとんど残っていない。基部は平坦な自然面をそのまま利用し、周囲を打裂でやや丸く仕上げている。S43

は基部側の未成品と思われ、表裏面の全面に打裂痕がみられ、基部と側縁部には細かい打裂痕もみられる。S44は伐採石斧の素材と考えられるものである。断面形は菱形を呈し、2面に自然面を残し、広い剥離面も多くみられる。細かい打裂痕はみられず打裂成形が始まっていないことから、自然礫を分割して素材を剥ぎ取った状態のものと思われる。S45～S52は剥片で、S45・S46が伐採石斧、S47～S52が板状石斧のものと思われる。S45は裏面が大きく剥離し、表面には広い剥離面と敲打痕がみられ、自然面も一部残っている。打裂成形後に敲打が開始された段階のものと思われる。石材の質は板状石斧のものに近い。S46は伐採石斧の基部付近と思われ、裏面が大きく剥離し、表面には全面に敲打痕がみられる。敲打整形のかなり進んだ段階のものである。S47は裏面が大きく剥離し、表面には全面に打裂痕、周縁部には細かい打裂痕がみられる。板状石斧の整形段階のものと思われる。S48～S52は片面に広い剥離痕がみられ、細かい打裂痕はみられないものである。S48～S50は自然面が一部残っている。S53～S64は赤色珪質岩製である。S53～S57は石鏃で、いずれも形状は二等辺三角形を呈し、S53～S55が平基、S56・S57が凹基である。S55は基部の一部を欠損しているが丸みのある平基になるとと思われる。S58～S60はスクレイパーである。S58・S59は表裏面に広い剥離面を残し、下辺を表裏両面から細かい加工を行い直線的な刃部を作っている。S58は側面に節理面を、S59は上辺に石英の貫入面を残している。S60は表面に広い剥離面を残し、下辺を表裏両面から細かい加工を行い、緩やかな弧状の刃部を作っている。裏面には自然面を一部残している。S61～S64は赤色珪質岩の石核である。いずれも自然面を一部残しており、自然面の位置から1辺のみのおおきさではあるが、S62が3.0cm、S64が7.0cm程度の幅だったことが推定される。S61・S64には石英の貫入がみられる。S65は柱状片刃石斧である。薄く剥離したもので、右側面側の基部に近い部分と思われ、わずかではあるが両主面と基面も残っている。残存部には全面に研

磨痕がみられる。緑色片岩製である。S66は小型の石斧で、刃先を欠損し裏面に全面剥離しているが、鑿形になると思われる。基部が窄まり刃部に向かっては開き気味となり、刃部は研ぎ直されているのか左右非対称の形状である。残存部には全面に研磨痕がみられる。緑色片岩製である。S67は石庖丁である。組孔1箇所の一部分のみがわずかに残存した破片であり、全体形は不明である。組孔には2回穿孔された痕跡が認められる。表裏の両面に研磨痕がみられ平滑に仕上げられている。緑色片岩製である。S68は石庖丁の未成品と思われる。裏面を欠損し、表面は自然面を残している。研磨痕はみられず、下部部に細かい打裂痕がみられる。緑色片岩製である。S69・S70はともに砂岩製の磨石である。S69は半分程度欠損しており全体形は不明である。表面は凸面状を呈し、裏面は平坦で、裏面のほぼ全面に研磨痕がみられる。目は粗い。S70は表裏の両面と側部に使用痕が確認できる。表面はやや凸面状を呈し、中央付近に敲打痕と狭い範囲に研磨痕がみられる。裏面は平坦で、裏面のほぼ全面に敲打痕と研磨痕がみられる。側部は左右それぞれに敲打痕による凹みがみられる。目は粗い。S71は石皿である。左右を欠損しており全体形は不明である。表面のみに使用痕が確認でき、中央部分に円形状に研磨痕があり中央に向かって若干凹んでいる。緑色玄武岩

製で板状石斧の石材と思われる。S72～S74は砥石である。S72・S73は手持砥で、S72は長楕円形を呈し断面は丸みのある三角形である。表裏両面の中央部に研磨痕がみられる。目はやや粗い。流紋岩製である。S73は下部がやや広がる楕円形状を呈する。扁平な面の両面に研磨痕がみられ、裏面には工具痕らしき凹みも認められる。目は細かい。安山岩製である。S74は扁平な円形を呈する。表面のみに使用痕が確認でき、中央部分に研磨痕があり若干凹んでいる。目はやや粗い。流紋岩製である。

弥生時代以外の遺物では、69の土師器とM2の銅製の煙管が出土している。69は皿か杯の底部で、外面には回転ヘラ切り痕がみられる。M2は雁首部分で、火皿は大型で火皿下に補強帯が付き、肩部に段差のないものである。

A-8トレンチ[2次調査](図2-30) A区では最も東側にあたり、A-1トレンチの山手側の傾斜地にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2a層・2b層はともに褐色粘質土、3層はややシルト質のある褐色粘質土、4層はシルト質が強くしまりも強い明褐色粘質土、地山はシルト質のある粘質土層である。地表下約0.55～1.05mで地山が検出され、北側へ地山が落ち込んでその前面にやや平坦となる部分が出された。段状遺構の一部となる可能性も考えられるが、これを被覆する4層

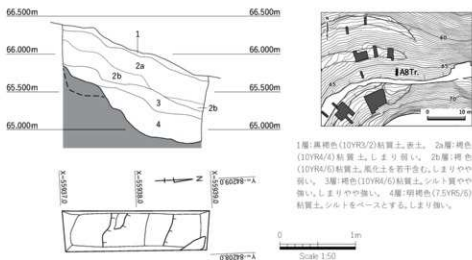


図2-30 村島宮の首遺跡 A-8トレンチ平面断面図

および3層からは遺物の出土がみられず、その詳細は不明である。

遺物は2層から出土しており、図示したもののほかには近世の火鉢片が出土しているのみである。

A-8トレンチ出土遺物(図2-31) 70は弥生土器で、広口壺の頸部と思われる。断面三角形の貼付突帯2条が施されている。S75は緑色玄武岩製の板状石斧で、刃部側を折損したものである。表裏面ともに身の中央付近に研磨痕が若干みられるが、多くは細かい打裂痕を残したままである。基部も打裂痕のままである。

A-9トレンチ[2次調査](図2-32) A-1・A-2トレンチと同じ平坦部で、A-2トレンチの東側約2.5mの位置にトレンチを設定した。当初は平坦部に直交するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張し、最終的には1.5m×2.5m程度のトレンチとした。層序は1層が表土、2a層・2b層はともにしまりのやや弱い褐色系の粘質土、3層がしまりのやや強いにぶい黄褐色粘質土、4a層・4b層・4c層はともに地山土を含みしまりの強い褐色系の粘質土、地山はシルト質のある粘質土層である。

遺構は、地山面で段状遺構(SH01)が検出された。全体的な形状は不明であるが半円形に近い形状と推測され、検出部で東西の長さ約1.3m、床面の奥行は約2.0m、壁高は高いところで0.3mを

測る。床面は上下2段からなり、壁面から奥行約0.6mほどの平坦面と、北側に0.2mほど緩やかに下ってもう1つの平坦面がある。壁面沿いで周壁溝となるものは検出されなかった。埋土は地形に合わせて南から流入した4層で褐色系の粘質土である。SH01内では上段でピット(SP01)、下段で溝状遺構(SD01)が検出された。SP01は下段への落ち際で検出され、南北の長さ約0.55m、東西の幅約0.25mの楕円形で、深さは0.3mを測る。埋土内からは弥生土器と赤色珪質岩の細片が数点出土したのみである。SD01は上段から下がりがきった壁際で検出され、東西で長さ1.4m、幅0.15～0.20m、深さ0.1mを測る。断面V字状へ丸底である。遺物の出土はなかった。SH01の埋土となる4層からは、高坏(73)、伐採石斧の剥片(S79)のほか弥生土器の細片が数点出土したのみである。

遺物の大半は2層から出土しているが全体量は少なく、図示したもののほかには弥生土器の細片、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが出土している。3層からは板状石斧の未成品(S77)のほかは、弥生土器細片が数点出土したのみである。

A-9トレンチ出土遺物(図2-33-35) 71～74は弥生土器である。71・72は甕で、外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁で、口縁端部は面をなす。71は幅広の粘土帯の下端に刻目を施している。内面に浮文らしきものが剥離した痕跡がある。72は幅広の粘土帯で、粘土帯上への指頭圧痕により扁平

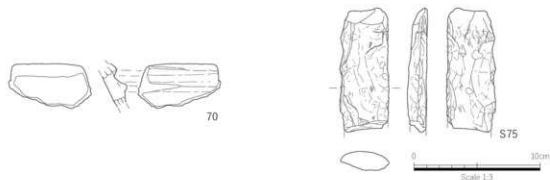


図2-31 A-8トレンチ出土遺物実測図

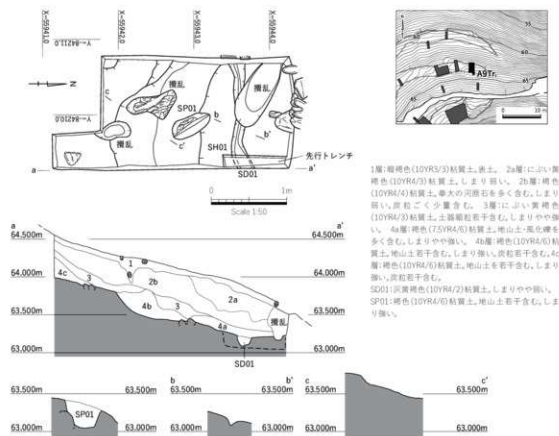


図2-32 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ平面断面図

となり、下端の段差は低く一部消えかかっている。口縁部下端には細い刻目を施している。73は高坏の坏部口縁部で、口縁部が内外方にやや拡張され上面が水平となる。外側の口縁部には刻目を施している。内面にはヘラミガキがみられる。74は甕の底部で、外底部を外方につまみ出した上げ底である。

S76～S86は石器である。S76～S80は緑色玄武岩製である。S76は伐採石斧の未成品で、敲打段階のものである。断面三角形の素材に対して各頂部を打裂成形と敲打整形により断面円形に近付けようとした意図がうかがえ、頂部以外の各面には自然面を大きく残している。基部には敲打痕が及んでおらず打裂痕を残したままである。S77は板状石斧の未成品である。周縁部に細かい打裂痕がみられ、表面には広い剥離面を残している。S78は伐採石斧の素材と考えられるものである。形状は四角錐台形で、2面に自然面を残している。

細かい打裂痕はさほどみられず成形作業が始まってないことから、自然礫を分割して素材を剥ぎ取った残りの部分と思われる。S79・S80は剥片で、S79が伐採石斧、S80が板状石斧のものと思われる。S79は裏面が大きく剥離し、表面には細かい打裂痕がみられる。S80は裏面が大きく剥離し、表面には細かい打裂痕と節理面がみられる。未成品の可能性もある。S81は赤色珪質岩製の剥片で側面に自然面を残す。S82は小型の投擲で、流紋岩製である。S83は用途不明の自然礫である。棒状で加工跡はみられないが先端に撫痕が確認できる。S84～S86は砥石で、いずれも流紋岩製である。S84・S85はいずれも表面と側面の一部が残るもので、両面に研磨痕が残る。いずれも比較的目的は細かい。S86は完形形で直方体状を呈する。表面の一面のみが使用されており、中央部には円形の範囲で研磨痕がみられる。目はやや細かい。

A-10トレンチ[2次調査](図2-36) A-3-A-17

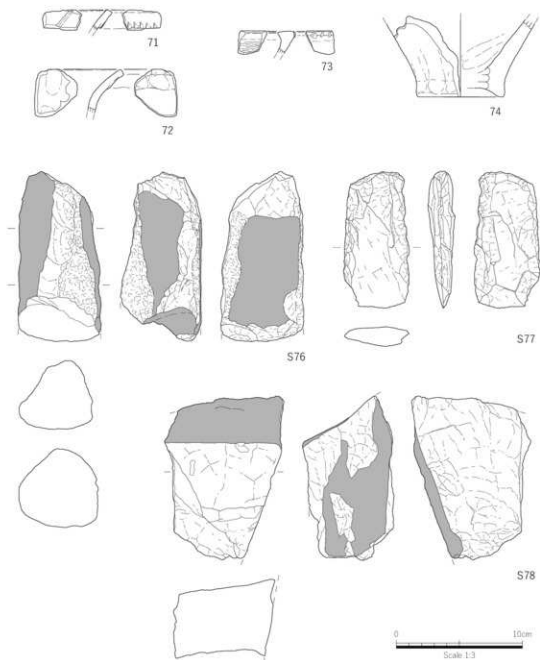


図2-33 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物実測図(1)

トレンチと同じ平坦部で、A-3トレンチの西南側約2mの位置にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2層は褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.15～0.3mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。トレンチの北側で平坦面が検出されたが、覆土が2層であることから後世の耕作等による地山整形の痕跡と思われる。遺構や遺物は検出されなかった。

A-11トレンチ[2次調査](図2-37) A-10トレンチの1段下の平坦部で、A-10トレンチの北西側約3.5mの位置に設定した。層序はA-10トレンチと共通している。地表下約0.1～0.2mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。トレンチの北半部側で平坦面が検出されたが、A-10トレンチと同様に後世の耕作等による地山整形の痕跡と思われる。遺構や遺物は検出されなかった。

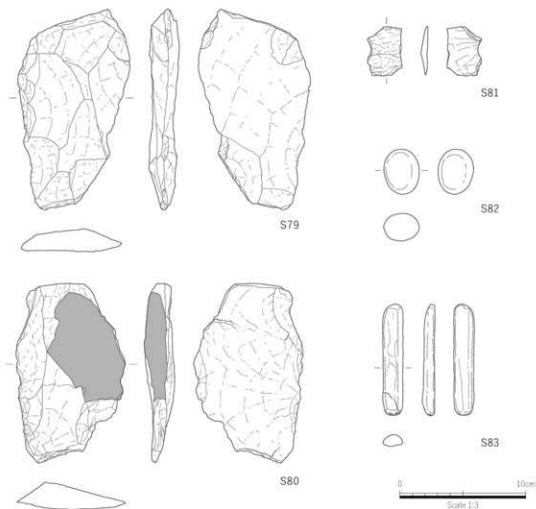


図2-34 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物実測図(2)

A-12トレンチ[2次調査](図2-38) A-1・A-11トレンチと同じ平坦部で、両トレンチの中間地点にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2a層は褐色粘質土、2b層はにぶい黄褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.15～0.45mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。トレンチの北側でやや平坦な部分が検出されたが、後世の耕作等による地山整形の痕跡と思われる。遺構は検出されなかった。遺物は2層から弥生土器細片と赤色珪質岩の剥片が数点出土のみで、図示できるものはなかった。

A-13トレンチ[2次調査](図2-39) A-1トレンチの1段下の平坦部で、A-4トレンチの東側約3mの位置にトレンチを設定した。層序は1層が

表土、2層は褐色粘質土、3層は地山風化土を含む褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.3～0.7mで北方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構は検出されなかった。遺物は2層から弥生土器細片、緑色玄武岩の剥片、中世の土師器片が数点出土したのみで、図示できるものはなかった。

A-14トレンチ[2次調査](図2-40) A-1・A-7トレンチの中間地点たる傾斜地にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2層は褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.15～0.35mで北方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構や遺物は検出されなかった。

A-15トレンチ[2次調査](図2-41) A-5トレ

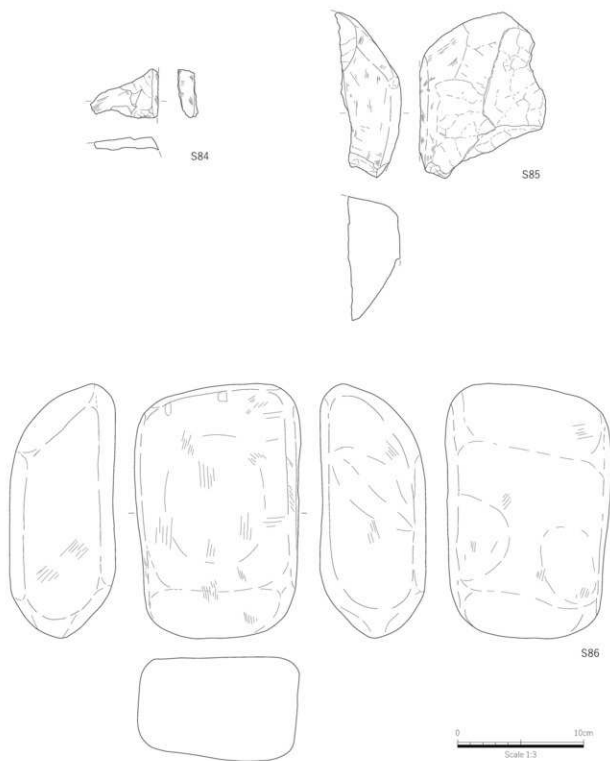
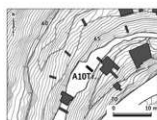
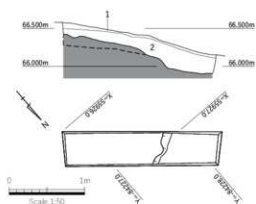
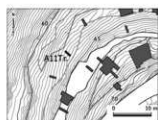
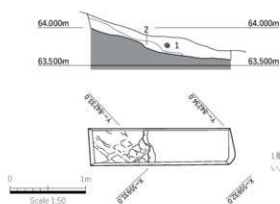


図2-35 村島宮の首遺跡 A-9トレンチ出土遺物実測図(3)



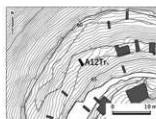
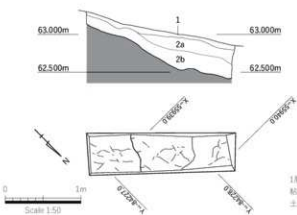
1層:黄褐色(10YR3/2)粘質土・表土。2層:褐色(10YR4/4)粘質土・しまり弱い。

図2-36 村島宮の首遺跡 A-10トレンチ断面図



1層:黄褐色(10YR3/2)粘質土・表土。2層:褐色(10YR4/4)粘質土・しまり弱い。

図2-37 村島宮の首遺跡 A-11トレンチ断面図



1層:黄褐色(10YR3/2)粘質土・表土。2a層:褐色(10YR4/4)粘質土・しまり弱い。2b層:濃い黄褐色(10YR4/3)粘質土・風化土多量を含む。しまりやや弱い。

図2-38 村島宮の首遺跡 A-12トレンチ断面図

ンチから道路を挟んだ上方で、道路が大きくカーブした内側の緩傾斜地にトレンチを設定した。当初は傾斜と並行するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張し、最終的に1.5m×3.3m程度のト

レンチとした。層序は1層が表土、2a層・2b層はともにしまりのやや弱い褐色系の粘質土、3層がしまりのやや強い暗褐色粘質土で、地山は岩盤層である。地表下約0.2～1.0mで北西方向へ比較のきつい勾配で下る地山が検出された。

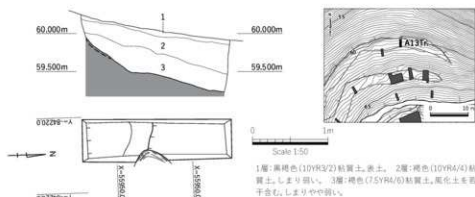


図2-39 村島宮の首遺跡 A-13トレンチ平面断面図

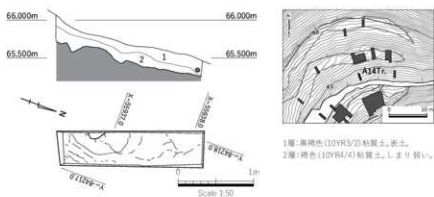


図2-40 村島宮の首遺跡 A-14トレンチ平面断面図

遺構はトレンチの北端でやや大きめの土坑(SX01)が検出された。3層上面での検出で、検出部で長さ1.15m、深さ0.45mを測る。円形に近い形状と思われる。一部中段がみられ、底部は緩やかに傾斜している。埋土はしまりのやや強い黄褐色粘質土の1層である。弥生期の遺物包含層と考えられる3層上面からの掘り込みであるが、埋土内からは弥生土器(75)と弥生土器細片がわずかに出土した程度であり所属時期は不明である。また、トレンチの中央付近で奥行0.5mほどの平坦部もみられたが、落ち込み部分や平面形状が不明瞭であることから自然地形と判断した。

遺物は2層と3層から出土しているが、いずれも弥生期の遺物のみが出土している。両層とも上方からの堆積層とみられ、出土した遺物も上方からの流れ込みによるものと考えられる。

A-15トレンチ出土遺物(図2-42~45) 75~91は弥生土器で、75~77は壺、78~85は甕である。

75は広口壺の口頸縁部で、大きく外反する口縁部の端部は面をなし、頸部には断面三角形の貼付突帯2条が施されている。76は広口壺の頸部で、肩部に断面三角形の貼付突帯1条が施されている。突帯には小さめの刻目と棒状の浮文が施されている。77は小型の細頸壺の頸部で、柳描直線文2段が巡らされている。78~84は肩部から内傾して立ち上り、口頸部が緩やかに大きく外反する甕である。78は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁で、79~84は粘土帯を貼付けない素口縁のものである。78は外面に幅の狭い粘土帯を貼付けて玉縁状とし、刻目を施している。端部は上方に尖り気味に仕上げる。79は口縁端部が外方にやや肥厚し、端部は面を成す。下端には刻目を施している。80は外面が粘土帯の幅で若干肥厚しており、端部は丸く仕上げ、細かい刻目を施す。81は小型の甕で、端部は外方につまみ出して飛び出させる。端部に刻目らしき痕跡がみられる。82は口頸部の長さや

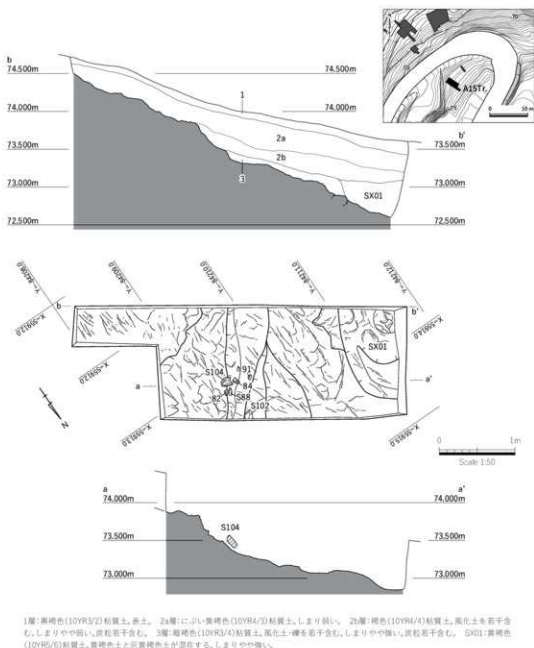


図2-41 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ平面図

口径から壺の可能性も考えられるが、ここでは甕に分類した。口縁部外面が粘土帯の幅が若干肥厚している。83は口縁端部が面を成し、下方に若干肥厚する。84は口縁端部を丸く仕上げる。85は小型の甕で、肩部から直立気味に立ち上り、口縁部は折り曲げられ短く外反する。内外面ともに全面に指頭圧痕が顕著に残っている。86は甕の体部で、肩部に微隆起突帯を1条と米粒状の浮文を施している。87は高杯の口縁部で、端部は欠損して

いる。杯部から屈曲して外方に開き上面が水平となる。大型品と思われる。88は鉢か高杯の口縁部で、杯部から緩やかに折り曲げられて外方に開く形態と思われる。端部が凹状を呈している。89～91は甕の底部である。

S87～S104は石器である。S87～S93は緑色玄武岩製で、S93以外は板状石斧である。S87は完形形で平面形は短冊形である。表裏面ともに刃部付近のみが研磨されており、身部にも一部研磨痕

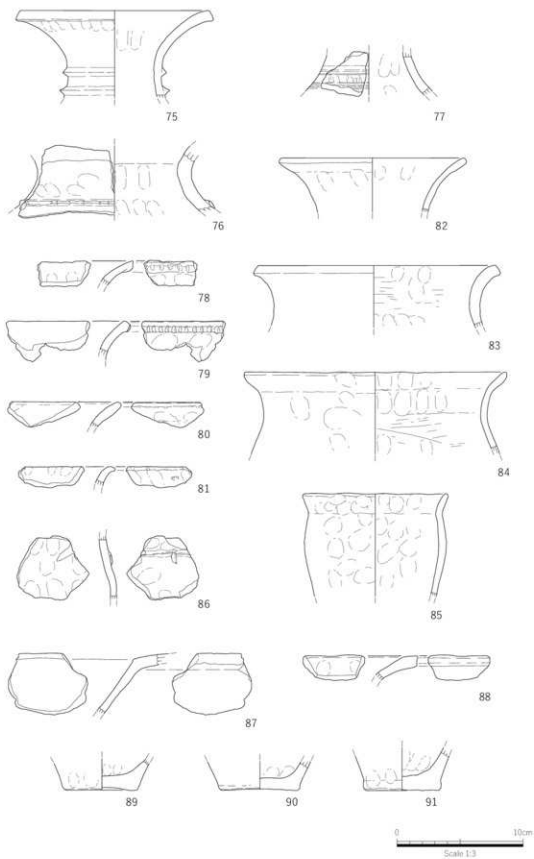


図2-42 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物実測図(1)

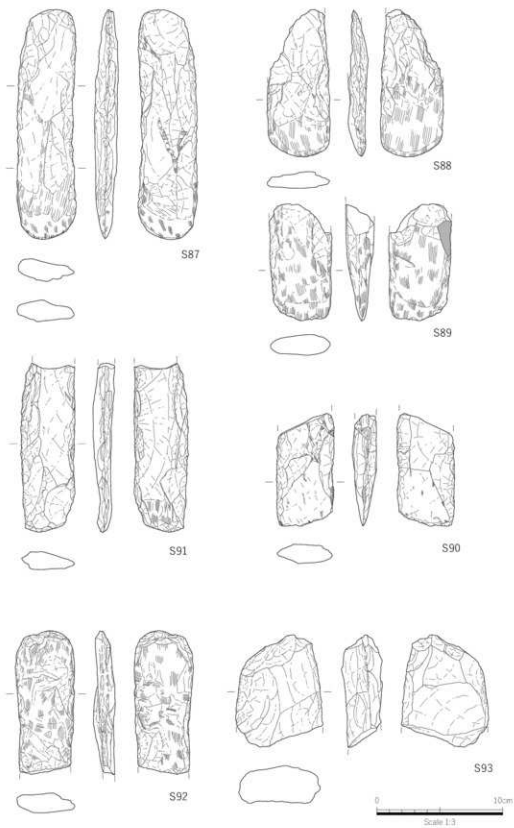


図2-43 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物実測図(2)

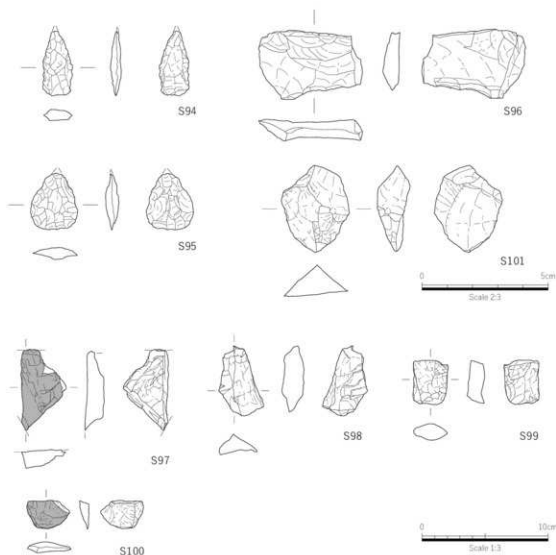


図2-44 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物実測図(3)

はみられるが多くが打裂痕を残したままである。両側縁も細かく加工されており、基部は端部のみが研磨されている。S88～S91は基部側を折損したものである。S88は表裏面ともに刃部付近のみが研磨されており、身部や側縁部には打裂痕を残している。S89は表裏面ともに全面が研磨されており、側縁部に打裂痕をわずかに残す程度である。裏面には一部節理面を残している。S90は表裏面の広い剥離面を利用して刃部としたもので、刃部の剥離面上にはうっすらと研磨痕が確認できる。身部と側縁部にもわずかに研磨痕はみられるが、表裏面ともに多くが打裂痕を残したままであ

る。S91はやや細身の形状のものである。裏面の刃部付近にわずかに研磨痕がみられる程度で、表裏面ともに身部に広い剥離面を残し、両側縁部が細かく加工されている。S87～S91はいずれも刃部が片側に偏っており、S87には刃先に擦傷がみられるほか、他のものも刃先に小さな打点や摩耗が確認できることから、いずれも使用されたものであることがわかる。S92は刃部側を折損したものである。表裏面と側縁部の全面が研磨されているが、研磨は甘く凹部分には打裂痕を残している。基部は打裂痕を残しているが、摩耗がみられる。

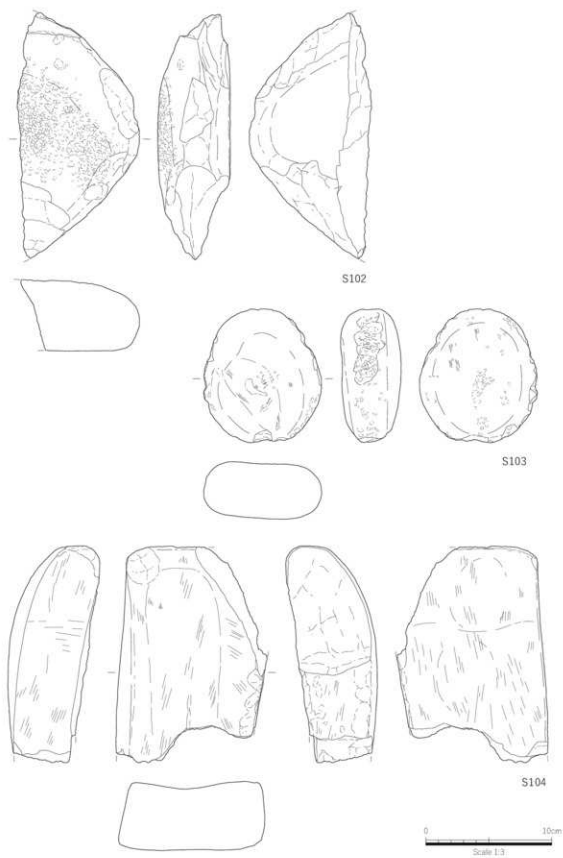


図2-45 村島宮の首遺跡 A-15トレンチ出土遺物実測図(4)

S93は伐採石斧の未成品である。表裏面の全面に打裂痕が残り、両側面には敲打痕が若干みられることから、打裂成形後に敲打が開始された段階のものと思われる。S94～S100は赤色珪質岩製である。S94・S95は石鏃で、ともに先端部を欠損している。S94は形状が細身の二等辺三角形で、基部は平基である。S95は形状が正三角形に近く基部は丸みを帯びる。S96は楔形石器と思われる、上下に細かい加工がみられる。S97～S99は石核で、S97は表面と側面の一部に自然面を残している。S100は剥片で表面に自然面、裏面に広い剥離面を残している。S101は黒色チャート製のスクレイパーで、裏面には広い剥離面を残し、表面には刃部に細かい加工がみられる。S102は台石である。半分程度が欠損しているものと思われる。裏面は平坦で表面が膨らみのある形状を呈しており、表面中央付近の凸部を中心に敲打痕がみられる。石斧製作の作業台として使用されたと考えられる。緑色玄武岩製で伐採石斧と同じ石材である。S103・S104はいずれも砂岩製の砥石である。S103は扁平な円形で、表裏の両面に研磨痕が残る。表面は研磨痕のある中央部が溝状に凹んでおり、裏面はやや凸面状を呈している。側縁部には敲打による凹みが多くみられ、叩石としても使用されている。目はやや粗い。S104は直方体で、下半部は欠損している。表裏の両面と両側面のほぼ全面に研磨痕が残り、表面は中央部が溝状に凹んでいる。目は粗い。

A-16トレンチ[2次調査](図2-46) A-15トレンチと同じ道路内側の緩傾斜地で、A-15トレンチの東側約4mの位置にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2a層・2b層がしまりのやや弱い褐色系の粘質土、地山が岩盤層で、いずれもA-15トレンチに対応する。地表下約0.4mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構は検出されなかった。

遺物は2層から出土しており、図示したもののほかには弥生土器細片が1点出土したのみである。

A-16トレンチ出土遺物(図2-47) 92は弥生土

器で壺の頸部である。断面三角形の突帯が2条貼付けられ、上の突帯には刻目が施されている。S105は板状石斧の素材と考えられるものである。裏面に広い剥離面がみられ、表面には自然面を残している。細かい打裂痕がほとんどみられないことから、自然礫を分割して素材を剥ぎ取ったものと思われる。

A-17トレンチ[3次調査](図2-48) A-10トレンチと同じ平坦部で、A-10トレンチの西南側約6mの位置にトレンチを設定した。当初は平坦部に直交するように南北方向の0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張し、最終的には3.5m×2.5m程度の凸形状のトレンチとした。

層序は1層が表土、2a層・2b層はともにしまりのやや弱い褐色系の粘質土、3層がしまりのやや強い暗褐色粘質土、4層はしまりのやや強い暗褐色粘質土、5層は地山風化土をベースとしたしまりのやや強い黄褐色砂質土、地山は岩盤層である。

遺構は地表下約0.35～0.6mで、北西方向へ緩やかに下っていく地山を大きく削平して平坦部を造り出した段状遺構(SH01)が検出された。SH01は平面形は南側の壁面が直線的で、壁面部分で東西の長さ約2.6m、床面の奥行は約0.7～0.9mと幅狭で、壁高は0.3～0.55mを測る。埋土は3～5層と考えられ、平坦面の北側傾斜部にも5層が堆積している状況から、当時の遺構の形状をある程度保っているものと想定される。壁面は自然傾斜と平行してほぼ直線的に削平されており、壁面西側には幅0.2mほどの小段がみられる。平坦面は壁面の前面に平行して直線的に延び、壁溝などはみられないが、その東半部については北側の落ち際に土塊状に削り残されており窪地状になっている。遺物は床面からの出土はなく、3・4層中から弥生土器(94～97・99)、板状石斧(S106・S107・S108)、伐採石斧の剥片(S109)、石皿(S111)のほか、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが出土している。平坦面から北側の落ち際にかけてはビットが8基(SP01～08)検出された。いずれも地山面での検出であり、段状遺構に伴う遺構と考

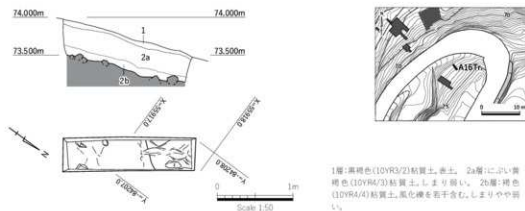


図2-46 村島宮の首遺跡 A-16トレンチ断面図

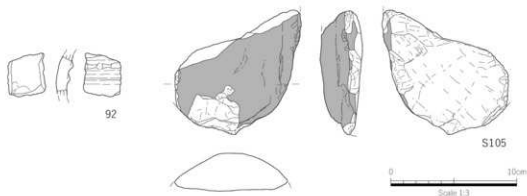


図2-47 村島宮の首遺跡 A-16トレンチ出土遺物実測図

えられる。円形～楕円形の平面形を呈し、大きさは長径で0.25～0.45m、深さは0.03～0.35mと様々である。切り合い関係がみられ複数時期の可能性がある。遺物はSP05で砥石(S112)が出土したほか、SP06・SP07で弥生土器細片が数点出土したのみである。

この他の遺物は2層からは図示したもののほかには弥生土器片、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが出土している。5層からは弥生土器細片が数点出土したのみである。

A-17トレンチ出土遺物(図2-49,50) 93～100は弥生土器で、93～95は壺、96～99は甕である。93は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁である。粘土帯には指頭圧痕が連続して施され、これにより粘土帯は扁平となっている。口縁端部は面をなし下方に肥厚気味である。94は口縁端部が凹状を呈し、上下にやや肥厚気味である。95は広口壺の口

縁部で、大きく外反する口縁部の端部は面を成す。96・99は肩部から内傾して立ち上がり、口頸部が緩やかに大きく外反する甕である。96は外面に粘土帯を貼付けた貼付口縁、99は粘土帯を貼付けない素口縁のもので、いずれも口縁部下端には刻目を施している。96は幅の狭い粘土帯を貼付けて、口縁端部は面をなす。99は口縁端部を丸く仕上げている。97は肩部から内傾して立ち上がり、口頸部が短く外反するものである。幅の狭い粘土帯を貼付けた貼付口縁のものである。口縁端部は面を成し、中央に沈線状の凹みとその下に細い刻目を施している。また肩部には断面三角形の貼付突帯1条と円形浮文を施している。98は口縁部が内面に稜を成して外方に屈曲するものである。口縁部外面に幅の広い粘土帯を貼付け、粘土帯上に指頭圧痕を文様状に連続して施している。端部は面を成す。100は凹線文の高弁である。内湾する口縁部

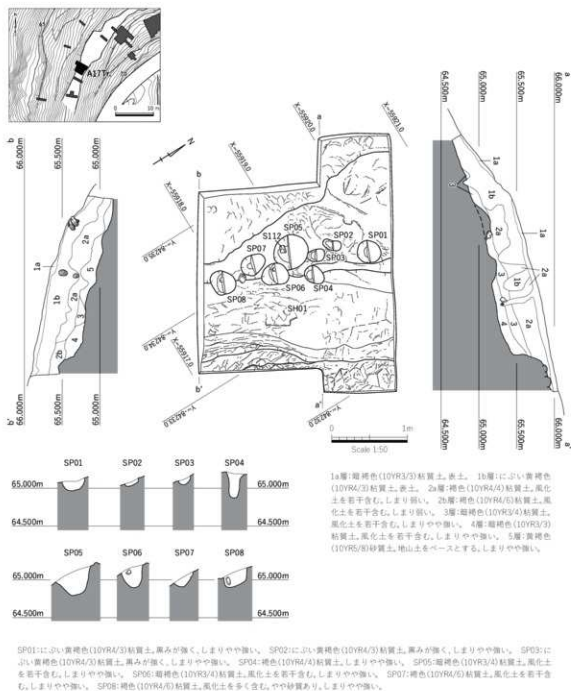


図2-48 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ平面断面図

で、口縁端部は面を成し、外面には凹線文を4条巡らしている。胎土は砂粒が少なく精良で、色調は橙色を呈するなど特徴的である。

S106～S112は石器である。S106～S109、S111は緑色玄武岩製で、うちS106～S108は板状石斧である。S106は完形品で平面形は楕形を呈

している。裏表面ともに刃部付近のみが研磨されており、身部には両面ともに広い剥離面を残す。両側縁は細かく加工され、基部は端部のみが研磨されている。刃部は片側に偏っており、刃先の一部に欠損や打点が確認できることから、使用されたものであることがわかる。S107は全体的に磨

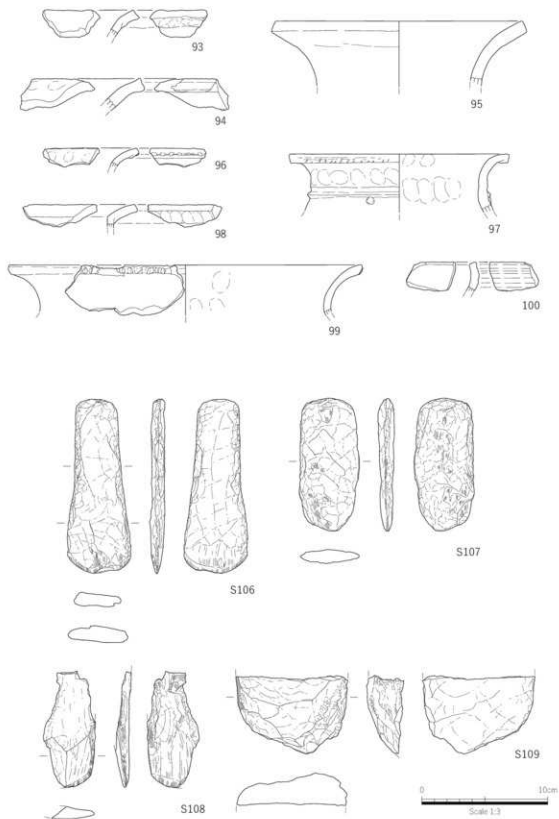


図2-49 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物実測図(1)

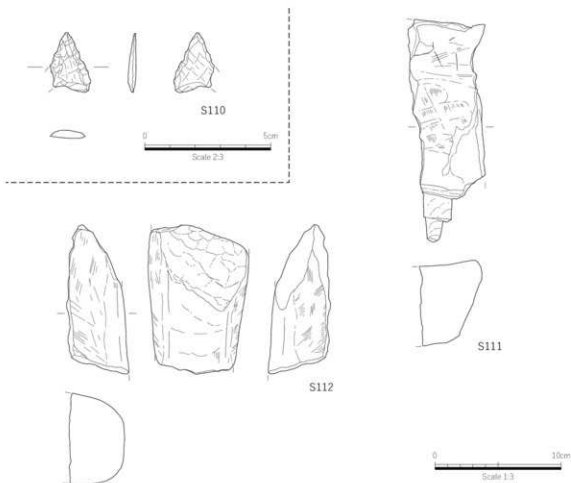


図2-50 村島宮の首遺跡 A-17トレンチ出土遺物実測図(2)

減が著しく、刃部形状は不明瞭である。身部と側縁部のごく一部に研磨痕がみられるが、基本的には打裂痕を多く残したものであると思われる。S108は刃部の破片で、刃部の半分程度は欠損している。残存部分に研磨痕はみられるが、打裂痕も多く残している。S109は伐採石斧の剥片である。裏面が大きく剥離している。側部に敲打痕や自然面がみられることから、打裂成形後に敲打が開始された段階のものと思われる。S110は赤色珪質岩製の石鏃である。形状は二等辺三角形で、基部の一部を欠損しているが緩やかな凹基となるものである。裏面には広い剥離面を残す。S111は緑色玄武岩製の石皿である。大きく欠損して全体形は不明である。中央部付近がわずかに凹んで磨痕がみられ、その周囲には線状の傷跡も確認できる。S112は流紋岩製の砥石である。大きく欠損して

おり全体形は不明であるが置砥と思われる。表面と裏面に研磨痕が残る。目はやや粗い。

A-18トレンチ[3次調査](図2-51) A-17トレンチの段状遺構の拡がりを確認するために、南側約1mの位置に設定した。

当初は平坦部に直交するように0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い拡張した。層序は1層が表土、2a層・2b層はともにしまりのやや弱い粘質土で2a層が褐色、2b層がにぶい黄褐色、3a層・3b層がともにしまりのやや強い粘質土で3a層が褐色、3b層が暗褐色、地山は岩盤層である。

遺構は地表下約0.5mで、北西方向へ緩やかに下っていく地山を削平して平坦面をつくり出した段状遺構(SH01)が検出された。平坦面はトレンチ西側では奥行約1.0mであるが、東側では約

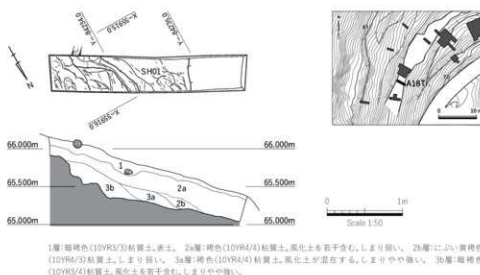


図2-51 村島宮の首遺跡 A-18トレンチ断面図

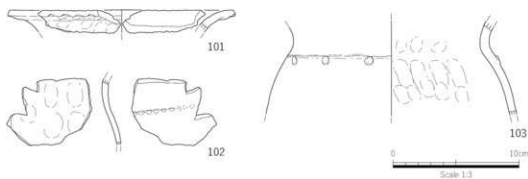


図2-52 村島宮の首遺跡 A-18トレンチ出土遺物実測図

0.5mと狭まっている。壁面の高さは整形された部分と岩盤面との境が不明瞭であるが、0.2m程度とみられる。平坦面がやや平滑なのに対し、壁面は岩盤の凹凸が顕著にみられた。埋土は地形に合わせて南から流入した3層が堆積しており、この3層が被覆する平坦面を段状遺構と判断した。A-17トレンチと同様の平坦面が幅狭の段状遺構であり、A-17トレンチから連続する可能性がある。遺物は床面からの出土はなく、3層中から弥生土器(101・103)が出土している。

この他の遺物は2層と3層から出土しており、図示したもののほかには弥生土器片、緑色玄武岩や赤色珪質岩の剥片などが少量出土している。

A-18トレンチ出土遺物(図2-52) 101～103は弥生土器の甕である。101は粘土帯を貼付けた貼

付口縁で、外面に幅の狭い粘土帯を貼付け、口縁端部下端に刻目を施している。口縁端部は面を成し、やや下部に肥厚臭味である。粘土帯は指頭圧痕により扁平となり、粘土帯下端の段が消えた部分もみられる。102・103は体部で、肩部には102が刺突文、103が微隆起突帯1条と円形浮文を施している。

A-19トレンチ[3次調査](図2-53) A-18トレンチの段状遺構の拡がりを確認するために、南側約2mの位置に設定した。当初は平坦部に直交するように0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺物や遺構の検出に伴い随時拡張した。層序は1層が表土、2層はしまりの弱い褐色粘質土、3層がしまりのやや強い褐色粘質土、地山は岩盤層である。

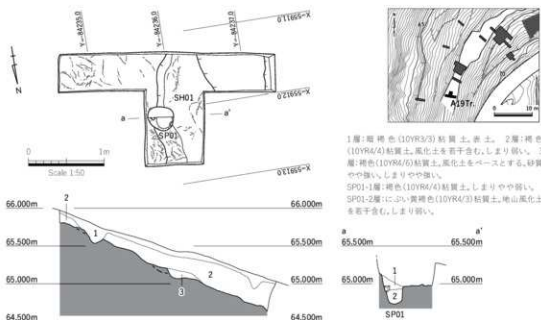


図2-53 村島宮の首遺跡 A-19トレンチ平面断面図

遺構は地表下約0.35mで、北西方向へ緩やかに下っていく地山を削平して平坦面をつくり出した段状遺構(SH01)が検出された。平坦面はトレンチ西側で奥行約0.3m、最大0.65mで、壁面の高さは0.14mを測る。壁面の高さは整形された部分と岩盤面との境が不明瞭あるが、0.2m程度とみられる。埋土は3層で、この3層が被覆する平坦面を段状遺構と判断した。幅状の段状遺構であり、A-17・18トレンチから連続する可能性がある。出土遺物はなかった。SH01の壁面部分ではビットが1基(SP01)検出されたが、3層上面での検出でありSH01埋没後の遺構と考えられる。出土遺物はなかった。

この他の遺物は2層から出土しており、図示したもののほかには弥生土器片、緑色玄武岩の剥片が数点出土したのみである。

A-19トレンチ出土遺物(図2-54) S113は緑色玄武岩製の剥片で、伐採石斧の石材と思われる。表面には自然面を残し、裏面には広い剥離面を残している。打裂成形段階のものと思われる。S114・S115は赤色珪質岩製の石鏃である。S114は先端部を欠損しているが、形状は二等辺三角形で平基である。裏面には自然面を残している。S115

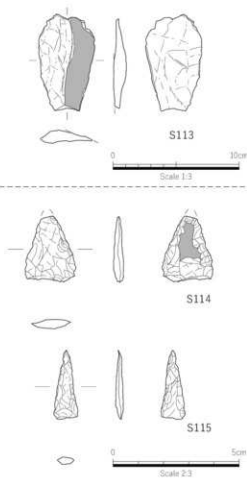


図2-54 村島宮の首遺跡 A-19トレンチ出土遺物実測図

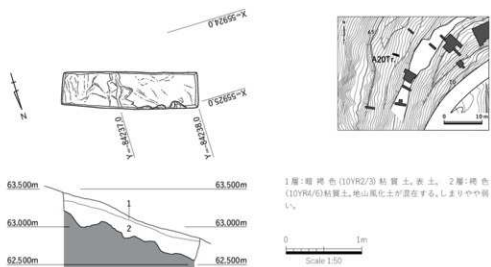


図2-55 村島宮の首遺跡 A-20トレンチ断面図

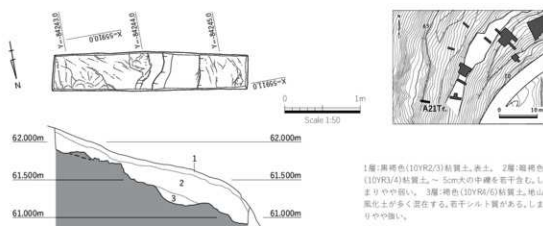


図2-56 村島宮の首遺跡 A-21トレンチ断面図

は細身の二等辺三角形で平基である。形状からは鎌とも考えられるが、身に厚みがないことや基部に破断面がみられないことから石鉄に分類した。

A-20トレンチ[3次調査](図2-55) A-11トレンチと同じ平坦部で、A-11トレンチの西南側約5mの位置にトレンチを設定した。層序は1層が表土、2層は地山風化土を含みしまりのやや弱い褐色粘質土、地山は岩盤層である。地表下約0.25～0.4mで北西方向へ緩やかに傾斜する地山が検出された。遺構や遺物は検出されなかった。

A-21トレンチ[3次調査](図2-56) A-20トレンチと同じ平坦部で、南側約10mの位置に設定

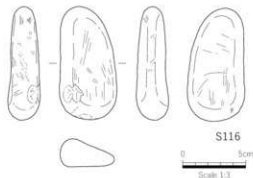


図2-57 村島宮の首遺跡 A-21トレンチ出土遺物実測図

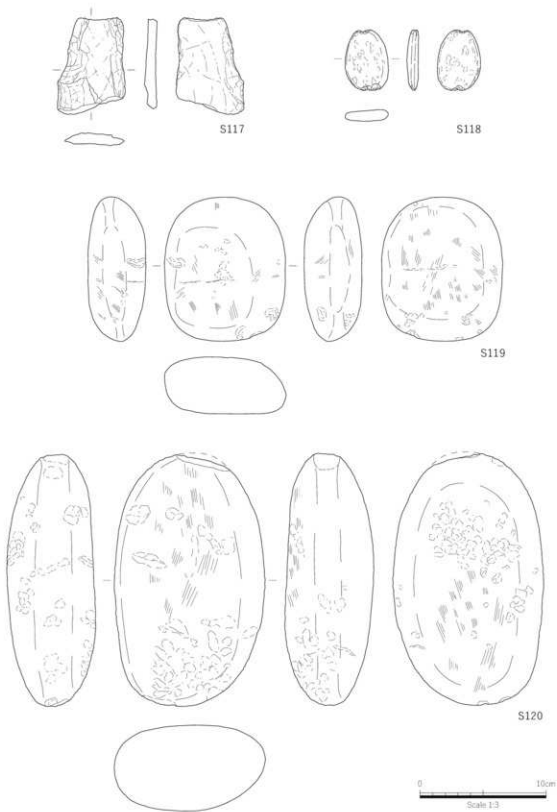


図2-58 村島宮の首遺跡 A区表面採集遺物実測図

した。A区では最も西側のトレンチとなる。当初は平坦部に直交するように0.5m×2mのトレンチを設定したが、遺構の確認のために一部拡張した。層序は1層が表土、2層はしまりのやや弱い暗褐色粘質土、3層は地山風化した土を含しまりのやや強い褐色粘質土、地山は岩盤層である。

地表下約0.2～0.5mで西方向へややきつい勾配で傾斜する地山が検出されたが、トレンチの中ほどで一部地山が約0.25m落ち込み、奥行0.5m、深さ5cmで浅く凹んだ部分が出された。この部分をしまりのやや強い3層が被覆しており、段状もしくは溝状の遺構となる可能性はあるが、同層からは遺物の出土がなく詳細は不明である。

遺物は2層から出土しており、図示したもののほかは弥生土器の細片が数点出土したのみである。

A-21トレンチ出土遺物(図2-57) S116は安山岩製の砥石である。長楕円形を呈し断面は丸みのある三角形である。手持砥と考えられ、表裏両面の中央部に研磨痕がみられる。やや目は細か

い。A-7トレンチ出土のS72に大きさ・形状が酷似する。

A区の表面採集遺物(図2-58) ここでは、今回新たにA区内で表面採集された遺物について報告する。

S117は緑色玄武岩製の剥片で、板状石斧の石材と思われる。表裏面にはそれぞれ広い剥離面を残し、周縁部には細かい加工がみられる。S118は石錘である。扁平な自然礫の上下端を一部打ち欠いている。打ち欠き部も含めて全体的に磨滅している。S119は流紋岩製の磨石である。石蝕形を呈し、表裏の両面および一側面に使用痕が確認できる。表面はやや凸面状を呈し、左下寄りの範囲に研磨痕がみられる。裏面は平坦でほぼ全面に研磨痕がみられる。目はやや粗い。S120は砂岩製の砥石である。楕円形を呈し、表裏の両面に使用痕が確認できる。表面は上半部に研磨痕、下半部に打痕がみられ、これと対になるように裏面は上半部に打痕、下半部に研磨痕がみられる。目は粗い。

5. 過去の採集資料の整理

ここでは市内の個人・団体から寄贈された本遺跡出土と伝わる資料について報告する(図2-59-72)。これら資料については、「村鳥」[宮ノ首]などと注記されたものもあるが、大半は出土地が未注記のものであり、他遺跡の資料を含んでいる可能性は否定できないものである。しかし、これら資料の寄贈者は、いずれも本遺跡での採集記録が残っている人物の関係者あるいは関係機関であり、市教委の調査で出土した石斧関連資料と差がないことや、石斧関連資料が多量に出土する遺跡は他に考えにくいことと合わせて、本遺跡出土である蓋然性が極めて高いと考えられる。このことから、これら寄贈資料は本遺跡出土資料として一括して扱うこととした。なお、明らかに石材の異なる石器類や自然礫などについては除外した。

寄贈資料の石器類は、伐採石斧と板状石斧の2

種類の石斧とその未成品、石斧製作に使用されたと思われる砥石などの道具類など、その数は約250点になる。今回はこのうち図化作業を終えた伐採石斧関連の資料について報告する。伐採石斧関連の資料は全部で51点あり、内訳は未成品33点、成品14点、その他4点である。

まず、伐採石斧関連の資料を整理し、伐採石斧の製作工程について考えてみると、現時点では下記のような大きく3つの工程を想定することができる。

- ①打製成形(第1工程)
- ②敲打整形(第2工程)
- ③研磨整形(第3工程)

第1工程となる打製成形は、素材となる石を叩石等で打ち欠きながら大まかに成形していく工程である。ただし、塊石を粗割したものを素材とするのか、あるいは適度なサイズの転石や河原石な

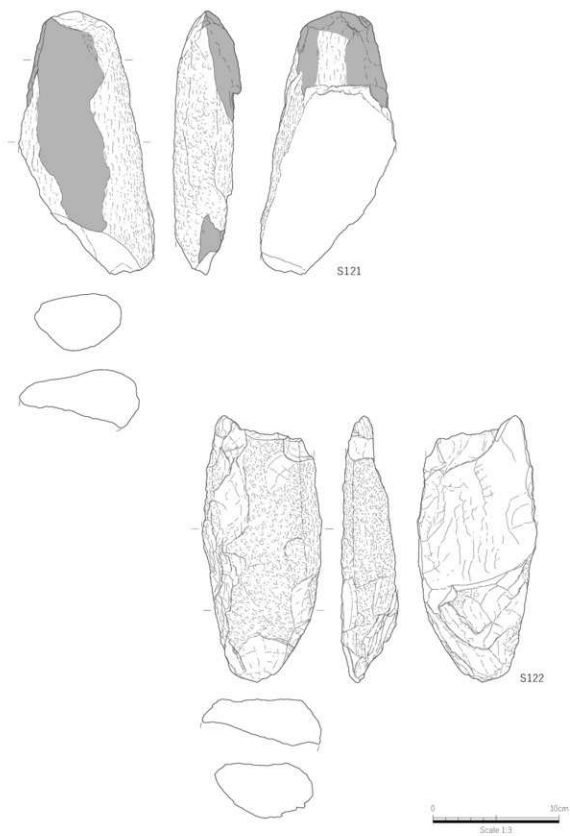


図2-59 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(1)

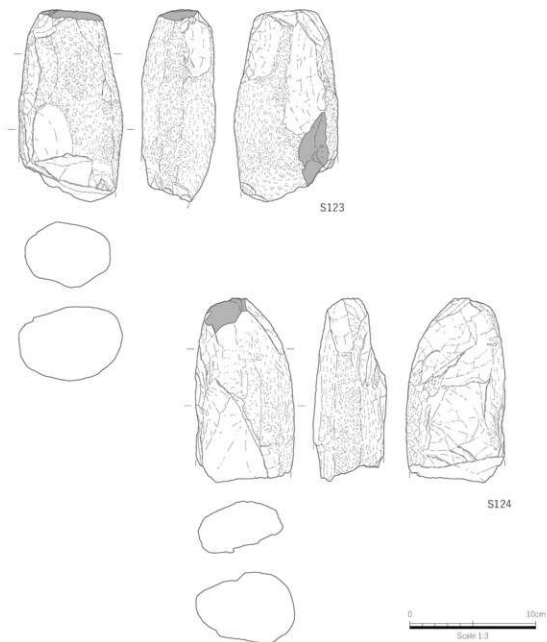


図2-60 村島宮の首遺跡 奇蹟採集資料実測図(2)

どをそのまま素材とするのかによって、前段に一工程加わる可能性もあり今後検証は必要である。

第2工程となる敲打整形は、敲打により細かく叩き潰していき、徐々に流線形に整えていく工程である。本遺跡の未成品についてはほぼこの工程のものであり、もっとも破損率の高い工程であっ

たことがわかる。なお、本工程の未成品においては、その進捗度合により法量や形状が大きく変わることから、敲打の弱い段階のものと、作業が進んだ敲打の強い段階のものに分類した。敲打の弱い段階のものは、敲打痕が側面や凸部を中心にみられ、まだ前工程の打裂成形の痕跡を多く残してい

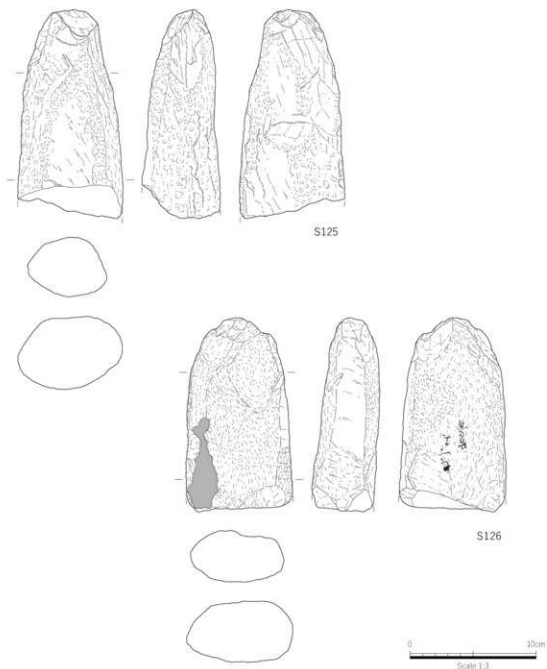


図2-61 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(3)

るものである。敲打の強い段階のものは、敲打痕が全面に及ぶようになり、打裂成形の痕跡が減って石斧の形状に近づいたものである。

第3工程となる研磨整形は、砥石で基本的に全面を研磨し刃を研ぎ出して仕上げる工程である。ただ、この工程により破損する可能性は低いと思

われるため、研磨痕の残るものについては未成品ではなく成品と判断することができる。よって、その破損品については使用により破損したものと考えた。以下、この製作工程順に報告していく。

S121～S153は未成品で、S154～S167は成品である。S121～S139は敲打整形のうちまだ敲打



図2-62 村島宮の首遺跡 奇蹟採集資料実測図(4)

の弱い段階の未成品で、打裂痕を比較的残しており、形状も石斧に近づいていないものである。このうちS121～S132は大型の部類に入り、S121・S122は未成品全体のなかでもとくに大きく、本工程のなかでも整形があまり進んでいない比較的初期のものと考えられる。S121は表面と裏面に自然面を多く残している。側面を中心に敲打されているが、裏面では中央の凸部にも敲打痕がみられる。S122は全面敲打されているが、全体的に凸部を中心としたものであり、打裂痕も多く残している。刃部側と思われる下部も打裂による成形がみられる。S121・S122はともに敲打整形に

入ってはいるが、完成形の石斧の大きさや形状にはまだまだほど遠く、前工程の打裂成形がさほど行われていなかったことがうかがわれる。このことは、本遺跡での伐採石斧製作が打裂成形ではなく敲打整形に依拠した製作であったことを示唆している。S123～S132は全面に敲打が及んでいるものの基本的には側部と凸部を中心としたものであり、まだ打裂痕を多く残すとともに自然面を残すものも多くある。また、基部側と思われる上部には、打裂痕を残しているものが多くみられ、この段階で敲打は基部にまで及ばないようである。また、S123・S124・S131などは上部部に自然

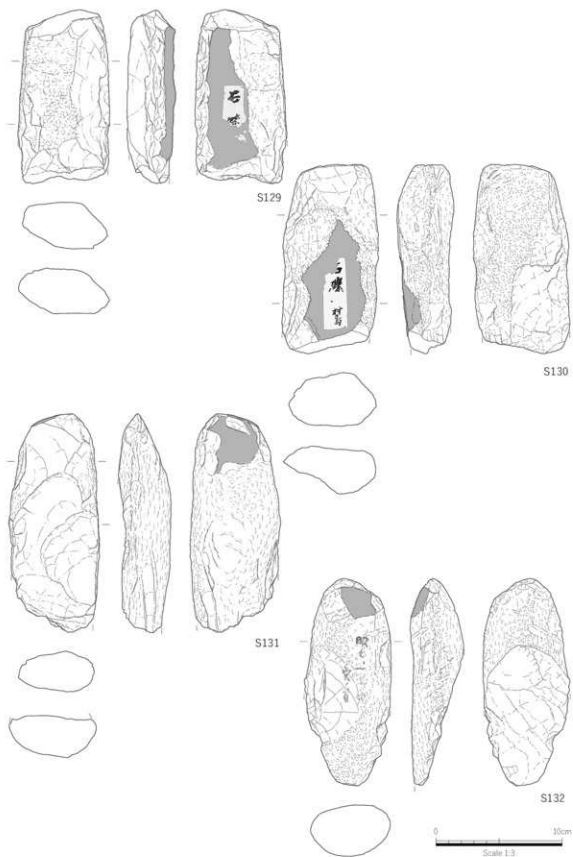


図2-63 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(5)

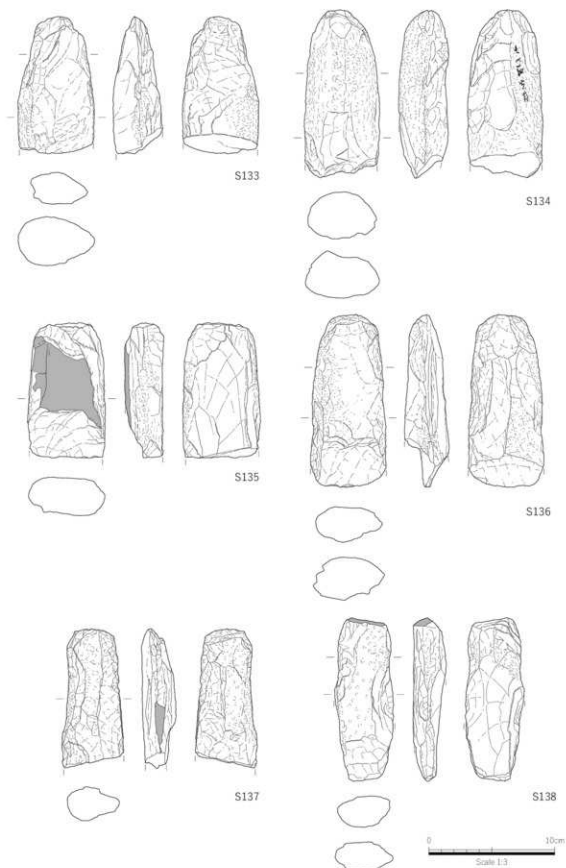


図2-64 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(6)

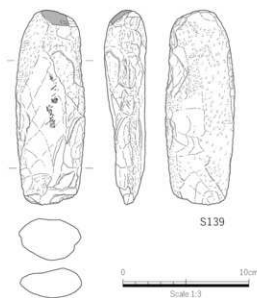


図2-65 村島宮の首遺跡 奇蹟採集資料実測図(7)

面を残しており、自然面の平坦な部分を基部に利用しようとした意図もうかがわれる。刃部側と思われるS128についても下端部にはまだ打裂痕を残しており敲打は及んでいない。

S133～S139は敲打の弱い段階のなかで、小型のものである。これらは打裂痕や自然面を残している状況から、敲打の進捗に伴って小型化したものではなく、当初から小型品を志向したものと思われる。S133・S134は基部側と思われる上端部が先細りしており、断面形は楕円～円形に近く、厚みのあるものである。S133は打裂痕を多く残り、敲打は側面のみみられる。S134は敲打が全面に及ぶが全体的に凸部を中心としたものであり、打裂痕を多く残している。いずれも上端部は打裂により成形し、敲打は及んでいない。S135～S139は基部側と思われる上端部が平坦かやや斜めとなる形状で、断面形は楕円～長方形に近く、やや扁平なものである。敲打は、S139が全面に及んでいる以外は側部や凸部を中心としたものであり、いずれもまだ打裂痕を多く残している。S135とS137は身や側部に自然面も残している。上端部はいずれも打裂による成形で敲打は及ばず、S138・S139は自然面も残している。

S140～S153は敲打整形のうち敲打の強い段階

で、敲打が進捗したことにより打裂痕が少なくなり、形状が石斧に近づいてきたものである。敲打の弱い段階と同様に大型と小型に分けることができる。S140～S148は大型のもので、このうちS140～S143は基部が先細りし、断面形は楕円～円形に近く、厚みのあるものである。S143は他に比べて厚みがなく、基部に向けて極端に扁平となる。いずれも基部は打裂により成形するが、S140・S141には敲打が加わっている。S144・S145は基部が平坦かやや丸みをもつ形状で、断面形は楕円形で厚みのあるものである。いずれも基部は自然面を利用しており、S144は打裂と敲打も加わっている。S146～S148は刃部側で、断面形は楕円～杏仁形に近く、厚みのあるものである。刃部の平面形はいずれも直線的ではなく緩やかに弧を描いたものである。刃部の整形は、S146・S147は打裂痕を残すものの刃先近くまで敲打が及んでおり、S148は刃先まで敲打整形されている。

S149～S153は敲打の強い段階のなかで、小型のものである。S149～S151は基部が先細りするもので、S149・S150は断面形が楕円形でやや厚みがあり、S151は扁平である。S152は基部が平坦なもので、断面形は長方形に近く、やや厚みがある。S153は基部がやや先細りするが他に比べて細身で、基部に向けて極端に扁平になる形状から、伐採石斧以外の未成品の可能性もある。これらはいずれも基部に打裂痕を残している。

S154～S167は研磨痕が確認できることから成品とした。完形品は2点で残りは全て破損品である。前工程の敲打段階で大小の未成品がみられたが、これを踏襲するように成品においても大型品と小型品に分けることができる。将来的にはさらに細分できる可能性がある。S154～S159は大型品である。S154・S155はいずれも基部側を折損しており、刃部の平面形は尖り気味に弧を描き、身は厚みがある。断面形はS154が杏仁形で、S155が楕円形である。S154は全面丁寧に研磨されており、ほとんど敲打痕を残さない。S155は全面研磨されているがS154に比べ研磨が弱く、うっすらと敲打痕を残している。刃部はやや偏りがみ

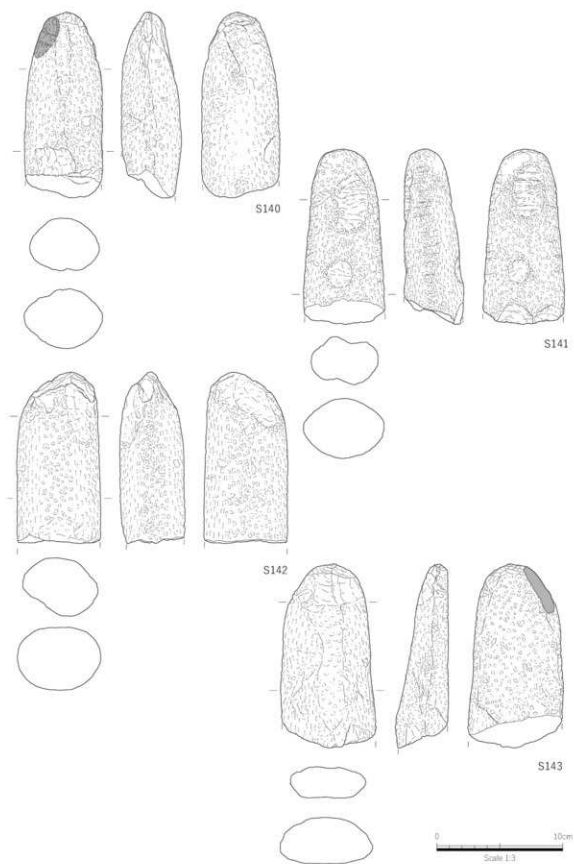


図2-66 村島宮の首遺跡 奇體採集資料実測図(8)

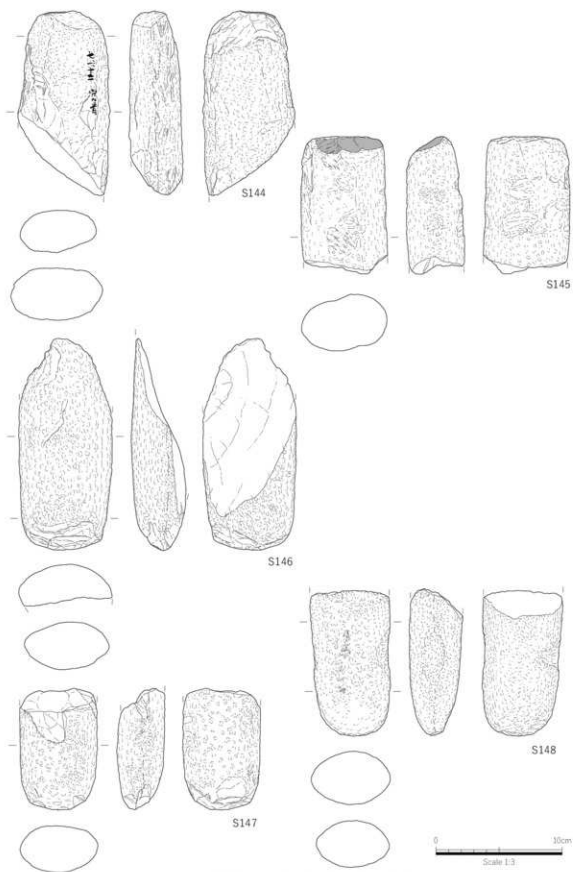


図2-67 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(9)

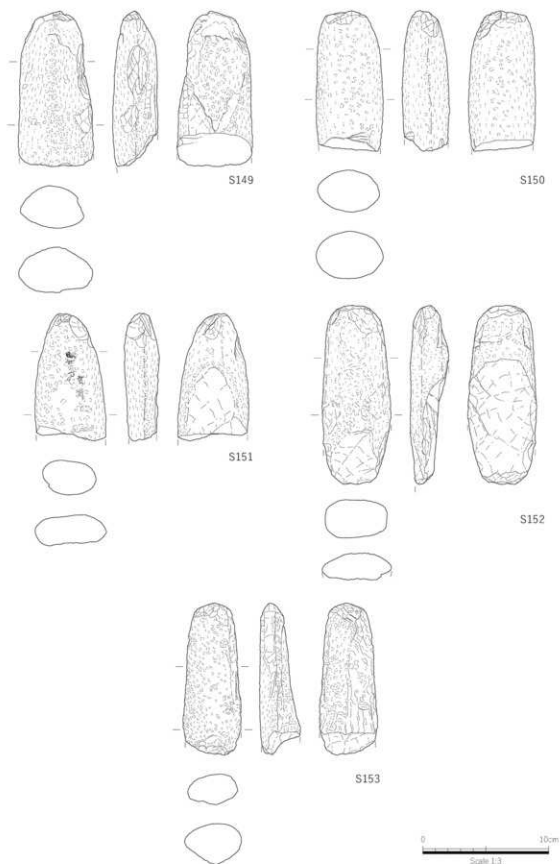


図2-68 村島宮の首遺跡 奇體採集資料実測図(10)

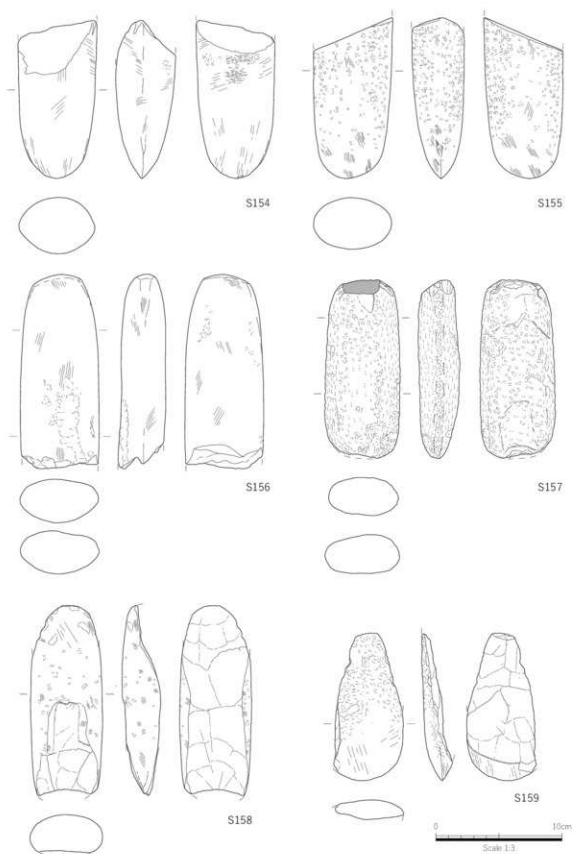


図2-69 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(11)

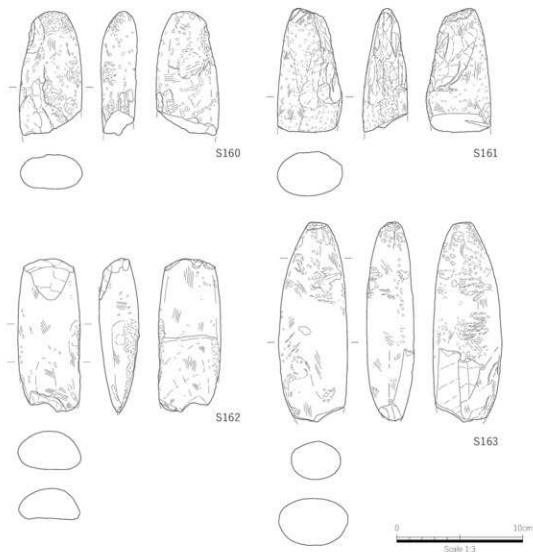


図2-70 村島宮の首遺跡 奇蹟採集資料実測図(12)

られる。S156は刃部側を折損している。基部はやや丸みをもち、身は先のものに比べ厚みがなく、断面形は楕円形である。全面丁寧に研磨されており、敲打痕は一部に残す程度である。S157は刃先を一部欠損するが完形品に近いものである。平面形は長方形で、基部は自然面を利用して平坦とし、断面形は扁平な楕円形である。研磨痕は刃部と表面の身の中央付近のごくわずかな範囲にみられるのみで、ほぼ全面に敲打痕を残している。刃先には刃潰れがみられる。S158は刃部・基部ともに先端を欠損しているほか、裏面がほぼ全面にわたって剥離している。断面形は扁平な楕円形と思われる。全面丁寧に研磨されており、表面の下半

分には一度剥離した箇所を研磨し直した痕跡も確認できる。S159は刃部と表面の一部のみを残すもので、裏面もほぼ全面が剥離している。刃部の平面形は丸みのあるもので、断面形は扁平なものと思われる。全体的に摩滅しているが、刃部付近に研磨痕、身には敲打痕が確認できる。

S160～S167は小型品である。このうちS160～S163は身にやや厚みがあり、基部が先細りするものである。S160・S161はいずれも刃部側を折損しており、断面形は楕円形で、S160はやや扁平である。S160は基部が丸みをもち、研磨されているが敲打痕もよく残している。身は全面研磨されているが所々に敲打痕を残している。裏

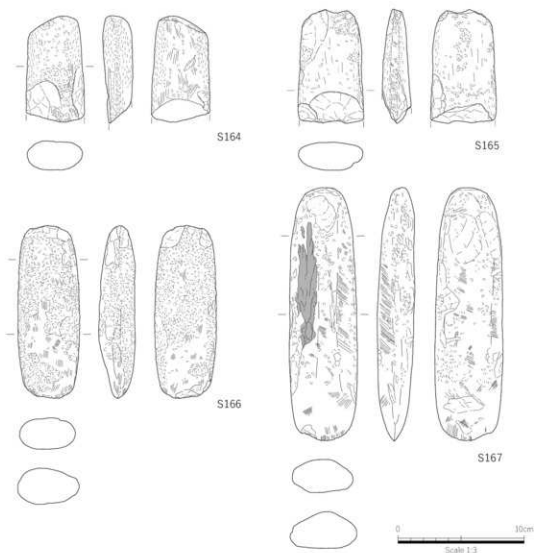


図2-71 村島宮の首遺跡 寄贈採集資料実測図(13)

面と側縁部に一部敲打による凹みがみられることから、叩石に転用された可能性がある。S161は基部が斜めではあるが平坦に研磨されている。身は研磨されているが全体の半分程度で、片方の側縁部を中心に打裂痕と敲打痕を多く残している。S162は刃部を若干欠損している。基部も先端は欠損しているが、破面が磨滅しており破損後もそのまま使用されたと思われる。当初は先細りの形状だったと思われる。断面形は裏面が平坦気味なのに対し、表面はやや膨らむ蒲鉾形を呈している。側縁部に一部敲打痕を残しているが、表裏面ともに全面研磨されている。裏面の下半分には一度剥離した箇所を研磨し直した痕跡が確認でき

る。S163は刃部を若干欠損している。断面形は円形に近い楕円形で、基部側はより円形に近くなる。基部は先端部分が平坦に研磨されている。比較的丁寧に全面の研磨がされているが、基部の付近や裏面に若干敲打痕を残している。

S164～S167は身に厚みがなく、基部が先細りしない形状のものである。S164・S165はいずれも断面形が扁平で、研磨痕は一部にみられる程度で、大半は敲打痕を残している。基部はS165は先端を欠損しており、S164は端部が平坦に研磨されて平面的に片下がりの形状となる。S165は片側のみではあるが側縁部が研磨されて面を成している。S166は完形品で、全体の平面形は長方形で

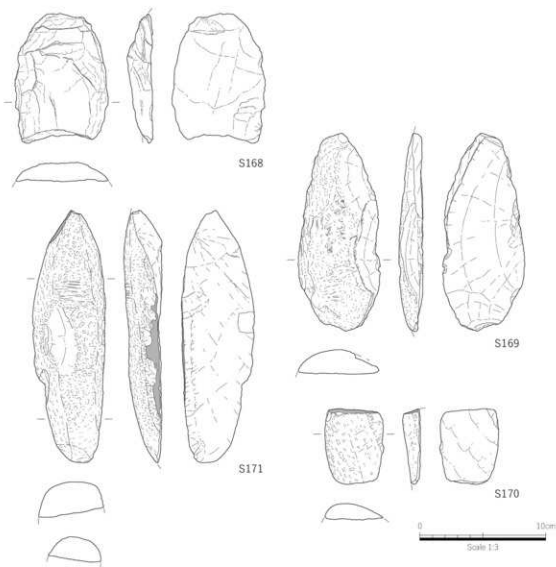


図2-72 村島宮の首遺跡 奇蹟採集資料実測図(14)

基部は丸みのあるものである。断面形は楕円形に近い、表裏面ともに刃部中心に研磨されており、身は一部に研磨痕がみられる程度で大半は敲打痕を残している。基部は打裂痕を残したままである。S167は完形品で、長さからみれば大型ともいえるが、幅と厚みは他の小型品と大差ないことから小型品に分類した。平面形は長方形だが全体的に丸みをもち、基部も丸みのあるものである。断面形は裏面が平坦気味なのに対し、表面は中央部が膨らみ三角形状となる。表裏面ともに全面研磨されているが、全体的にうすすらと敲打痕を残しているほか、一部に自然面や打裂痕も残している。

基部は一部研磨されているが、打裂痕や敲打痕も多く残している。刃先には使用によると思われる欠損や小さな打点が認められる。

S168～S171は伐採石斧の剥片などその他資料である。S168は打裂痕のみが残る剥片で、打裂成形段階のものと思われる。表面には側部を中心に細かい打裂痕がみられ、裏面は広い剥離面となっている。打裂成形段階の資料としては唯一のものである。S169は敲打整形段階の剥片で、表面は一部打裂痕を残すが敲打痕が多くを占めており、裏面は広い剥離面となっている。S170も敲打整形段階の剥片で、表面は全面に敲打痕がみら

れ、裏面は広い剥離面となっている。端部に自然面を残すことから基部に近い部分であったと思われる。S171は敲打整形段階の未成品と思われる。縦方向に折損しており形状は不明である。表面は

全面に敲打痕を残し、裏面は広い剥離面となっている。上端部と側部の一部には自然面を残している。叩石に転用されている。

6. まとめ

今回の調査においては、調査の目的の一つであった昭和40年時の調査痕跡は発見できなかったが、複数のトレンチにおいて遺構・遺物を発見することができ、遺跡がこの地に確実に存在するという端緒を得たことは大きな成果といえよう。

A区は尾根筋を中心とした範囲を調査したが、A区の東・西側にある谷地形は傾斜がきつく、北側についてもA区より下側は傾斜がきつくなることから、A区の外側に遺構が展開する可能性は低いと思われる。実際にA区東端のA-8トレンチ、西端のA-21トレンチ、北端のA-4・A-13トレンチでは遺物の出土が希薄であった。一方の南側については、A-15トレンチで上方からの遺物の流れ込みがみられたように、尾根筋沿いに上方に遺構が展開していると思われ、これまでのB区の調査において遺構・遺物がより密に検出されている状況から、遺跡の中心はむしろB区側にあるのではないかと推察される。

検出された遺構については、A区の7箇所のトレンチで段状遺構が検出されており、本遺跡を特徴づける遺構として注目される。段状遺構はB区とC区の調査においても複数確認されているが、一般的な弥生集落にみられるような堅穴建物等はこれまでに検出されておらず、本遺跡は段状遺構を主体としていた可能性が高い。こうした背景には斜面地という地形的制約があったのかもしれないが、市内の郡谷遺跡でも同様の段状遺構が確認されていることから、地域的な遺構である可能性もある。今後その構造や性格などと合わせて解明していく必要がある。

出土遺物については、まず土器についてみると、これまで土器に比べて土器の数が極端に少なく、石斧製作遺跡であるが故の現象とも捉えられてき

たが、今回の調査で土器も一定量出土することが明らかとなった。その主体となるのは、西南四国型土器と呼ばれる在地系のもので、客体的ではあるが松山平野など中子地域の特徴を有する土器が出土することもわかった。それらは、折り曲げ口縁の甕や凹線文土器などで、伊予中子Ⅲ様式からⅣ様式に該当するものである(梅木2000)。このなかには他の土器とは明らかに色調や胎土が異なる搬入品の可能性があるものもみられた。土器からは、おおよそ弥生時代中期中葉～後葉の年代観で捉えることができよう。

次に石器についてみると、石斧関係資料の出土数が卓越しており、かねてよりいわれてきた石斧製作遺跡としての評価を裏付ける結果となった。さらに、赤色珪質岩の石核や剥片なども多数出土しており、石鏃や刃器などの小型石器が製作されていたことも明らかになった。石斧については伐採石斧と板状石斧があり、それぞれに未成品や剥片などがあることから、これまでいわれてきた板状石斧だけでなく、伐採石斧についても製作されていたことが明らかになった。また、今回寄贈資料の整理により、伐採石斧の製作工程をある程度復元することができ、さらにその成品には大型品と小型品の2種類があり、形状についても基部が先細りするいわゆる尖基状のものと、そうでないものの少なくとも2種類あることを明らかにすることができた。

今回の調査で、未成品や剥片といった石斧製作に関わる遺物を発見することはできたが、工房跡などの石斧製作に関わる遺構の発見にはいたってならず、その製作体制や原材料となる緑色玄武岩の採集地の特定なども含めて、今後調査を進めていく必要がある。

表2-01 村島宮の首遺跡 土器一覧表 ※()内は確定値。

番号	出土位置			遺物内容			寸法(cm)		色調	特徴	検出 番号	図面 番号
	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	高さ	口径				
1	17c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	67	(170)	—	内外面磨光、	304	30
2	17c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	30	(230)	—	内面にワキ、外面にコナナ。口縁部に片割字文、割目。外面にコナナ。外面にワキ、外面に片割字文、割目。外面にコナナ、竹文。	304	30
3	17c	—	3層	弥生土器	甕	口縁へ 体部	145	60	—	外257664型 内257664型	304	30
4	17c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	32	—	—	外257664型 内257664型	304	30
5	17c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	40	—	—	小型、内外面磨光、割目に突帯。	304	30
6	57c	—	2層	弥生土器	甕	底面	32	—	82	外257664型 内257664型	310	21
7	57c	—	2層	瓦器	甕	口縁部	28	(141)	—	内外面磨光、内面一部にワキ。	310	21
8	67c	57c	—	弥生土器	甕	口縁部	24	—	—	内外面磨光、外面に粘土帯、割縁起突帯、粘土帯上に割目。	313	21
9	67c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	32	—	—	内外面ナデ、外面に粘土帯、口縁部下部に割目。	313	21
10	67c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	33	(200)	—	内外面ナデ、外面に粘土帯、外面に粘土帯、口縁部下部に割目。	313	21
11	67c	—	2層	弥生土器	甕	口縁へ 胴部	83	(261)	—	内外面磨光、外面に粘土帯、粘土帯上に連続して指環瓦片、胴部に割縁起突帯。	313	21
12	67c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	42	(180)	—	内外面ナデ、外面に粘土帯、口縁部下部に割目(平磨)。	313	21
13	67c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	30	(150)	—	内外面ナデ。	313	21
14	67c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	27	—	—	折り返し口縁、内外面ナデ、粘土帯(厚)。	313	21
15	67c	—	2層	弥生土器	高坏	口縁部	26	—	—	内面コナナ、外面ナデ、吻取部穿孔。	313	21
16	67c	—	2層	弥生土器	高坏	口縁部	17	—	—	大型、折り返し口縁、内外面磨光、口縁部下部に割目(平磨)。	313	21
17	67c	57c	—	弥生土器	高坏	胴体部	42	—	—	内面、内外面ナデ、粘土帯(厚)。	313	21
18	67c	—	3層	弥生土器	甕	底面	18	—	90	外257664型	313	22
19	67c	—	2層	弥生土器	甕	底面	27	—	49	外257664型 内257664型	313	22
20	67c	—	2層	弥生土器	甕	底面	49	—	50	外257664型 内257664型	313	22
21	77c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	34	—	—	内外面ナデ、コナナ? 外面に粘土帯、粘土帯上に割目。	319	24
22	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	30	—	—	内外面磨光、口縁部下部に割目。	319	24
23	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	35	—	—	内外面磨光、外面にコナナ、口縁部上部に割目(台形の粘土帯、口縁部下部に小さい割目)。	319	24
24	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	34	(200)	—	内外面にコナナ、口縁部上部に割縁起突帯? 口縁部下部に浅割状の凹線文条。	319	24
25	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	27	—	—	直口口縁、内外面磨光。	319	24
26	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	18	(120)	—	割縁起突帯、内外面ナデ、外面に片割字文、平磨字文。	319	24
27	77c	—	2層	弥生土器	甕	胴部	56	—	—	内面ナデ、外面にコナナ、コナナ、断面三角形突帯(高)13cm。	319	24
28	77c	—	3層	弥生土器	甕	胴部	36	—	—	割縁起突帯、内面ナデ、外面に割縁起突帯、断面三角形突帯(高)16cm、胴部16cm。	319	24
29	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	23	—	—	内外面磨光、外面に粘土帯、割縁起突帯、口縁部下部に割目。	320	25
30	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	34	—	—	内外面磨光、外面に粘土帯、割縁起突帯、口縁部下部に割目。	320	25
31	77c	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	33	(232)	—	内外面磨光、外面ナデ、指環瓦片、外面に粘土帯、粘土帯上に割目。	320	25
32	77c	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	31	—	—	内外面にコナナ、外面に粘土帯、粘土帯上に割目。	320	25

番号	出土位置			遺物内容			寸法(cm)			色調	特徴	押戻 番号	調査 番号
	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	高さ	口径	底径				
33	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.8	—	—	内径25.5cm(深径)	内外面焼成、外面に粘土層、口縁部下部に頸注(不明)。	23	25
34	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	27.5	(3.7)	—	内径25.0cm	大甕、内面ココナデ、板ナデ、胎土加工、外面ナデ、外面に粘土層、口縁部下部に頸注、胴部に肩直三角形突起2条、棒状ナデ。	23	25
35	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.1	(18.0)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)・内径	内外面焼成、外面ココナデ、外面に胎土塗布、口縁部下部に頸注、外面にスス付着。	23	25
36	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	2.4	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内外面焼成、口縁部下部に頸注。	23	25
37	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.2	(38.0)	—	内径25.0cm(口径)・内径	内面板ナデ、外面ナデ、ハケ、口縁部下部に頸注、外面にスス付着。	23	25
38	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	6.4	(25.0)	—	内径25.0cm(口径)	内外面ナデ、口縁部下部に頸注(不明)、その下にノ字状の約欠、胴部に腰線1条。	23	25
39	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.2	(36.6)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)・内径	内外面焼成。	23	25
40	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	2.1	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内外面焼成、外面ナデ、外面にスス付着。	23	25
41	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.8	(17.0)	—	内径25.0cm(口径)	内外面焼成、胎土滑手。	23	25
42	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	6.2	(30.6)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)・内径	内外面焼成、外面ナデ、口縁部下部に頸注(不明)、外面にスス付着。	23	25
43	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	4.2	(36.9)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内外面焼成、外面胎土加工。	23	25
44	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	4.1	(19.0)	—	内径25.0cm(口径)	内面ナデ、板ナデ、外面焼成。	23	25
45	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	4.1	(19.4)	—	内径25.0cm(口径)・内径	内面ナデ、外面ココナデ。	23	25
46	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	3.8	(17.0)	—	内径25.0cm(口径)	内面ナデ、外面ココナデ、口縁部下部に頸注。	23	25
47	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	4.9	(38.0)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内外面焼成、口縁部下部に頸注。	23	25
48	7Tc	SD0	—	赤生土器	甕	口縁部	7.2	(35.0)	—	内径25.0cm(口径)	口縁部、内面板ナデ、胎土加工、外面ココナデ、板ナデ、口縁部下部に頸注、胴部に胎土塗布。	23	25
49	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	2.9	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	折り曲げ口縁、内外面ココナデ。	23	25
50	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	1.4	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	折り曲げ口縁、内外面ココナデ、口縁部が上方へやや凸出。	23	25
51	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	口縁部	1.2	—	—	内径25.0cm(口径)	折り曲げ口縁、内外面焼成、口縁部が上方へやや凸出。	23	25
52	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	口縁部	5.3	(36.0)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	折り曲げ口縁、内外面ナデ、口縁部が上方へやや凸出、外面にスス付着。	23	25
53	7Tc	SD0	—	赤生土器	甕	口縁部	8.7	(30.4)	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	折り曲げ口縁、内面ミガキ、胎土加工、外面ナデ、外面にスス付着。	23	25
54	7Tc	—	2層	赤生土器	甕	体部	5.8	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内面板ナデ、ミガキ、外面ナデ、胴部に胎土塗布1条、外面にスス付着、体部最大径30cm。	23	25
55	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	胴部	7.4	—	—	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	大甕、内外面ナデ、外面に胎土加工、胴部最大径30cm。	23	25
56	7Tc	—	カタラン	赤生土器	甕	胴部	6.2	—	—	内径25.0cm(口径)	内外面ナデ、胎土加工2cm。	23	25
57	7Tc	—	3層	赤生土器	鉢	口縁部	4.9	(13.8)	—	外径25.0cm(口径)	小甕、内外面胎土加工、外面に粘土層、外面にスス付着。	23	25
58	7Tc	—	2層	赤生土器	高杯	口縁部	3.1	—	—	内径25.0cm(口径)	内外面ナデ。	23	25
59	7Tc	—	2層	赤生土器	高杯	口縁部	4.7	—	—	内径25.0cm(口径)	大甕、折り曲げ口縁、口縁部を欠削、内面ミガキ、内外面焼成。	23	25
60	7Tc	—	2層	赤生土器	高杯	胴部	4.5	—	—	内径25.0cm(口径)	内面ナデ、外面胎土、内面有線、胎土加工2cm。	23	25
61	7Tc	—	3層	赤生土器	高杯	胴部	3.3	—	(12.0)	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内面ナデ、外面ミガキ。	23	25
62	7Tc	—	3層	赤生土器	蓋	胴部	2.8	4.3	—	内径25.0cm(口径)	内外面焼成、胎土塗布1条、円孔。	23	25
63	7Tc	—	2層	赤生土器	ジョッキ	把手	3.6	—	—	内径25.0cm(口径)	胎土加工、ナデ。	23	25
64	7Tc	—	3層	赤生土器	甕	体部	5.5	—	(6.7)	外径25.0cm(口径)・内径19.0cm(口径)	内面ナデ、外面胎土、外面に胎土塗布1条、外面にスス付着。	23	25

第2章 村島宮の首遺跡の調査

番号	出土位置			遺物内容			寸法(cm)			色調	特徴	押印番号	調査番号
	調査区	遺構	層位	種類	部位	高さ	口径	底径					
65	7r	—	3層	弥生土器	甕	底面	1.0	—	4.7	内外面磨光、平底	内外面磨光、平底	322	27
66	7r	SR2	—	弥生土器	甕	底面	1.7	—	4.1	内外面磨光の痕跡	内面磨ナシ、外面ナシ、平底	322	27
67	7r	SR10	—	弥生土器	甕	底面	3.4	—	(5.2)	外口径6.9(内径内径) 内径2.9(5.0)	内外面ナシ、平底、内面にスス付着	322	27
68	7r	—	3層	弥生土器	甕	底面	8.0	—	5.0	内外口径7.4(内径) 内径2.9(4.8)	内面磨ナシ、外面ナシ、平底、内外面にスス付着	322	27
69	7r	—	2層	土師器	皿・杯	底面	0.9	—	(6.0)	外口径2.8(底径) 内径1.2(2.4)	内面磨ナシ、底面磨ヘラ切り	329	32
70	8r	—	2層	弥生土器	甕	体部	3.5	—	—	内外口径5.3(内径)	内外面磨光、前面三角形突部2枚	331	32
71	9r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	1.6	—	—	内外口径5.3(内径)	外面に粘土層、粘土層下部に凹目、内面に浮文か?	333	32
72	9r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	3.7	—	—	外口径7.2(底径) 内径3.4(内径)	内外面ナシ、外面に粘土層、口縁部下部に凹目(不平整)、外面にスス付着	333	32
73	9r	—	4層	弥生土器	高坏	口縁部	1.8	—	—	外口径3.5(底径) 内径2.3(3.4)	内面(ノコリ、外面磨光、口縁部下部に凹目)	333	32
74	9r	—	2層	弥生土器	甕	底面	6.1	—	(7.0)	外口径6.9(底径) 内径2.9(3.1)(底径)	内面にコナナシ、外面ナシ、上1/3	333	32
75	15r	SR1	—	弥生土器	甕	口縁・底面	6.9	(15.6)	—	外口径7.4(内径) 内径3.4(内径)	内外面磨光、前面三角形突部2枚	342	34
76	15r	—	3層	弥生土器	甕	底面	5.8	—	—	内外口径5.9(底径)	内面磨光、外面ナシ、前面に前面三角形突部2枚、突部上に凹目、棒状浮文、底面磨光2cm	342	34
77	15r	—	3層	弥生土器	甕	底面	3.5	—	—	外口径5.9(底径) 内径3.5(内径)	前面磨光、外面ナシ、外面(ノコリ、底面磨光2cm、底面磨光2cm)	342	34
78	15r	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	2.0	—	—	内外口径6.4(底径)	内面磨光、外面ナシ、外面に粗い粘土層、口縁部下部に凹目	342	34
79	15r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	3.2	—	—	外口径5.9(底径) 内径3.7(内径)	内面磨光、外面ナシ、口縁部下部に凹目、外面にスス付着	342	34
80	15r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	2.0	—	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(内径)	内面ナシ、外面ナシ、口縁部下部に凹目(不平整)	342	34
81	15r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	1.7	—	—	外口径6.4(底径) 内径3.7(内径)	小皿、内面磨光、外面磨光、口縁部を下方につまみ出す、底面に凹目か?	342	34
82	15r	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	4.3	(14.8)	—	内外口径6.9(底径)	内外面磨光	342	34
83	15r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	4.9	(19.5)	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(内径)	内面磨光、板ナシ、外面ナシ	342	34
84	15r	—	3層	弥生土器	甕	口縁・底面	6.5	(20.8)	—	内外口径7.4(内径)	内面磨光、板ナシ、外面ナシ、前面磨光、外面にスス付着	342	34
85	15r	—	3層	弥生土器	甕	口縁・体部	8.1	(11.4)	—	内外口径7.4(底径)	小皿、内外面に指形土器小蓋着	342	34
86	15r	—	3層	弥生土器	甕	体部	5.0	—	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(内径)	内外面ナシ、前面磨光、前面に磨光、棒状浮文	342	34
87	15r	—	2層	弥生土器	高坏	口縁部	4.9	—	—	内外口径5.3(内径)	大皿、折り曲り口縁、口縁部を下方につまみ出す、内面磨光、外面ナシ	342	34
88	15r	—	3層	弥生土器	鉢・高坏	口縁部	1.9	—	—	内外口径7.4(底径)	内外面磨光、口縁部が凹状を呈す	342	34
89	15r	—	2層	弥生土器	甕	底面	2.5	—	5.6	外口径6.4(底径) 内径3.7(内径)	内外面磨光、平底	342	34
90	15r	—	2層	弥生土器	甕	底面	2.3	—	6.0	内外口径5.3(底径)	内外面磨光、平底	342	34
91	15r	—	3層	弥生土器	甕	底面	3.4	—	(6.2)	内外口径7.4(内径)	内面ナシ、前面磨光、外面ナシ	342	34
92	16r	—	2層	弥生土器	甕	底面	3.4	—	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(内径)	内外面ナシ、外面三角形突部2枚、上面に突部1枚	342	37
93	17r	—	2層	弥生土器	甕	口縁部	2.2	—	—	内外口径7.4(底径)	内面磨光、外面ナシ、前面磨光、外面に粘土層	349	37
94	17r	—	4層	弥生土器	甕	口縁部	2.5	—	—	内外口径7.4(内径)	内外面コナナシ、口縁部が凹状を呈す	349	37
95	17r	—	4層	弥生土器	甕	口縁部	5.2	(20.2)	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(底径)	内外面コナナシ	349	37
96	17r	—	4層	弥生土器	甕	口縁部	1.5	—	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(底径)	内面コナナシ、外面ナシ、前面磨光、外面に粗い粘土層、口縁部下部に凹目、外面にスス付着	349	37
97	17r	—	既層	弥生土器	甕	口縁・底面	4.6	(17.4)	—	外口径7.4(内径) 内径3.7(底径)	内外面ナシ、前面磨光、外面に粗い粘土層、口縁部下部に凹目、外面に前面三角形突部、棒状浮文	349	37
98	17r	—	既層	弥生土器	甕	口縁部	1.8	—	—	内外口径7.4(内径)	口縁部、内面ナシ、外面磨光、外面に粗い粘土層、粘土層上に連続する指形土器	349	37

番号	出土位置			遺物内容			寸法(cm)			色調	特徴	押戻 番号	調査 番号
	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	高さ	口径	底径				
99	ITr	—	西2層	弥生土器	甕	口縁部	4.0	(底.0)	—	内径約70cm以上の黄褐色、高約60cm	内外面磨光、口縁部下部に肩柱。	249	37
100	ITr	—	西2層	弥生土器	高坏	口縁部	2.3	—	—	内径約70cm	内面ヨコナデ、凹線文4本。	249	37
101	ITr	—	3層	弥生土器	甕	口縁部	1.8	(底.0)	—	内径約70cm以上の黄褐色	内面ナデ、外面ナデ、自然面、外周に磨光、口縁部下部に肩柱。	252	38
102	ITr	—	2層	弥生土器	甕	体部	5.3	—	—	外径約50cm、内径約45cm	内外面磨光、凹線に凹文4本。	252	38
103	ITr	—	3層	弥生土器	甕	体部	7.5	—	—	外径約70cm以上の黄褐色、高約60cm	内面ナデ、自然面、外周に磨光、胴部に凹線4本、下部凹文、体部最大径19cm。	252	38

表4-02 村島宮の首遺跡 石器・石製品一覧表

番号	出土位置			遺物内容		石材	寸法(cm)			重量 (g)	特徴	押戻 番号	調査 番号
	調査区	遺構	層位	種別	石形 状態		最大長	最大幅	最大厚				
S1	ITr	—	2層	伐採石斧	成品	緑色玄武岩	4.0	3.5	1.2	22.7	身の一部の破片。表面に研磨痕。	204	20
S2	ITr	—	2層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	12.5	5.0	2.0	2174	刃部割を破損。全面に打製痕。表面の一部が磨光。	204	20
S3	ITr	—	2層	伐採石斧	未成品	緑色玄武岩	11.6	6.8	4.3	448.8	自然面を加削す。表面部に研磨痕、胴縁部に打製痕。	204	20
S4	ITr	—	2層	石槌	—	赤色埴岩	6.9	5.1	1.9	71.6	表面面を加削す。	204	20
S5	ITr	—	2層	スクレイパー	—	ナメカイト	4.5	2.5	0.6	7.2	側部を欠損。刃部部に細かい研磨痕。	205	20
S6	ITr	—	2層	礫石	—	高砂岩	4.1	5.4	4.5	84.5	研磨面の一部の破片。肩柱。	205	20
S7	ITr	—	2層	板状石斧	断片	緑色玄武岩	6.7	3.7	1.1	31.1	自然面を一部残す。	230	23
S8	ITr	—	2層	石錘	—	赤色埴岩	2.2	1.7	0.3	1.0	凸底。	230	23
S9	ITr	—	2層	断片	—	赤色埴岩	3.8	2.6	0.6	7.6	表面に広い研磨面を残す。	230	23
S10	ITr	—	2層	投擲	—	高砂岩	4.5	3.3	2.8	55.5		230	23
S11	6Tr	—	2層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	6.0	3.6	1.0	23.1	刃部の破片。刃先。両側縁部に研磨痕。片刃に近い。	234	22
S12	6Tr	—	3層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	6.0	4.9	1.5	47.8	刃部の破片。表面部に打製痕・研磨痕。	234	22
S13	6Tr	—	西2層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	11.7	4.7	1.7	132.6	刃部割を欠損。表面部に打製痕・研磨痕。全面的に磨光。赤く変色。	234	22
S14	6Tr	SH02	—	伐採石斧	未成品	緑色玄武岩	14.2	7.2	5.1	827.9	欠打整刃段階。全面に鋭打痕。一部に自然面・打製痕を残す。	234	22
S15	6Tr	—	西2層	板状石斧	未成品	緑色玄武岩	8.3	4.4	1.7	70.2	表面部に広い研磨面。胴縁部に打製痕。	234	22
S16	6Tr	—	2層	板状石斧	素材	緑色玄武岩	18.9	8.4	2.6	567.2	表面のほぼ全面に自然面。表面に広い研磨面。	235	22
S17	6Tr	—	3層	伐採石斧	断片	緑色玄武岩	14.6	7.1	1.4	217.0	表面に打製痕・鋭打痕。表面に研磨痕。	235	22
S18	6Tr	—	2層	伐採石斧	断片	緑色玄武岩	10.7	9.8	2.3	229.9	表面に打製痕・鋭打痕。表面に研磨痕。	235	22
S19	6Tr	—	3層	板状石斧	断片	緑色玄武岩	11.1	5.9	0.9	66.7	表面に打製痕。表面に研磨痕。	235	22
S20	6Tr	—	3層	石錘	—	赤色埴岩	2.5	1.7	0.3	1.2	平底。	236	22
S21	6Tr	—	3層	石錘	—	赤色埴岩	3.5	1.6	0.3	1.9	大型。有蓋。	236	22
S22	6Tr	—	2層	石錘	—	赤色埴岩	3.8	1.7	0.3	2.2	大型。凸底。	236	22
S23	6Tr	—	2層	石槌	—	赤色埴岩	10.8	4.2	1.8	122.8	自然面を加削す。	236	22
S24	6Tr	SH02	—	石割丁了?	—	緑色片岩	7.5	3.7	0.7	24.6	未成品か?表面が尖り鋭打痕。表面、胴縁部に研磨痕。	236	22
S25	6Tr	—	2層	石錘	—	緑色玄武岩?	9.3	7.0	1.1	123.3	胴縁部凹部を打ち欠く。	236	22
S26	6Tr	—	西2層	投擲	—	高砂岩	5.2	3.9	3.3	76.1		236	22
S27	6Tr	SH01	—	礫石	—	砂岩	9.7	7.7	4.1	254.4	表・両面の一部分の破片。表面に研磨痕。やや粗粒。	236	22
S28	7Tr	—	2層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	14.7	3.9	1.8	141.6	尖形片。表面部に打製痕・研磨痕。粗刃。	232	22
S29	7Tr	—	5層	板状石斧	成品	緑色玄武岩	9.7	4.7	1.5	87.1	基部割を欠損。表面に自然面を残す。刃部付近のみ研磨痕。片刃に近い。	232	22

第2章 村鳥宮の首遺跡の調査

番号	出土位置			遺物内容		石材	寸法(cm)			視重量(g)	特徴	標記番号	図面番号
	調査区	遺構	層位	類別	石質状態		最大長	最大幅	最大厚				
S30	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	7.0	4.7	1.3	75.3	基部側を欠損。表面面に研磨痕、打痕。	203	27
S31	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	7.6	5.0	1.8	98.1	基部側を欠損。表面面ともに刃部が中心に研磨痕。打痕。	203	27
S32	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	9.5	5.3	1.1	84.9	基部側を欠損。表面面ともに刃部が中心に研磨痕。打痕。	203	27
S33	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	11.2	3.5	1.3	95.2	基部側を欠損。縦面、表面面研磨痕、表面に打痕。片方に近い。	203	28
S34	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	7.3	4.6	1.5	84.3	刃部側を欠損。裏面と側縁部の一部に研磨痕。裏に打痕。	203	28
S35	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	9.1	4.4	1.8	86.9	刃部側を欠損。表面面に打痕研磨痕。	203	28
S36	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	9.1	5.2	1.9	114.8	刃部側を欠損。尖基状。表面面に打痕研磨痕。	203	28
S37	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	13.5	5.3	2.1	184.7	刃部側を欠損。表面面に打痕研磨痕。基部に自然面を残す。	204	28
S38	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	11.2	5.3	2.2	185.7	刃部側を欠損。表面面に打痕。表面の一部に磨滅痕あり。	204	28
S39	77c	—	2a層	板状石片	成品	緑色正武岩	5.1	4.5	1.4	50.2	刃基部を欠損。表面面に打痕。側縁部の一部に研磨痕。	204	28
S40	77c	—	3a層	板状石片	成品	緑色正武岩	10.8	4.3	2.1	152.5	刃基部を欠損。表面面に打痕研磨痕。	204	28
S41	77c	—	3a層	不明石類	—	緑色正武岩	8.0	3.1	1.4	52.0	刃基部を欠損。表面面に研磨痕。側縁部へ近い打痕。	204	29
S42	77c	—	2a層	板状石片	未成歩	緑色正武岩	10.8	5.4	2.0	181.1	刃部側を欠損。表面に敲打痕。	204	29
S43	77c	—	2a層	板状石片	未成歩	緑色正武岩	8.0	4.0	1.1	42.1	刃部側を欠損。表面面に打痕。刃部へ近い。	204	29
S44	77c	—	2a層	板状石片	素材	緑色正武岩	18.2	6.4	3.8	500.6	面に自然面を残す。表面に広い研磨面を残す。	205	29
S45	77c	—	3a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	9.2	5.9	1.1	91.5	表面に敲打痕・自然面。表面に広い研磨面を残す。板状石片の石材に近い。	205	29
S46	77c	SD01	—	板状石片	粗片	緑色正武岩	6.0	3.2	0.9	22.2	表面に敲打痕。表面に広い研磨面を残す。	205	29
S47	77c	—	3a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	5.4	3.5	0.9	22.7	表面に打痕。表面に広い研磨面を残す。周縁部に細かい打痕。	205	29
S48	77c	—	3a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	9.3	5.2	2.0	100.8	面に自然面を残す。表面に広い研磨面を残す。	205	29
S49	77c	—	2a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	9.9	4.7	1.6	44.0	面に自然面を残す。表面に広い研磨面を残す。	205	29
S50	77c	—	3a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	10.1	5.1	1.1	55.5	面に自然面を残す。表面に広い研磨面を残す。	205	29
S51	77c	—	2a層	板状石片	粗片	緑色正武岩	9.4	5.9	1.4	64.8	表面に広い研磨面を残す。	205	29
S52	77c	SD01	—	板状石片	粗片	緑色正武岩	8.8	4.1	0.7	27.2	表面に広い研磨面を残す。	205	29
S53	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	1.8	1.2	0.3	0.7	先端と基部の一部を欠損。平基。	206	30
S54	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	2.6	1.6	0.5	1.9	平基。	206	30
S55	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	2.9	1.6	0.3	1.4	基部を欠損。丸みのある平基。	206	30
S56	77c	SK02	—	石類	—	赤色地質岩	2.6	1.7	0.3	1.6	凹基。	206	30
S57	77c	—	2a層	石類	—	赤色地質岩	2.8	1.4	0.4	1.6	基部の一部を欠損。凹基。表面に自然面を残す。	206	30
S58	77c	—	2a層	スレイパー	—	赤色地質岩	3.1	4.0	0.3	6.5	表面面に広い研磨面を残す。刃部へ細かい研磨。面に自然面を残す。	206	30
S59	77c	—	2a層	スレイパー	—	赤色地質岩	4.1	5.5	1.3	24.5	表面面に広い研磨面を残す。刃部へ細かい研磨。表面に自然面を残す。	206	30
S60	77c	—	2a層	スレイパー	—	赤色地質岩	3.8	5.6	0.5	11.3	表面面に広い研磨面を残す。刃部へ細かい研磨。表面に自然面を残す。	206	30
S61	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	4.4	7.2	4.5	150.3	面に自然面を残す。石裏の貫入が入る。	207	30
S62	77c	—	2a層	石類	—	赤色地質岩	4.9	5.9	3.0	77.2	面に自然面を残す。	207	30
S63	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	5.3	4.1	2.9	70.2	面に自然面を残す。	207	30
S64	77c	—	3a層	石類	—	赤色地質岩	7.5	8.9	2.0	165.8	面に自然面を残す。石裏の貫入が入る。	207	30
S65	77c	—	2a層	柱状片 方石片	—	緑色片岩	4.9	4.4	0.6	24.4	石類面の基部側の粗片。全面に研磨痕。	207	31
S66	77c	—	3a層	板状石片	—	緑色片岩	5.3	2.2	0.8	13.9	基部側を欠損。全面に研磨痕。	207	31
S67	77c	—	2a層	石片	—	緑色片岩	6.5	2.2	0.7	11.7	粗片部分の粗片。表面面に研磨痕。粗片は研磨面か？	207	31

番号	出土位置		遺物内容		石材	寸法(cm)			収重量(g)	特徴	押印 番号	図面 番号	
	遺構 区	層位	類別	石洋 状態		最大長	最大幅	最大厚					
S68	7Tc	—	2層	石包丁?	—	緑色片岩	9.8	4.4	0.6	272	土灰品か?表面を欠損、表面に自然面を残す。下辺部に細かい打製痕。	237	Ⅲ
S69	7Tc	—	2層	礫石	—	砂岩	8.2	5.6	5.0	3073	表面わずかに敲打痕、表面全面に研磨痕、粗目。	238	Ⅲ
S70	7Tc	—	3層	礫石	—	砂岩	11.1	8.2	3.9	5168	扁平円形、表面全面に敲打痕・研磨痕、両側部に敲打による凹み、粗目。	239	Ⅲ
S71	7Tc	—	2層	石鏝	—	緑色玄武岩	21.6	10.0	4.1	10751	表面の中央に凹形状に研磨痕、若干凹む。	239	Ⅲ
S72	7Tc	—	2層	礫石	—	流紋岩	9.2	4.0	2.8	1366	表面全面に研磨痕、やや粗目。	238	Ⅲ
S73	7Tc	—	2層	礫石	—	安山岩	10.8	6.0	2.1	1721	表面全面に研磨痕、工具痕らしき凹みあり、粗目。	238	Ⅲ
S74	7Tc	—	2層	礫石	—	流紋岩	11.1	13.2	4.2	8767	表面の中央に研磨痕、やや粗目。	238	Ⅲ
S75	8Tc	—	2層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	9.8	3.9	1.4	88.9	片割れを欠損、表面全面に打製痕・研磨痕。	231	Ⅲ
S76	9Tc	—	2層	浅塚石片	未成晶	緑色玄武岩	13.5	6.6	6.2	8435	敲打痕を欠損、表面三角形、端部に自然面を残す、各側部に打製痕・敲打痕。	233	Ⅲ
S77	9Tc	—	3層	板状石片	未成晶	緑色玄武岩	10.8	5.2	1.9	1536	表面全面に広い研磨痕・打製痕、側面に打製痕。	233	Ⅲ
S78	9Tc	—	2層	浅塚石片	素材	緑色玄武岩	13.0	9.4	7.1	10449	面に自然面を残す。	233	Ⅲ
S79	9Tc	—	4層	浅塚石片	割片	緑色玄武岩	15.9	8.8	2.2	391	表面に打製痕、表面に広い研磨面を残す。	234	Ⅲ
S80	9Tc	—	2層	板状石片	割片	緑色玄武岩	14.2	8.7	2.2	3071	表面に打製痕・磨理痕、表面に広い研磨面を残す。	234	Ⅲ
S81	9Tc	—	焼土	割片	—	赤色珪質岩	3.9	2.7	0.5	80	表面に広い研磨面を残す、端部に自然面を残す。	234	Ⅲ
S82	9Tc	—	2層	浅塚	—	流紋岩	3.6	2.8	2.3	322		234	Ⅲ
S83	9Tc	—	2層	板状石片	—	流紋岩	8.8	1.6	0.9	200	先端に磨痕。	234	Ⅲ
S84	9Tc	—	2層	礫石	—	流紋岩	3.9	5.4	1.2	238	表面・側面に磨痕、両面に研磨痕、やや粗目。	235	Ⅲ
S85	9Tc	—	2層	礫石	—	流紋岩	13.1	10.0	4.8	5963	表面・側面に磨痕、両面に研磨痕、やや粗目。	235	Ⅲ
S86	9Tc	—	2層	礫石	—	流紋岩	30.2	13.2	8.2	4090	花形石。表面の中央に研磨痕、やや粗目。	235	Ⅲ
S87	15Tc	—	3層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	18.1	4.6	1.9	2292	花形石。表面全面に打製痕・研磨痕、粗目。	243	Ⅲ
S88	15Tc	—	3層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	11.6	5.0	1.5	1062	片割れを欠損、表面全面に打製痕・研磨痕、粗目。	243	Ⅲ
S89	15Tc	—	2層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	9.3	5.0	2.3	1400	片割れを欠損、表面全面に研磨痕、側面部に磨理痕・打製痕を残す、粗目。	243	Ⅲ
S90	15Tc	—	2層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	8.9	4.5	1.8	993	片割れを欠損、表面全面に広い研磨面・打製痕、わずかに研磨痕、粗目。	243	Ⅲ
S91	15Tc	—	2層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	13.3	4.3	1.5	1254	片割れを欠損、表面全面に広い研磨面・打製痕、わずかに研磨痕、粗目。	243	Ⅲ
S92	15Tc	—	2層	板状石片	成晶	緑色玄武岩	11.4	4.7	1.7	1446	片割れを欠損、表面全面に打製痕・研磨痕。	243	Ⅲ
S93	15Tc	—	2層	浅塚石片	未成晶	緑色玄武岩	8.9	6.9	3.1	2740	敲打痕を欠損、側面部に敲打痕。	243	Ⅲ
S94	15Tc	—	2層	石鏝	—	赤色珪質岩	2.5	1.2	0.4	13	先端を欠損、平砥。	244	Ⅲ
S95	15Tc	—	3層	石鏝	—	赤色珪質岩	2.3	1.8	1.5	18	先端を欠損、丸みのある平砥。	244	Ⅲ
S96	15Tc	—	2層	板状石片	—	赤色珪質岩	2.7	4.1	0.6	10.9	上下に細かい研磨痕。	244	Ⅲ
S97	15Tc	—	2層	石鏝	—	赤色珪質岩	5.5	3.5	1.5	234	自然面を残す。	244	Ⅲ
S98	15Tc	—	2層	石鏝	—	赤色珪質岩	6.4	3.6	1.4	312		244	Ⅲ
S99	15Tc	—	3層	石鏝	—	赤色珪質岩	3.5	2.8	1.3	183		244	Ⅲ
S100	15Tc	—	3層	割片	—	赤色珪質岩	2.2	3.4	0.8	58	表面に自然面、表面に広い研磨面を残す。	244	Ⅲ
S101	15Tc	—	2層	スクレイパー	—	黒色チャート	3.4	2.7	1.1	77	表面に広い研磨面を残す、刃部に細かい研磨痕。	244	Ⅲ
S102	15Tc	—	3層	台石	—	緑色玄武岩	19.4	9.7	5.6	12546	中部程度を欠損、表面の中央部に敲打痕。	245	Ⅲ
S103	15Tc	—	2層	礫石	—	砂岩	10.6	9.3	4.6	6825	扁平円形、表面全面に研磨痕、側面部に敲打痕、やや粗目。	245	Ⅲ
S104	15Tc	—	3層	礫石	—	砂岩	17.3	11.6	6.0	16888	下半部を欠損、表面全面に研磨痕、粗目。	245	Ⅲ

第2章 村鳥宮の首道跡の調査

番号	出土位置			遺物内容		石材	寸法(cm)			数量(個)	特徴	押込番号	図録番号
	調査区	遺構	層位	種別	石質状態		最大長	最大幅	最大厚				
SI05	167c	—	2層	板状石片	素材	緑色玄武岩	9.8	10.0	3.4	335.6	表面に自然面。表面に広い凹溝を有す。	347	37
SI06	177c	—	3～4層	板状石片	成品	緑色玄武岩	13.8	5.1	1.2	118.5	完成品。楕円。表面面ともに両面付に研磨面。偏平。	349	37
SI07	177c	—	西層	板状石片	成品	緑色玄武岩	10.5	4.7	1.3	96.8	身・脚部のごく一部に研磨面。磨減が著しい。	349	37
SI08	177c	—	3～4層	板状石片	成品	緑色玄武岩	9.2	4.1	1.1	41.2	両面の破片。表面面ともに両面付に研磨面。	349	37
SI09	177c	—	3～4層	板状石片	断片	緑色玄武岩	6.2	8.8	2.5	194.1	表面に打製面。表面に広い凹溝面を有す。側面に敲打痕・自然面を残す。	349	37
SI10	177c	—	廃土	石鏝	—	赤色地質岩	2.4	1.6	0.3	1.2	基部の一部を欠損。凹坑。	350	38
SI11	177c	—	3～4層	石皿	—	緑色玄武岩	17.6	6.0	6.3	885.8	表面に磨面。楕円の凹坑。	300	38
SI12	177c	SR05	—	礎石	—	流紋岩	11.8	8.0	4.7	498.7	表面面に研磨面。やや粗目。	300	38
SI13	197c	—	2層	板状石片	断片	緑色玄武岩	7.6	4.4	1.0	37.3	表面に自然面・打製面。表面に広い凹溝面を残す。	354	38
SI14	197c	—	2層	石鏝	—	赤色地質岩	2.6	2.0	0.4	2.1	先端を欠損。平基。	354	38
SI15	197c	—	2層	石鏝	—	赤色地質岩	2.7	0.9	0.3	0.6	粗目。	354	38
SI16	217c	—	2層	礎石	—	安山岩	9.0	4.6	2.6	126.4	表面部の中央部に研磨面。やや粗目。	357	38
SI17	表段	—	—	板状石片	断片	緑色玄武岩	7.6	5.4	1.0	56.1	両面側で研磨。表面面に広い凹溝面。	358	39
SI18	表段	—	—	石鏝	—	—	4.8	3.4	0.8	22.9	70°付近で研磨。上下端の一部を打ち欠き。磨減している。	358	39
SI19	表段	—	—	礎石	—	流紋岩	11.4	4.6	4.5	699.3	辺沿部で研磨。右側面。表面面に研磨面。やや粗目。	358	39
SI20	表段	—	—	礎石	—	砂岩	20.0	12.0	7.0	230	両面側で研磨。横切面。表面面に研磨面・打製面。粗目。	358	39
SI21	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	28.9	10.7	5.0	1272.2	敲打製断片。自然面を残す。	359	40
SI22	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	21.2	9.5	4.3	1142.5	敲打製断片。打製面を残す。	359	40
SI23	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	15.3	8.2	5.7	1214.7	敲打製断片。自然面・打製面を残す。	360	40
SI24	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	14.6	7.8	5.6	990.4	敲打製断片。自然面・打製面を残す。	360	41
SI25	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	16.6	8.3	5.8	1160.4	敲打製断片。自然面・打製面を残す。	361	41
SI26	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	15.4	8.5	4.8	1136.9	敲打製断片。自然面を残す。正辺七、一、十二 宮首]	361	41
SI27	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	15.2	8.2	3.5	759.2	敲打製断片。自然面・打製面を残す。	362	42
SI28	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	17.0	7.5	4.4	835.7	敲打製断片。打製面を残す。	362	42
SI29	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	13.7	7.2	3.7	664.6	敲打製断片。自然面・打製面を残す。クニ(石鏝A)]	363	42
SI30	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	15.0	7.7	4.3	785.1	敲打製断片。自然面・打製面を残す。クニ(石鏝 杵)	363	43
SI31	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	17.3	7.1	3.7	729.0	敲打製断片。自然面・打製面を残す。	363	43
SI32	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	16.4	6.9	4.2	500.3	敲打製断片。自然面・打製面を残す。注記(七、一、一四 宮首)	363	43
SI33	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	10.9	6.1	3.9	336.9	敲打製断片。小型。打製面を残す。	364	44
SI34	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	13.3	6.0	3.8	474.3	敲打製断片。小型。打製面を残す。注記(七、一、一四 宮首)	364	44
SI35	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	10.7	6.2	3.0	349.2	敲打製断片。小型。自然面・打製面を残す。	364	44
SI36	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	13.7	6.0	3.3	388.4	敲打製断片。小型。打製面を残す。	364	44
SI37	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	11.0	4.9	2.7	196.3	敲打製断片。小型。自然面・打製面を残す。	364	44
SI38	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	13.2	4.8	2.5	243.4	敲打製断片。小型。自然面・打製面を残す。	364	44
SI39	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	15.4	5.4	3.3	436.3	敲打製断片。小型。自然面・打製面を残す。注記(七、一、一四 宮首)	365	45
SI40	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	14.7	6.2	4.8	688.5	敲打製断片。基部に打製面を残す。凹溝面を残す。	366	45
SI41	遺物資料	—	—	板状石片	未成品	緑色玄武岩	13.9	6.5	4.7	637.5	敲打製断片。明石に転用。	366	45

番号	出土位置		遺物内容		石材	寸法(cm)			収量量(g)	特徴	押印番号	図面番号	
	遺構	層位	種類	石押状態		最大長	最大幅	最大厚					
S142	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	136	66	5.1	8527	縦打整形(強)。基部に打製痕を残す。	266	㊦
S143	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	146	75	4.2	6463	縦打整形(強)。基部に打製痕を残す。一部断面を残す。	266	㊦
S144	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	146	73	4.3	7113	縦打整形(強)。基部に自然面・打製痕を残す。注記七、一、二、六宮。	267	㊦
S145	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	109	68	4.3	6019	縦打整形(強)。基部に自然面・打製痕を残す。叩石に転用。	267	㊦
S146	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	168	74	4.3	6634	縦打整形(強)。刃部に打製痕を残す。	267	㊦
S147	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	96	61	3.7	3714	縦打整形(強)。刃部に打製痕を残す。	267	㊦
S148	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	115	64	4.2	5062	縦打整形(強)。注記七、一、三、四宮。	267	㊦
S149	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	123	60	3.6	3981	縦打整形(強)。小型。基部に打製痕を残す。	268	㊦
S150	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	11.1	5.3	3.7	3963	縦打整形(強)。小型。基部に打製痕を残す。	268	㊦
S151	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	101	56	2.7	2436	縦打整形(強)。小型。基部に打製痕を残す。注記七、一、二、六宮。	268	㊦
S152	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	141	54	3.0	3402	縦打整形(強)。小型。基部に打製痕を残す。	268	㊦
S153	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	120	46	3.2	2300	縦打整形(強)。小型。断面。基部に打製痕を残す。	268	㊦
S154	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	125	62	4.8	5182	大型。全面に研磨面。	269	㊦
S155	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	12.7	6.3	4.2	5332	大型。全面に研磨面。断面面で研磨。中平厚刃。	269	㊦
S156	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	35.4	62	3.5	6429	大型。全面に研磨面。	269	㊦
S157	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	141	60	3.3	5146	大型。刃部と身の一部に研磨面。その他は縦打痕を残す。基部に自然面を残す。刃磨れ。	269	㊦
S158	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	15.0	5.7	3.0	3779	小型。全面に研磨面。刃部部への研磨。	269	㊦
S159	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	11.7	5.5	1.5	1288	大型。刃部付近に研磨面。その他は打製痕を残す。全体的に磨滅。	269	㊦
S160	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	9.8	5.0	2.6	2284	小型。全面に研磨面があるが、基部と身の所々に縦打痕を残す。叩石に転用か？	270	㊦
S161	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	9.8	5.1	3.6	2554	小型。研磨面は半分程度で打製痕・縦打痕を残す。断面面で研磨。	270	㊦
S162	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	12.1	4.9	3.0	3019	小型。全面に研磨面があるが、側面部に縦打痕を残す。基部残断面は磨滅か？	270	㊦
S163	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	15.8	5.4	3.8	3398	小型。全面に研磨面があるが、基部と身の一部に縦打痕を残す。	270	㊦
S164	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	8.4	4.6	2.3	1598	小型。基部と身の一部に研磨面があるが、その他は縦打痕を残す。	271	㊦
S165	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	9.0	5.2	2.2	1753	小型。刃部と身の一部に研磨面があるが、その他は縦打痕を残す。	271	㊦
S166	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	13.7	4.9	2.9	3464	小型。変形品。刃部と身の一部に研磨面があるが、その他は縦打痕を残す。基部に打製痕を残す。	271	㊦
S167	青柳資料	—	—	段塚石押	成品	緑色玄武岩	26.0	5.4	3.0	5859	小型。変形品。全面に研磨面はあるが、身の側に自然面・縦打痕を残す。	271	㊦
S168	青柳資料	—	—	段塚石押	割片	緑色玄武岩	10.3	7.3	1.8	1816	打製痕形成部。側面に打製痕。裏面に広い研磨面を残す。	272	㊦
S169	青柳資料	—	—	段塚石押	割片	緑色玄武岩	15.7	6.5	1.9	2529	縦打整形(強)。表面に縦打痕一部・打製痕。裏面に広い研磨面を残す。注記七、一、六、八宮。	272	㊦
S170	青柳資料	—	—	段塚石押	割片	緑色玄武岩	6.0	4.6	1.3	533	縦打整形(強)。表面は全面縦打痕。裏面に広い研磨面。断面に自然面を残す。	272	㊦
S171	青柳資料	—	—	段塚石押	未成品	緑色玄武岩	19.9	5.7	2.5	4390	縦打整形(強)。表面は全面縦打痕。裏面に広い研磨面。一部に自然面を残す。叩石に転用。	272	㊦

表4-03 村島宮の首遺跡 金属製品一覧表

番号	出土位置			種別	器種	寸法 (cm)			重量 (g)	特徴	検出 番号	図面 番号
	調査区	透視	層位			最大長	最大幅	最大厚				
M001	17c	—	2層	銅製品	銜管	6.6	1.1	1.1	235	扁首、大皿は小型	205	20
M002	7c	—	2層	銅製品	銜管	7.9	1.1	1.1	76	扁首、大皿は大型で、大皿下に溝痕等。	229	32

【参考文献】

- 石川比呂志 1966『村島遺跡学術発掘調査参加報告』『西
農史学』第6号、愛媛県立西条農業高等学校
- 梅木謙一 2000『3 伊予中部地域「弥生土器の様式と編
年 四国編」、木耳社
- 愛媛県史編さん委員会 編 1986『愛媛県史 資料編 考
古』、愛媛県
- 長井數秋 1963『宇和町岩木洞穴遺跡出土の弥生式土器
に就いて』『伊予史談』第168号、伊予史談会
- 長井數秋 1966『南伊予地方における弥生式土器』『愛媛
県立西条農業高等学校研究紀要』第1号、愛媛県立西
条農業高等学校
- 樋口清之 1933『伊豫國喜多郡地方遺蹟概説』『史前學雜
誌』第5巻第2號、史前學會
- 樋口清之 1937『大洲地方先史時代の生活』『温故』創刊
号、大洲史談會

第3章 みやこだに 都谷遺跡の調査

1. 調査にいたる経緯と目的

都谷遺跡の存在が記録に現われるのは、昭和3(1928)年にさかのぼる。当時の大洲地域は、少彦名命伝説に対する研究が盛り上がりを見せたほか、各地に残された巨石構造物に対しても強い関心もたれ、昭和3(1928)年11月下旬には6日間の日程で鳥居龍藏氏が巨石構造物の調査に訪れている。調査最終日の11月29日午前、都谷をはじめとした周辺を調査していることが新聞記事に残されており、これが遺跡の初出となる。また、地元郷土史家で、地方紙記者であった尾崎繁年氏は、都谷遺跡が鳥居龍藏氏によって発見された遺跡であることを記している。

この遺跡の内容については、当時、國學院大学の学生であった樋口清之氏が複数報告しており、弥生土器約10点や完形の磨製石斧1点などが紹介され、この遺跡が集落地であったとの指摘もしている。その後も、図3-07に代表されるような遺物の発見が相次いでおり、昭和39(1964)年には、松岡文一氏が中期中葉の土器様式として「都谷式

土器」を設定している。以降は長井數秋氏や地元郷土史家らによる周辺の踏査によって資料が蓄積され、断続的に報告されている。ただし、肝心の遺跡の場所については明確にされてきておらず、やや混乱が続いた状態であった。

この状況が変化するのは、平成27(2015)年になってからである。同年7月14日、都地区の個人より、平成26(2014)年12月下旬に畑作地を耕作していたところ土器などが多量に出土したとの情報提供があり、大洲市教育委員会が現地を確認した。現地では比較的良好な状態で土器などが採集されていることから、近くに遺跡が存在している可能性が高いことを把握した(写真3-01)。幸いにも地権者や地元住民の理解や協力を得ることができ、また、遺跡に対する関心も地区全体が高かったこと、さらに、学史的にも大洲市内では重要な遺跡と位置付けられることから、大洲市教育委員会では、今回の遺物発見を契機として遺跡の場所や範囲を特定するため試掘調査に着手した。

2. 遺跡の立地環境

都谷遺跡は、弘川水系の矢落川とその支流・都川とに挟まれた、小さな丘陵上に位置する。丘陵頂部は標高約90mを測る。この丘陵の後縁は平面で馬蹄形を呈しており、頂部の中央からは南に向

けて谷が形成される。この谷は、頂部南側から都川に向けて屈曲しながらのびている。この谷を挟んだ反対側(南西側)にも小さな丘陵が形成されており、この丘陵の後縁も平面形で馬蹄形を呈して



写真3-01 採集された遺物の現地確認



写真3-02 現地指導の様子(2次調査)

いる。2丘陵とも北東面に比較的緩やかな斜面が広がり、都川および都川沿いに形成された都集落を見下ろすことができる。遺跡はこの斜面上に位置する。標高は約40～80mであり、都集落からの比高差は約30～70mである。なお、丘陵もしくは尾根の矢落川に面した側は、急斜面もしくは崖面が続いている。現在はヒノキ植林のため眺望は開けないが、丘陵頂部などからは大洲盆地全体を見渡すことができ、さらに、約4.4km南に離れた村島宮の首遺跡も視認できたと思われる。

近接する矢落川沿いには弥生時代遺跡が点在しており、河床中の矢落川遺跡、上流側には底なし

田遺跡、田合遺跡、元城跡などがある。また、胎川と矢落川との合流地点に近く、合流地点から遺跡までの距離は約1.1kmである。

遺跡付近の地質は、白亜紀に低温高压型変成作用によって生じた変成岩類であり、岩相は泥質片岩である。全体的に脆い基盤(地山)であり、丘陵下部は急傾斜面崩壊危険箇所に指定されている。

谷より北側では、昭和中期まで畑作地として利用されていたが、現在は大半が植林もしくは荒地になっている。

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査区域は、大きく4箇所に分けて設定した。平成26(2014)年12月に遺物が採集された畑作地とその周辺を「2015年度調査区」として、1次調査を実施した。

試掘調査が本格化した平成28(2016)年度以降(2次調査以降)は、1次調査で実施した踏査や地元住民の証言をもとに調査範囲を拡大し、丘陵頂部付近を「A区」、谷の北側を「B区」、谷の南側を「C区」として設定した。2次調査以降の試掘坑(トレンチ)の番号については、各区域のアルファベットを冠し識別させている。なお、昭和47(1972)年9月に大洲市教育委員会によって作成された埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、都谷遺跡の範囲はB区から2015年度調査区の一部にかけてとされる。

今回は、1次調査で実施した2015年度調査区、2次調査で実施したA区、C区の調査成果、および、採集された資料について報告する。B区の調査成果については、機をあらためて報告する予定である。

(2) 調査の概要と方法

1次調査は、平成28(2016)年2月1日～7日の期間で実施した。地権者とともに遺物が採集された当時の状況を確認しながら、その地下の状態を確認するためトレンチを設定した。また、その周辺でも遺物や遺構の発見を目指し、地権者の了承を得られた範囲でトレンチを設け、合計6箇所を掘削した。また、遺跡全体で踏査も実施し、遺物の発見に努めた。

2次調査は、平成28(2016)年7月3日～31日の期間で実施した。踏査で遺物の発見が相次いだA区と、過去に遺物を拾うことができたと思われるB区、C区に範囲を広げる調査となった。A区で5箇所、B区で6箇所、C区で2箇所、計13箇所を調査を実施している。7月20日には、下條信行愛媛大学名誉教授による現地指導を得た。

試掘調査は、基本的に0.5×2.0mの規模で任意の場所にトレンチを設定、掘削した。状況に応じて拡張掘削を行っている。掘削はすべて人力で行い、埋戻しもすべて人力で行っている。測量および図化作業については、過去に実施された国土調査の地籍図根点を利用し、トータルステーションを用いて行った。

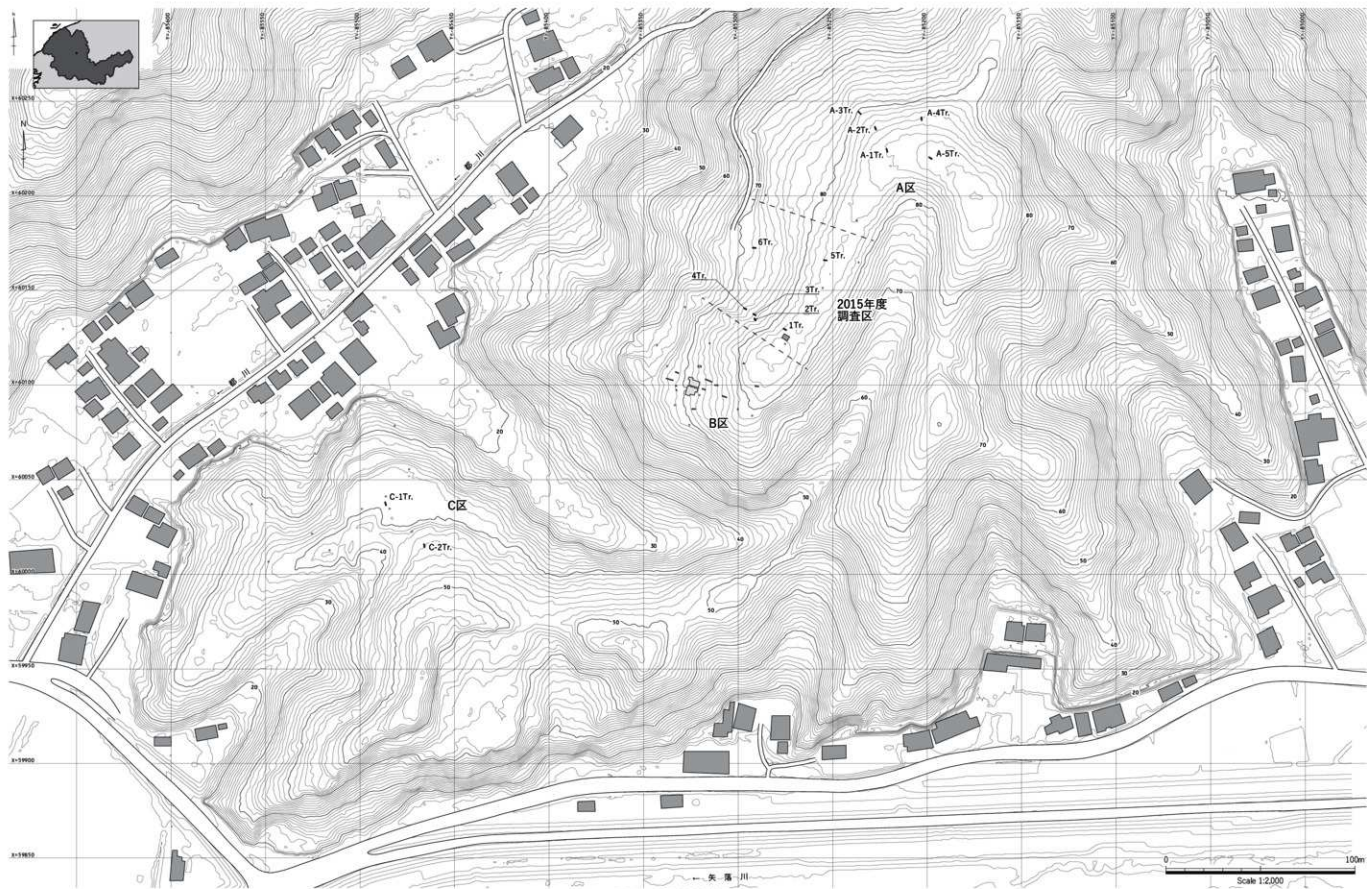


図3-01 都谷遺跡 全体地形図

4. 採集資料の整理

一連の調査の契機となった、平成26(2014)年12月の採集遺物について報告する。以下で報告する遺物は、地権者が畑作地においてクリ1本を除根中に発見したものである。遺物の多くは、このクリの下から出土したといい、遺物が表面採集できた範囲も、この範囲が主であった。コンテナでおおよそ2箱分を採集したが、ここでは特徴が明らかである18点を図化した。

なお、後に報告する2015年度調査区の2トレンチで、採集資料の同一個体と思われる遺物が出土している。なかには接合が可能なものもあり、こうした遺物は接合のうえ、本項で図化・報告する。

図3-02～04は、弥生土器である。このうち、図3-02～03の104～107は壺である。104は大型のものである。球形の胴部で、頸部は短く、口縁に向けて緩やかに外反する。頸部の下には断面三角形の突帯が貼り付けられ、指頭により押圧さ

れる。口縁は下方に拡張され、口縁帯には「×」状に斜格子文が施される。外面は口縁端部を除いてハケメ調整され、その後胴部はミガキ調整される。内面は指オサエの指頭圧痕が明瞭に残り、全体に横位のミガキ調整が施される。105は口縁を除いてほぼ完形で発見されたものである。最大径が胴部中位にある球形の胴部で、短い頸部は「ハ」字形にすばまり、わずかに外反しながら口縁へいたる。頸部には貼付突帯が2条めぐり、底部は平底である。外面はハケメ調整後、胴部下半部までミガキ調整される。106は短い頸部が「ハ」字形にすばまり、緩やかに外反しながら口縁へいたる。口縁の端面下部には、沈線が1条めぐり、頸部には貼付突帯が1条めぐり、平織の布を指頭に巻いて押圧している。外面はハケメ調整され、内面は横位のミガキ調整が施される。107は頸部から緩やかに外反するが、口縁上部で屈曲して端部にいたる。口縁端部は上下に拡張され、沈線が

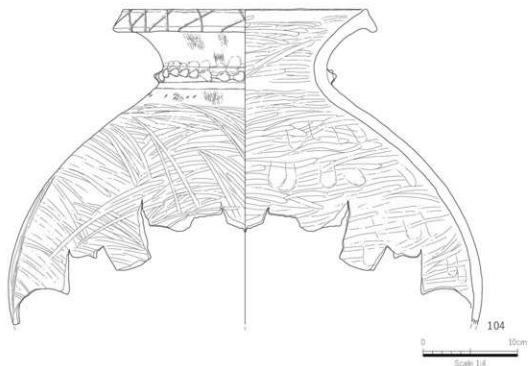


図3-02 都谷遺跡 表面採集資料実測図(1)

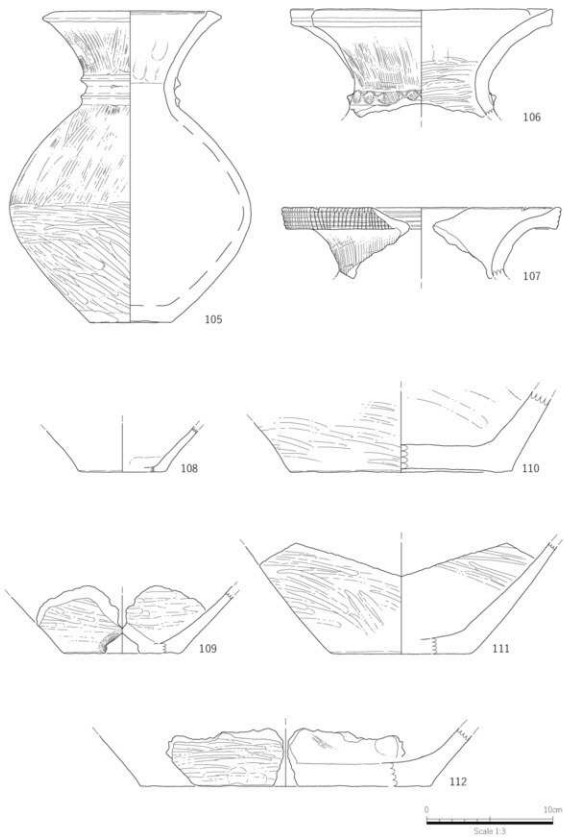


図3-03 都谷遺跡 表面採集資料実測図(2)

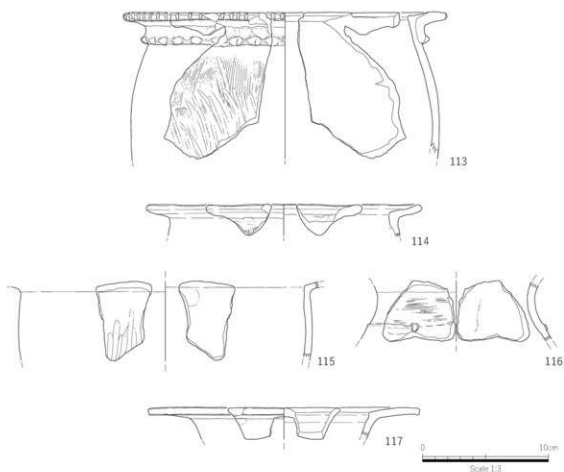


図3-04 都谷遺跡 表面採集資料実測図(3)

4条めぐる。この沈線の施文後、篋状工具による刻目が施される。

図3-03のうち、108～112は土器底部片で、いずれも壺の底部片と思われる。108は平底で、胴部に向けてわずかに外反している。109も平底で、底部には焼成破裂痕がみられる。110～112は比較的大形のもので、いずれも平底になる。

113～116は甕である。113は突帯から口縁端部が粘土帯の貼り付け、折り曲げによって形成されている。口縁の内面屈折部には、貼り付けの際の強めのヨコナデによるくぼみがめぐる。突帯は断面三角形で1条めぐり、指頭で押圧される。口唇には刻目が施される。114は断面逆L字状に屈折する口縁であり、わずかに波打つ。口縁端部には、およそ1×2cmの範囲でススが附着している。口縁の内面は受け口状にややくぼんでいる。



図3-05 都谷遺跡 表面採集資料実測図(4)

115も断面逆L字状に屈折する口縁で、胴部は砲弾形に近くなると思われる。116は頸部から立ち上がり外反して口縁にいたるもので、肩部にはつ

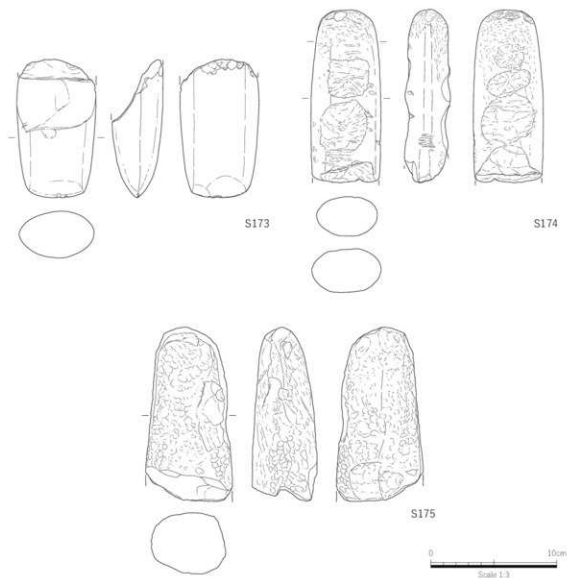


図3-06 都谷遺跡 表面採集資料実測図(5)

まみ上げられて形成された微隆起突帯1条がめぐり、楕円形の浮文が貼り付けられる。典型的な西南四国型甕の器形である。

117は高坏である。折り曲げ口縁のもので、坏部上部の内面には強めのヨコナデによる浅いくぼみが1条めぐり、口縁端部はヨコナデによってやや押しつぶされている。

図3-05のS172は石斧未成品である。緑色玄武岩製の伐採石斧未成品であり、打裂による成形後、敲打整形の段階で破損したと思われる。

また、今回の採集遺物の調査を契機として、こ

のほかでも都地区内で遺物を採集したという情報を得ることができた。次に掲載するのは、発見場所の詳細は不明だが都地区内で発見された石斧3点で、いずれも伐採石斧およびその未成品である。

図3-06のS173は伐採石斧の成品で、斧身以上が欠損している。刃部は刃こぼれしており、使用時に破損したものとみられる。横断面形は略楕円形を呈す。S174も成品で、斧身より下が欠損している。斧身には複数のくぼみが形成されているが、原材の形状によるものか、成形によるものか、後世の加工によるものかは、にわかに判断できな

い、S175 は打裂成形後の敲打段階で破損した未成品である。状況から、側面の敲打時に破損したとみられる。平面形は基部から刃部に向けて広がる形状で、横断面形はS172 と比べ円形に近い。

採集された土器の多くは、梅木謙一氏の伊予中部Ⅲ様式に当てはめることができる〔梅木2000〕。おおむね弥生時代中期中葉に位置付けられ、明らかに時期の異なる土器は含まれない。

なお、昭和初期から採集されてきた土器片も、おおむねこの時期にまとまっている。参考に掲載する図3-07の壺(118)は、昭和28(1953)年6月、付近を開墾中に発見されたものと伝わり、のちに松岡文一氏によって「都谷式」もしくは「都谷Ⅰ式」の典型例とされた壺である。最大径が胴部中位にあり、胴部は算盤玉に近い形状をしている。胴部中位には突帯が2条貼り付けられ、断面形で「M」字状になる。底部は平底だが、中心に向けてややくぼむ。口頸部はラッパ形に開き、口縁端部はやや拡張される。頸部には貼付突帯が4条めぐり、その上に2条1対の棒状浮文が壺に付される。

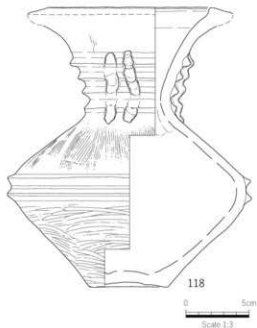


図3-07 都谷遺跡 参考採集資料実測図

5. 2015年度調査区の調査(1次調査)

(1) 2015年度調査区の調査と成果

平成26(2014)年12月に遺物が採集された地点を中心に、6トレンチを設定した。1～4トレンチは、遺物が採集された畑作地に設定した。5、6トレンチは、採集地点から約40m離れた地点に設置し、遺物、遺構の発見を試みた。

1トレンチ【1次調査】(図3-08) 採集遺物の大半が斜面上で発見されていた状況を踏まえ、その供給源を探るべく、丘陵からのびる稜線の頂部付近に設定した。

1層はにぶい黄褐色砂質土、2層は褐色砂質土、3層は黄褐色砂質土で、いずれも細礫が多くまじる。いずれも耕作土である。地山は、やや東側へ傾斜し平滑である。遺構は検出できなかった。

出土遺物はなかった。

2トレンチ【1次調査】(図3-09) 採集遺物の多くは、クリの除根中に発見されたものであるこ

とから、地権者の証言をもとに、その地点にトレンチを設定した。

1層はにぶい黄褐色砂質土で、細礫がまじる。トレンチ東壁ではクリの抜根跡と思われるくぼみを確認できたほか、平面的にも確認ができた。2層は褐色シルト質土で、細礫が多くまじり、分級は悪い。堆積厚は、厚いところで約1mを超える。この2層上面から攪乱坑が掘り込まれている。この攪乱埋土はまったくしまりのない黄褐色砂質土で、中礫が多数混入する。地山は、北側に向けて急な下り勾配になっている。地山を掘り込むような遺構はなかった。

出土遺物は、大半が1層からの出土であり、2層から出土した遺物は弥生土器細片1点のみに過ぎない。遺構も検出できておらず、後世に遊離した遺物が、何らかの理由で1箇所にまとまっていたものと思われる。

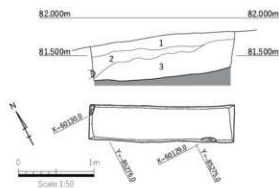
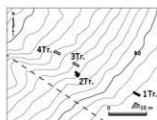


図3-08 都谷遺跡 1 トレンチ平面図



1層:10YR4/3に赤い黄褐色、磁礫まじり極細砂、分級非常に悪い、耕作土、表土。2層:10YR4/6褐色、磁礫まじり極細砂、分級非常に悪い、耕作土。3層:10YR5/6黄褐色、磁礫まじり極細砂、分級非常に悪い、磁角礫(φ6cm程度)まじる。

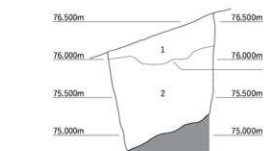
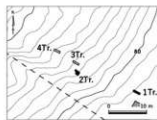
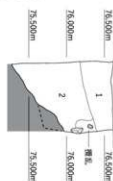
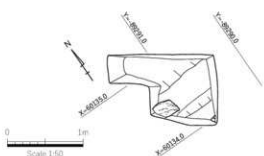


図3-09 都谷遺跡 2 トレンチ平面図



1層:10YR5/4に赤い黄褐色、磁礫まじり極細砂、分級非常に悪い、層下部に部分的に明褐色土が広がる。耕作土、表土。2層:10YR4/6褐色、磁礫まじりシルト、分級悪い、中礫の混入目立つ、耕作土。3層:10YR5/6黄褐色、磁礫まじり極細砂、分級非常に悪い、中礫まじり、まじり一切なし。



なお、前項でも述べたように、この1層からは採集遺物と同一個体と思われる遺物も出土しており、両者で接合が可能なものもあった。こうした遺物で図化できたものは、前項で報告した。

2 トレンチ出土遺物(図3-10) 1層からコンテナ約1/2箱分の弥生土器が出土している。このうち5点を図化した。

119～121は弥生土器である。このうち119と120は壺の頸部で、119は頸部が「ハ」字状にすばまる形状で、内面は頸部に断面三角形の貼付突起が1条以上めぐり、その上から棒状浮文が貼り付

けられる。この棒状浮文は、2条以上で1対になるとみられる。120も頸部が「ハ」字状にすばまる形状で、断面三角形の貼付突起が2条以上めぐり、

121は高坏の脚部である。坏部に向けて立ち上がるようにのび、器形から短脚のものと思われる。内面にはハケメ工具によると思われる調整痕が横位に2単位分しっかりと残されている。

S176とS177は剥片である。いずれも赤色珪質岩で、とくにS176には側方および下方に細かい加工痕がみられ、石鏝や打製刀器などの製作が意図されていた可能性がある。

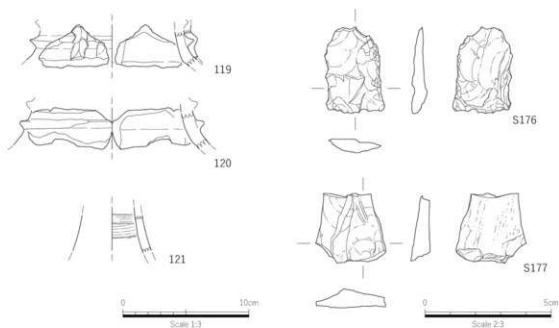


図3-10 都谷遺跡 2トレンチ出土遺物実測図

2トレンチ周辺表面採集遺物(図3-11) 2トレンチを中心とし、周辺であらたに遺物の採集ができた。ここでは弥生土器4点を図化し、報告する。

122～124は甕である。122は口縁端部が指頭圧でやや垂下され、また筒状工具で刻目が施文されている。その直下には突帯が1条貼り付けられる。123は口縁外面に幅広の粘土帯が貼り付けられ、端部には刻目が施される。貼り付けられた粘土帯の下には、薄い貼付突帯が1条めぐり、124は頸部が大きく外反する器形で、肩部には微隆起突帯が1条めぐり、楕円形の浮文が施される。外面はハケメ調整が施されるが、この調整によって微隆起突帯が一部つぶれてしまっている。

125は高坏の口縁である。口縁端部は指頭圧によって浅くくぼみ、わずかに垂下している。破面にかかっているが、穿孔が1箇所穿たれている。

3トレンチ[1次調査](図3-12) 2トレンチ北側に設定し、遺構の有無を確認するほか、2トレンチで確認した地山の傾斜について把握するために調査した。

1層は細礫のまじるふい黄褐色砂質土で、2層は細礫がまじるシルト質砂質土であり、地山に

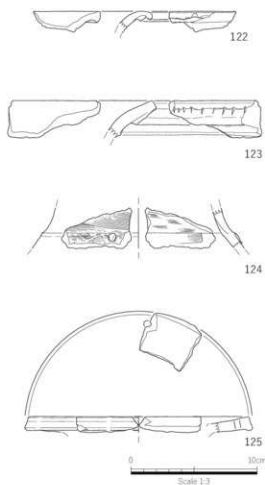


図3-11 都谷遺跡 2トレンチ周辺表面採集遺物実測図

由来する中礫が多数混入している。上面は現地表面とはほぼ同じ傾斜がついている。最大約1.4m掘削したが、地山面には到達しなかった。遺構は検出できなかった。

1層で弥生土器数点を検出したが、いずれも細片であり、図化にはいたらなかった。

4 トレンチ[1次調査](図3-14) 3トレンチの斜面下に設定し、遺構の有無の確認を目的とした。

1層はふい黄褐色砂質土で、細礫がまじる。分層はしなかったが、層の下部には部分的に明褐色砂質土が広がり、2層は褐色砂質土で、しまりなく細礫がまじる。3層は細礫のまじるシルト質土で、堆積厚は約1.3mにおよび、上下に2分層できる。3a層は黄褐色、3b層は明褐色で中礫が多数混入する。この3層は、2トレンチ2層、3トレンチ2層に土質がよく似ている。地山は、現地表面から深いところで約1.9mのところで検出でき、2トレンチと同じく北側へ傾斜している。なお、いずれの層も、現地表面もしくは地山の傾斜に対して並行に堆積している。遺構の検出はできなかった。

4 トレンチ出土遺物(図3-13) 1層で割片1点が出土しており、これを図化した。また、弥生土器数点も検出しているが、いずれも細片であり、図化にはいたらなかった。

S178は赤色珪質岩の割片で、側方に打点がある。

5 トレンチ[1次調査](図3-15) 1トレンチから約40m北側に離れた地点に、1トレンチと同じく丘陵頂部に設定した。

1層は暗褐色の腐植土層である。2層は明褐色

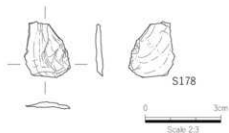
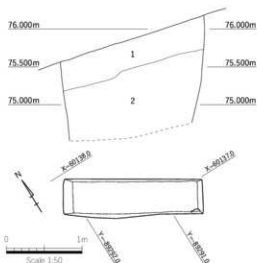
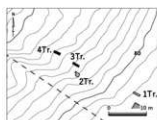
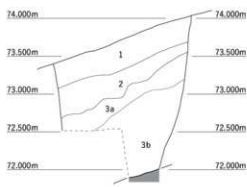


図3-13 都谷遺跡 4トレンチ出土遺物実測図



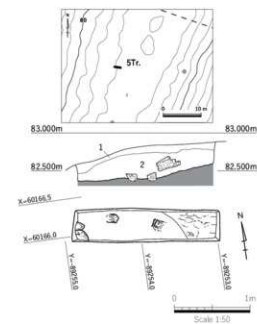
1層:10YR5/4にぶい黄褐色、細礫まじり極細砂、分層非常に悪い、耕作土、表土。2層:10YR4/6褐色、細礫まじりシルト、分層悪い。

図3-12 都谷遺跡 3トレンチ平面断面図



1層:10YR5/4にぶい黄褐色、細礫まじり極細砂、分層非常に悪い、耕作土、表土。2層:10YR4/6褐色、細礫まじり極細砂、分層悪い、しまりなし、植物根多い。3a層:10YR5/6黄褐色、細礫まじりシルト、分層悪い、しまり強い、植物根少ない。3b層:7.5YR5/6明褐色、細礫まじりシルト、分層悪い、しまり強い、地山碎屑物である中礫の角礫を多数含む。

図3-14 都谷遺跡 4トレンチ平面断面図



1層:10YR3/4暗褐色、磁礫まじり極細砂、分粒非常に細い、しまりなし、腐植土、表土。2層:7.5YR5/6暗褐色、磁礫まじり極細砂、分粒非常に細い、しまり強い、地山砂屑物である中礫の角礫を多数含む。

図3-15 都谷遺跡 5トレンチ平面断面図

砂質土で、地山砂屑物であるの中礫を多数含んでいる。地山は岩石質で、肌荒れた状態である。遺構の痕跡は見つからなかった。

出土遺物はなかった。

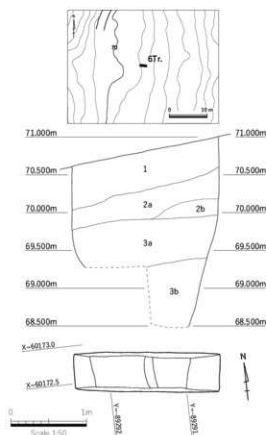
6トレンチ[1次調査](図3-16) 2～4トレンチの北側約40mに設定し、遺構の有無を確認するほか、地山の深さについて把握するために調査した。

1層は褐色砂質土層で、地表面に腐植土がわずかに堆積する。2層は褐色砂質土で2分層でき、2b層は2a層よりもしまりが弱い。3層は褐色砂質土で厚く堆積しており、こちらも2分層できる。3b層は3a層に比べて中礫の混入が目立つ。なお、地表下約2.4mまで掘削したが、地山には到達できていない。遺構の検出はなかった。

図化できる遺物の出土はなかった。

その他表面採集遺物(図3-17) その他の表面採集遺物について報告する。

126～128は弥生土器である。126は壺の頸部で、頸部は外傾し、ラッパ形に開く器形になると思われる。2条以上の突帯が貼り付けられる。



1層:10YR4/4褐色、磁礫まじり極細砂、分粒非常に細い、腐植土、表土。2a層:10YR4/6褐色、磁礫まじり極細砂、分粒悪い。2b層:10YR4/4褐色、分粒悪い、しまりなし。3a層:7.5YR4/4褐色、磁礫まじり極細砂、分粒悪い、しまり強い。3b層:10YR4/6褐色、磁礫まじり極細砂、分粒非常に細い、角礫(φ10cm程度)の混入多い。

図3-16 都谷遺跡 6トレンチ平面断面図

127と128は壺の口縁である。127は断面「く」字状に屈折し、頸部に貼付突帯が1条めぐる。突帯は断面形がつぶれた三角形になっており、平織の布を巻いた指頭で押圧されている。128は口縁に幅広の粘土帯が貼り付けられる。口縁端部はヨコナデによってやや押しつぶされている。

S179～S181は砂岩製の砥石である。S179は置砥で、砥粒は粗い。S180の砥粒も粗い。S181の砥粒は細かく、仕上砥の可能性もある。裏面が自然面として残り、側面は打裂もしくは敲打によって整形されている。

(2) 調査成果のまとめ

採集遺物の発見場所を中心に調査を行った。採集された遺物の量が比較的多く、摩耗も少ない状

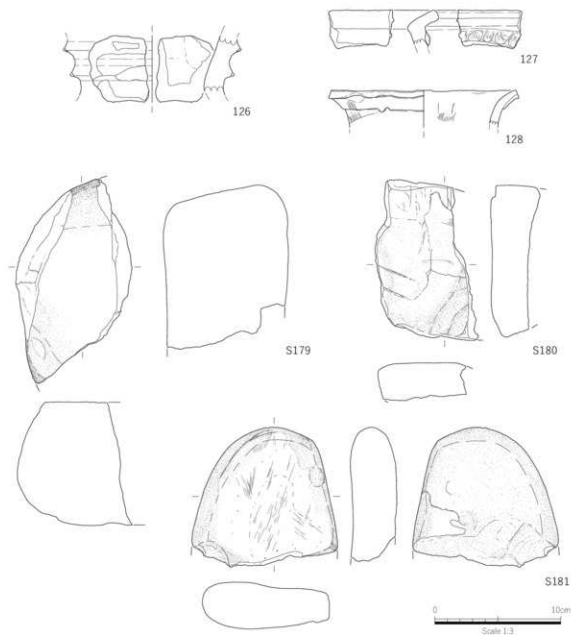


図3-17 都谷遺跡 その他表面採集遺物実測図

態であったことから、建物跡など遺構の遺存が期待された。

しかし残念ながら、この地区で遺構を検出することはできず、採集された遺物も、2トレンチの状況から後世の2次的な移動、埋没であった可能性の高いことが明らかとなった。

この地区の旧地形について考える。2～4トレンチおよび5、6トレンチは、現在の表土以下の各層が非常に厚く、また各層間で特徴の違いも少

ないことから、後世の造成や盛土に伴う土層の可能性が高い。また、2、4トレンチでは地山面が北方向に大きく傾斜していることから、この地区は谷部を大規模に造成して形成された斜面と想定される。地山面の傾斜も非常に急であることから、地山を掘り込んだ遺構が遺存する可能性は低いと思われる。このため、調査の契機となった採集遺物が、本来どの場所にあったのが課題として残る結果となった。

6. A区の調査(2次調査)

(1) A区の調査と成果

2015年度調査の際に周辺を踏査し、丘陵頂部の西寄りで弥生土器や石器などを表採することができた。また、2015年度調査区よりも比較的傾斜が緩やかであることから、遺構などの残存が期待された。このため、遺物が表面採取できた範囲を中心に5トレンチを設定し、試掘を進めた。

A-1トレンチ[2次調査](図3-18) 丘陵稜線上の平坦面に設定し、調査を行った。

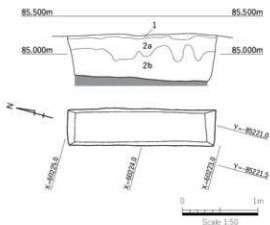
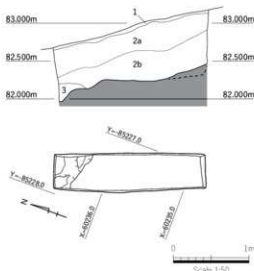


図3-18 都谷遺跡 A-1トレンチ平面断面図

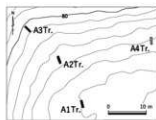


1層:10YR4/4褐色, 極粗砂まじり極細砂, しまりなし, 赤土。
2a層:10YR5/6黄褐色, 極粗砂まじり細砂, 分級悪い, しまり弱い。
2b層:10YR5/6黄褐色, 極粗砂まじり極細砂, 分級悪い, しまり弱い。
3層:5YR4/6赤褐色, 極粗砂まじり細砂, 分級悪い, しまり強い。

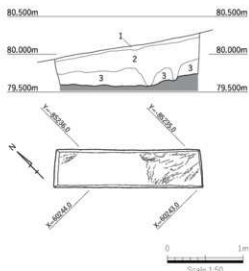
図3-19 都谷遺跡 A-2トレンチ平面断面図

1層は腐植土で、堆積厚は5cmと薄い。2層は2a層と2b層とに細分でき、いずれも分級の良い砂質土であるが、2b層は明褐色でやや赤みが強い。2a層と2b層との層界は大きく波打っている。これは、植物などによる擾乱の影響と考えられる。2b層は、地山砕屑物が主体のしまりが強い明褐色砂質土で、分級は悪い。地山は平坦で平滑になっている。遺構などは検出できなかった。

出土遺物はなかった。



1層:10YR4/4褐色, 極粗砂まじり極細砂, しまりなし, 赤土。
2a層:10YR4/6褐色, 極粗砂まじり細砂, 分級悪い, しまり弱い。
2b層:7.5YR5/6明褐色, 極粗砂まじり細砂, 分級悪い, しまり強い。



1層:10YR4/4褐色, 極粗砂まじり極細砂, しまりなし, 赤土。
2層:10YR5/6黄褐色, 細砂まじり細砂, 分級悪い, しまり弱い, 植物が多い。
3層:10YR5/6黄褐色, 細砂主体で, 細砂の間隙に細砂が入る。

図3-20 都谷遺跡 A-3トレンチ平面断面図

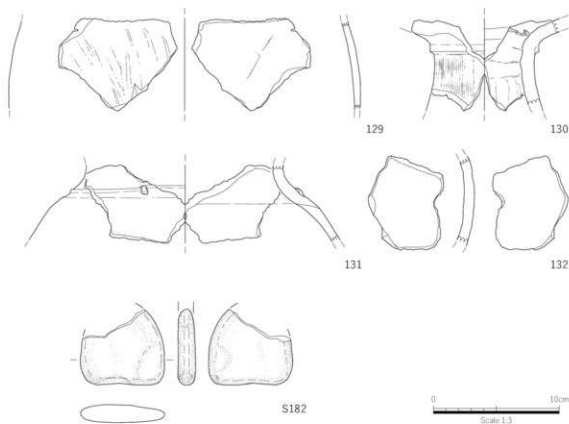
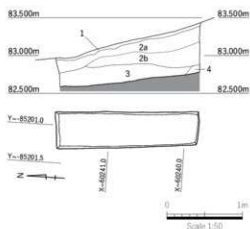
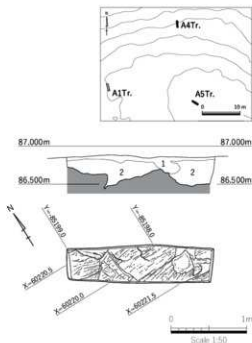


図3-21 都谷遺跡 A-2トレンチ出土遺物実測図



1層:10YR4/4褐色、粗粒砂まじり極細砂、しまりなし、表土。2a層:10YR5/6黄褐色、粗粒砂まじり細砂、分粒良い、しまり弱い。2b層:10YR5/6黄褐色、粗粒砂まじり極細砂、分粒良い、しまり弱いが、2a層より強め。3層:7.5YR5/2黄褐色、粗粒まじり極細砂、分粒悪い、しまり強い。4層:7.5YR3/2黒褐色、粗粒主体。

図3-22 都谷遺跡 A-4トレンチ断面図



1層:10YR4/4褐色、粗粒砂まじり極細砂、しまりなし、表土。2b層:10YR5/6黄褐色、粗粒まじり細砂、分粒非常に悪い、地山持戻物の粗粒を多量含む。

図3-23 都谷遺跡 A-5トレンチ断面図

A-2トレンチ[2次調査](図3-19) A-1トレンチの北側斜面、稜線に対して直交するように設定し、遺構の残存状況などを探った。

表土は腐植土が薄く堆積する。2層はしまりの弱い黄褐色砂質が堆積する。2層の堆積厚は50～70cmで、上下で2分層できる。上の2a層と比較して、下の2b層はしまりが強めになり、砂粒もやや細くなる傾向になる。3層は赤褐色砂質土で、地山に由来する堆積層と考えられる。地山はトレンチ中央部分で平坦になり、斜面下方側で傾斜をつけて落ちている。部分的に過掘となっていたが、平坦部は奥行約80cmを測る。地山を掘り込む柱穴などの遺構は検出できなかったが、この地山の平坦面は、村鳥宮の首遺跡で複数検出している段状遺構の一部を捉えていた可能性がある。

2、3層からは遺物が出土している。2層出土遺物に関しては、2a層、2b層に細分する前に取り上げてしまっているが、比較的層の下部(2b層相当)からの出土が目立った。堆積状況から、とくに2層は斜面の上部から流れ込んだものと思われる、ここで出た土した遺物も、本来は斜面上部にあったものと考えられる。調査期間の都合上、拡張しての調査は叶わなかったが、今後、重点的に調査せねばならない地点である。

A-2トレンチ出土遺物(図3-21) 2、3層で弥生土器と砥石が出土している。弥生土器は胴部の細片が多く、摩耗も進んでおり、10数点出土したうち4点を図化した。

図3-21の129と131は甕である。129は2層で出土し、外面がミガキ調整、内面はケズリ調整が施されている。131は3層で出土し、胴部から緩やかに内傾し、頸部は立ち上がって外反する。胴部に粘土帯接合痕があり、外傾接合であることがわかる。肩上部に微隆起突帯1条と楕円形の浮文が貼り付けられている。

2層で出土した130は高杯の脚部で、全体的に摩耗が進んでいる。短脚の器形とみられる。坏部の下に断面三角形の貼付突帯1条がめぐり、脚部外面は縦位のハケメ調整が施され、内面は絞り痕

がナゲ消されている。

3層で出土した132は壺の胴部と思われる破片で、傾きや径は判然としにくい。全体に摩耗・風化が著しいが、胎土に特徴があり、 $\phi 0.5 \sim 3 \text{ mm}$ の黒雲母を多量に含んでいる。

S18は3層で出土した砂岩製の砥石である。手持砥であり砥粒は粗い。表面の風化が進んでおり、擦過痕などは認められない。

A-3トレンチ[2次調査](図3-20) A-1トレンチ、2トレンチ北側の緩斜面上に設定し、遺構などの検出を目指した。

1層は腐植土が薄く堆積する。2層は黄褐色砂質土で地山に由来する細礫がまじる。植物細根が無数にのび、樹根の影響とみられる攪乱も目立つ。3層も黄褐色土だが、地山に由来する細礫が主体で、細礫の間隙に細砂が入るような状態である。地山には弱い傾斜がついている。遺構は検出できなかった。

1層から弥生土器1点が出土しているものの、細片であることから図化にはいたらなかった。

A-4トレンチ[2次調査](図3-22) A-2トレンチ東側の斜面上に設定し、A-2トレンチと同様な平坦面の検出を目指した。

1層は腐植土が薄く堆積する。分級の良い黄褐色砂質土である2層は、2分層できる。2a層はしまりが弱く、2b層はややしまりが生じ、2a層より砂粒の肌理が細かい。3層は明褐色砂質土で、地山に由来する砕屑物や偽礫状ブロックが含まれる。4層は地山に由来する細礫が主体の層としたが、風化した地山岩盤の一部を捉えている可能性がある。地山は緩やかに傾斜しており、遺構などは検出できなかった。

出土遺物はなかった。

A-5トレンチ[2次調査](図3-23) 丘陵稜線上の平坦面、A-1トレンチ東側に設定し、遺構の有無を調査した。

1層は腐植土が薄く堆積している。2層は黄褐色砂質土で、地山に由来する細礫が多く混入する。地山は風化が進んだ泥質片岩(この地域では「ナメラ」と呼ぶ)の岩盤で、大きく肌荒れている。遺

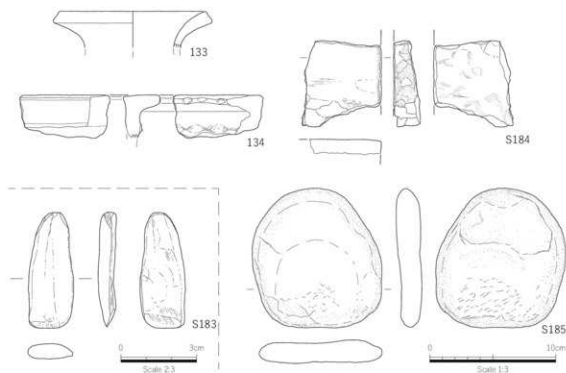


図3-24 都谷遺跡 A区表面採集遺物実測図

構などは検出できなかった。

出土遺物はなかった。

A区表面採集遺物(図3-24) A区で採集した遺物について報告する。これらはいずれも丘陵の西側斜面で採集したものである。特徴のわかる5点を図化した。

図3-24の133と134は弥生土器である。133は壺で、短頸のものと思われる。口縁はラップ形に開く器形で、器壁は口縁端部にかけてやや肥厚する。端部はヨコナデによってわずかにくぼんでいる。134は甕の口縁である。貼付口縁であり、屈曲部の下に突帯が1条めぐり、突帯は指頭によって押圧される。口縁端部には、刻目もしくは押圧されるが、風化によって判然としなない。

S183は緑泥片岩製とみられる完形の磨製鬲状石器である。両刃になるよう研ぎ出され、基部から側縁も研磨され面取りされている。表面は丁寧に研磨されるが、裏面は主要剥離面が残されたままとなっている。S184とS185は砥石である。いずれも砂岩製で砥粒は粗い。S185は裏面が自然面として残り、側縁は打裂もしくは敲打によって

整形されている。

(2)調査成果のまとめ

踏査によって遺物が表面採集できると判明した、丘陵上を中心に試験調査を行った。

このうち、まとまって遺物を検出できたのがA-2トレンチである。斜面上にありながら、地山は平坦に整形されたようになっており、村鳥宮の首遺跡でも複数確認された段状遺構の一部を捉えている可能性がある。また、出土遺物の多くは斜面上部から流れ込んだとみられる土層中から発見されており、遺構などがさらに存在していたことを示唆している。この場合、本来想定していた遺跡の範囲(B区、2015年度調査区)よりも、さらに北側に広がることとなるため、今後も重点的な調査が求められる。

一方、丘陵頂部付近の平坦面に設定したA-1、A-5トレンチでは、遺構や遺物を発見することはできなかった。これは、2015年度調査区の1トレンチと同様の状況である。後世の人為的な土地改変などの影響があった可能性もあるが、もともと

遺構が存在しなかった可能性も考えられる。今回はごく限られた規模での調査であったため、こ

でその結論を出すことは難しいが、引き続き遺跡の立地環境について精査することが重要である。

7. C区の調査(2次調査)

(1) C区の調査と成果

地元住民の聴き取りにより、南側の小丘陵(2015年度調査区やB区の谷を挟んだ対岸側)でも、遺物を採集した経験があるという情報を得たことから、まずは遺物の発見を目的として調査を実施した。地権者の了承を得られた地点のうち、平坦面と緩斜面上の2箇所にトレンチを設定し、掘削を行っている。

なお、昭和期に採集され大洲市埋蔵文化財センターで保管されている土器片のなかに、「都谷南丘」と注記された資料がある(採集地点の詳細は不明)。C区とその周辺は、この「南丘」に比定される可能性がある。

C-1トレンチ[2次調査](図3-25) 旧耕作地の平坦面に設定し、遺物の発見を目指した。

1層は褐色砂質土で分級は悪く、断面で植物による攪乱も認められる。2層は分級の良い砂質土で、2分層できる。2a層は褐色、2b層は黄褐色を呈し、いずれもしまりが強い。1層および2層は、旧耕作土と思われる。3層は分級の良い明褐色シルト質土で、地山に由来する堆積である。地山は南側が平坦になり、西側は傾斜をつけて落ちている。断面で、地山の平坦面から3層上面が水平にのびていることから、耕作などの目的で平坦面を拡張するために、3層が盛土されたと考えられる。遺構は検出できなかった。

出土遺物はなかった。

C-2トレンチ[2次調査](図3-26) C-1トレンチを設定した平坦面の南側にある緩斜面に設定した。

1層は褐色砂質土で、しまりなくやわらかい。2層は2分層でき、2a層は褐色砂質土、2b層は

にぶい褐色砂質土で、いずれも分級は比較的良好、旧耕作土と考えられる。3層は分級良好な明褐色砂質土である。地域的に「オンジ(音地)」と呼ばれる土質の典型で、アカホヤ火山灰(K-Ah)の堆積とみられる。堆積厚は20～30cmになる。4層は細礫がまじる、にぶい黄褐色砂質土で、地山の泥質片岩の砕屑物が主体である。地山は、風化が進んだ泥質片岩で、部分的にシルト質になっている。遺構は検出できなかった。

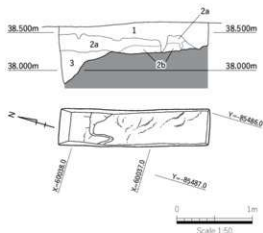
C-2トレンチ出土遺物(図3-27) 排土中ではあるが、磨製石斧片1点を発見した。S186は緑色玄武岩製の伐採石斧であり、刃こぼれしていることから、使用時に破損したものとと思われる。

C区表面採集遺物(図3-28) C区で採集した遺物について報告する。C区では備前焼敷点を採集することができ、このうち特徴のわかる1点を図化した。図3-28の135は、備前焼の壺の口縁である。小片のため傾きは判然としない。口縁端部は玉縁状になる。

(2) 調査成果のまとめ

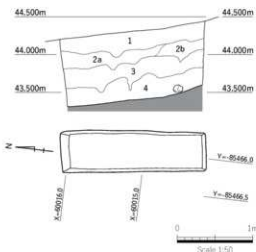
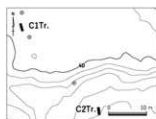
これまで遺跡の存在を直接確認できなかった南西部の小丘陵で調査を実施した。残念ながら2箇所のトレンチいずれも遺構の検出はできなかったものの、C-2トレンチで伐採石斧破片1点を発見することができた。今回試掘調査によって確認できた遺物はこの1点のみに留まるが、やはりこれまでの想定よりも遺跡の範囲が大きく広がる可能性を示しているといえる。

また、備前焼を採集できたことから、周辺に中世段階の遺構等が存在する可能性もでてきた。



1層:10YR4/5褐色, 細礫まじり粗礫砂, しまり強い, 粘物很多い, 表土。
 2a層:10YR4/5褐色, 粗粒砂まじり粗礫砂, 分級普通, しまりあり。
 2b層:10YR5/9黄褐色, 粗粒砂まじり細砂, 分級普通, しまり強い。
 3層:7.5YR5/8暗褐色, 粗粒砂まじりシルト, 分級良い, しまり強い。

図3-25 都谷遺跡 C-1トレンチ平面断面図



1層:10YR4/4褐色, 粗粒砂まじり粗礫砂, しまりなし, 表土。
 2a層:10YR4/6褐色, 粗粒砂まじり粗礫砂, しまりなし, 分級普通。
 2b層:10YR4/3に濃い黄褐色, 粗粒砂まじり粗礫砂, 分級普通, しまり弱い。
 3層:7.5YR5/6明褐色, 粗粒砂まじり細砂, 分級良い, しまり弱い。
 4層:10YR5/3に濃い黄褐色, 細礫まじり粗礫砂, 分級悪い, しまり強い, 地山砕屑物の細礫を多く含む。

図3-26 都谷遺跡 C-2トレンチ平面断面図



図3-27 都谷遺跡 C-2トレンチ出土遺物実測図

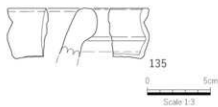


図3-28 都谷遺跡 C区表面採集遺物実測図

8. まとめ

都谷遺跡は、昭和初期にはその存在が知られ、これまで数多くの遺物が採集されてきたものの、遺跡の位置や範囲については、長らく不明確なままであった。今回の調査は、2014年12月、耕作中に多量の遺物が発見されたことが契機となったもので、都谷遺跡としては初の発掘調査となった。

2015年度は発見があった地点を中心として6箇所を試掘した。1、5トレンチは尾根頂部に設けたが、遺物、遺構を発見することができなかった。2～4、6トレンチは、尾根頂部より6～12m下方に設け掘削を進めたが、いずれも地山まで厚い盛土が覆われていることが判明した。これは、本来は谷地形であった地点に大きな改変・造成が加えられていることを示し、尾根頂部も後世に手が増えられている可能性が浮上した。

計6トレンチのうち、遺物がまとまって発見された地点にもトレンチを直接設定したが(2トレンチ)、残念ながら遺構は発見できなかった。遺物の多くは1層(表土)からの出土で、また、この2トレンチの周囲でのみ不自然なほど局所的に遺物が採集されているという事実を踏まえると、これら遺物は、後世、何らかの理由で2次的な移動を受けたものである可能性が高くなった。人為的な影響とみられ、本来、どの地点にあったものが大きな課題として残った。

こうした経緯もあり、あらためて遺跡の範囲を確かめる必要が生じ、さらに調査範囲を広げて試掘を行った。

2015年度調査区の北側、丘陵頂部を中心とするA区では5箇所のトレンチを設け、このうち緩斜面上のA-2トレンチで比較的多くの遺物が出土した。堆積状況から、斜面上部から流れ込んだ遺物であり、A-2トレンチの上部に何らかの遺構が存在した可能性が示唆される。また、地山が部分的に平坦になっていることから、斜面を平坦に加工した段状遺構の一端を捉えている蓋然性がある。残念ながらその他で設定したトレンチで、遺構、遺物の発見は叶わなかったものの、A区周辺では

表面採集できる遺物も多いことから、今後重点的に調査を進めてゆく必要がある。

2015年度調査区の、谷を挟んで南西側の小丘陵上をC区とした。地権者によれば、この地点で遺物を採集した経験があり、また、「都谷南丘」と注記された資料が過去に採集されていることから、2地点で試掘を行った。調査が小規模であったことから、発見できたものは磨製石斧(伐採石斧)片1点のみであったが、遺跡の範囲がさらに広がる可能性を示すものとなった。また、中世段階の備前焼を採集できており、複数時期にわたる人間活動の存在が明らかになっている。

採集遺物と出土遺物に注目する。今回報告した弥生土器の器種は、壺、甕、高坏の3種類である。祝谷六丁場遺跡(愛媛県松山市)出土例を代表とする、松山平野に特徴的な形態の土器を多く認めることができ(104、113など)、これらは梅木謙一氏の伊予中部Ⅲ様式に当てはめることができる(梅木2000)。採集品や出土品ともに明らかに時期の異なる土器は混在しておらず、遺跡の盛期を絞り込むことができよう。また、116、124、131のような、土佐～南予にかけて分布する地域色の強い西南四国型甕も一定数存在していることから、当地が中予や南予～土佐の結節点にあたったことが容易に想像つく。

次に、石器・石製品に注目する。今回、磨製石斧(伐採石斧)とその未成品を計5点報告したが、いずれも石材は緑色玄武岩である。この緑色玄武岩は都地区周辺では採取できず、神南山周辺や直線距離で約4.3km南にある村島宮の首遺跡周辺に求めねばならない。また、未成品の存在は石斧の製作をほのめかすものであるほか、使用による破損品(S173,S186)もあることから、都谷遺跡において、石材獲得→石器製作→使用という、一連のフローを復元し得る。剥片(S176-178)として出土した赤色珪質岩も都地区では採取できないため、緑色玄武岩と同じく外部から入手したものである。

また、採集品が多く時期の判断に苦しむが、多くの砥石が発見されているのも特徴である。大洲盆地では弥生時代にさかのぼる金属製品はまだまだ発見されていないため、これら砥石は主に石器の研磨に使用されたと思われるが、大小粗細さまざまな形態のものが存在しており、磨製石斧などの生産を一定量行っていたことが見込まれる。

石材産地に近く、かつ、石器の生産地であった村島宮の首遺跡は、都谷遺跡よりもやや新しい中期中葉から中期後葉にかけてが盛期とみられてい

る。そのため両遺跡の比較は、単なる遺跡間の共通点や相違点を示すだけに留まらず、大洲盆地における石器生産の変遷を追跡することが可能となるだろう。

採集品の整理および小規模なトレンチ調査が主体であったが、遺跡範囲が想定よりも広がることが明らかとなり、遺跡の性格について一步踏み込んだ言及が可能となった。今後も継続的に調査を実施し、その内容の把握に努めたい。

【参考文献】

梅本謙一 2000「3 伊予中部地域「弥生土器の様式と編年 四国編」、木耳社
愛媛県史編さん委員会 編 1986「愛媛県史 資料編 考古」、愛媛県
樋口清之 1933「伊豫國喜多郡地方遺蹟概説」『史前學雑誌』第5巻第2號、史前學會

兵頭義高 1970「鳥居博士と大洲」『鳥居龍藏博士の思い出』鳥居記念博物館紀要第4号 鳥居博士生誕百周年記念特集、徳島県鳥居記念博物館
松岡文一 1964「宇和町出土の彌生式土器」『愛媛考古学』第3巻第2号 愛媛県東宇和郡宇和町調査特報号、愛媛考古学会
梁瀬神陵奉讃會 編1930「伊豫大洲の古代文化」

表3-01 都谷遺跡 土器一覧表 表()内は推定値。

番号	出土位置			遺物内容			寸法 (cm)			色調	特徴	標記 番号	図面 番号
	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径				
104	—	—	表層	弥生土器	甕	上半部	33.3	25.4	—	外3576a(9)陶 内3576b(7)陶片	胴部最大径300mm、外面ハケム、ヘラミガキ。口縁ココナデ。内面オサヌ。横紋ヘラミガキ。口縁部ハコシタ線付文。胴部に前面三角形の貼付突帯。突帯右側指部押入。焼成不良。	302	32-1
105	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部 文	21.6	(14.2)	6.4	外3576b(2)土い・陶片 内3576c(2)土い・陶片	胴部最大径190mm。外面ハケム。胴下部ヘラミガキ。内面オサヌ。ナデ。口唇付(口ココナデ)。胴部に前面三角形の貼付突帯2条。	303	32-1
106	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	8.5	(20.0)	—	103524に土い・陶片	外面ハケム。内面口縁ココナデ。胴部以下褐色ヘラミガキ。口唇に浅線1条。胴部に前面三角形の貼付突帯1条。突帯右側指部押入。焼成不良。	303	32-1
107	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	5.5	(22.0)	—	103524に土い・陶片	外面ハケム。内面口縁ココナデ。口唇に浅線4条のり貫状工具による刻目。	303	32-1
108	—	—	表層	弥生土器	甕	底部	3.6	—	(7)	外2576a(8)陶 内2576b(8)陶	平底。内面オサヌ。全体に磨光。焼成不良。	303	32-1
109	—	—	表層	弥生土器	甕	底部	5.3	—	(9)	103524に土い・陶片	平底。外面および内面ヘラミガキ。外面に焼成線痕あり。ごくわずかに金帯母まじる。焼成不良。	303	32-1
110	—	—	表層	弥生土器	甕	底部	5.4	—	17.6	外3576b(2)赤陶 内3576c(4)	平底。外面ヘラミガキ。内面ナデ。	303	32-1
111	—	—	表層	弥生土器	甕	底部	8.8	—	(11.8)	外3576b(2)赤陶 内3576a(1)陶片	平底。外面ナデ後ヘラミガキ。底部付(口)ヘラミガキなど。内面丁寧なナデ。胴部ハコシヘラミガキ。	303	32-1
112	—	—	表層	弥生土器	甕	底部	4.1	—	(22.8)	外3576c(4)土い・陶片 内3576b(2)土い・陶片	平底。外面ヘラミガキ。内面ナデ。	303	32-1
113	—	—	表層	弥生土器	甕	上半部	12.6	(25.6)	—	外3576c(4)土い・陶片 内3576d(9)赤陶	胴部最大径234mm。外面ハケム後ヘラミガキ。内面ナデ。口縁ココナデ。貼付口唇。口唇に刻目。胴部に前面三角形の突帯1条。突帯指部押入。ごくわずかに金帯母まじる。焼成不良。	304	32-1
114	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	2.5	(21.8)	—	外3576a(4)褐色 内2576a(8)	外面ハケム。口縁ココナデ。ごくわずかに金帯母まじる。スズ付着。	304	32-1
115	—	—	表層	弥生土器	甕	胴部	6.3	—	—	外2576b(2)土い・陶 内2576c(4)土い・陶	胴部径230mm。外面褐色ヘラミガキ。内面ナデ。ごくわずかに金帯母まじる。	304	32-1
116	—	—	表層	弥生土器	甕	胴部	4.8	—	—	外2576b(2)赤陶 内3576c(4)土い・陶片	胴部径120mm。外面工具を用いた粗面条線が残る彫造状のナデ。内面ナデ。胴部2条文1条に附(口)付文。焼成不良。内面凹凹痕。	304	32-1
117	—	—	表層	弥生土器	高杯	口縁部	2.4	(21.4)	—	外3576c(4)土い・陶片 内3576b(3)赤陶	外唇。内面ココナデ。	304	32-1
118	—	—	—	弥生土器	甕	口縁部欠	22.1	(16.2)	6.3	外3576c(4)土い・陶片 内3576b(4)土い・陶	参考資料。胴部最大径293mm。外面ハケム。胴下部ヘラミガキ。胴部以上丁寧なナデ。内面オサヌ。丁寧なナデ。胴部に前面三角形の貼付突帯4条と横状付文。胴部最大径部に前面三角形の貼付突帯2条。	307	32-1
119	2F	—	1層	弥生土器	甕	胴部	3.3	—	—	外2576c(2)土い・褐色 内2576b(8)	外面ナデ。内面工具を用いた横線ココナデ。胴部に前面三角形の貼付突帯1条以上および横状付文。	330	32-2
120	2F	—	1層	弥生土器	甕	胴部	3	—	—	外3576c(4)赤陶 内2576b(8)陶	胴部に貼付突帯2条以上。全体に磨光。	330	32-2
121	2F	—	1層	弥生土器	高杯	胴部	3.6	—	—	外3576b(4)赤陶 内2576b(8)	外面ナデ。内面ナデおよび横紋ハケム。	330	32-2
122	2F	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	1.7	—	—	5764に土い・陶	外唇。内面ナデ。口唇に浅状工具による刻目。口唇下に浅状工具による刻目。口唇に小さな貼付突帯1条。全体に磨光。焼成不良。	341	32-4
123	2F	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	2.9	—	—	103524に土い・陶片	外唇。内面ナデ。口唇に浅状工具による刻目。口唇に小さな貼付突帯1条。全体に磨光。焼成不良。	341	32-4

第3章 郡谷遺跡の調査

番号	出土位置			遺物内容		寸法(cm)			色調	特徴	押図 番号	図版 番号	
	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	高さ	口径					底径
124	ZTc	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	32	—	—	50x64mm	外面ハケメ。内面加工を用いた細密な織り模様のナデ。胴部に細粒砂夾層1条および横内筋1本。焼成不良。西南面破損。	311	394
125	ZTc	—	表層	弥生土器	高杯	口縁部	12	(18.0)	—	外径50mm、内径30mm、内径30mm	外面、内面ココナデ。口縁に厚みあり。	311	394
126	—	—	表層	弥生土器	甕	胴部	52	—	—	外径96mm、内径52mm、内径52mm	外面、内面ナデ。胴部2色別の斜行変帯2条あり。全体に摩耗。	317	602
127	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	31	—	—	径92mm	外面、内面ココナデ。胴部に斜行変帯1条。変帯が自然押圧。焼成不良。	317	602
128	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	29	(15.0)	—	外径56mm、内径36mm、内径36mm	外面、内面ハケメのちナデ。口縁にココナデ。口唇外面に粘土層貼付。西南面破損。	317	602
129	AZTc	—	2層	弥生土器	甕	胴部	73	—	—	径92mm	外面にヘラミカケ。内面ケスリカ。わずかにスス付着。焼成不良。	321	60-1
130	AZTc	—	2層	弥生土器	高杯	胴部	73	—	—	外径92mm、内径52mm	胴上部径60mm、外部周径ハケメ。内面ケスリ。ナデ。胴部下に変帯1条。全体に摩耗。	321	60-1
131	AZTc	—	3層	弥生土器	甕	胴部	62	—	—	外径76mm、内径52mm	胴部径15mm、外、内面6層変帯線が残る模様のナデ。胴部に細粒砂夾層1条および横内筋1本付与。焼成不良。	321	60-1
132	AZTc	—	3層	弥生土器	甕?	胴部	74	—	—	外径68mm、内径52mm	表面磨光。φ65～3mmの磨面が認められる。	321	60-1
133	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	29	(12.6)	—	径92mm	外面、内面ココナデ。赤色砂粒の混入が目立つ。	324	602
134	—	—	表層	弥生土器	甕	口縁部	34	—	—	外径41mm、内径32mm	口縁に厚目もしくは押圧。胴部下に斜行変帯1条。変帯が自然押圧。全体に摩耗。	324	602
135	—	—	表層	前期弥生	甕	口縁部	4	—	—	外径27mm、内径15mm	玉縁状口縁。	328	603

表4-02 郡谷遺跡 石器・石製品一覧表

番号	出土位置			遺物内容	石材	寸法(cm)			重量(g)	特徴	押図 番号	図版 番号	
	調査区	遺構	層位			石斧 形状	最大長	最大幅					最大厚
SI72	—	—	表層	伐採石斧	未成品	緑色玄武岩	13.6	6.2	3.8	506.0	基部に打痕が残る。縁打整形(内側、縁打整形時に破損)。	305	59-2
SI73	—	—	表層	伐採石斧	成品	緑色玄武岩	10.95	6.25	3.7	378.0	刃部刃こぼれ。使用時の破損。	306	59-2
SI74	—	—	表層	伐採石斧	成品	緑色玄武岩	13.6	5.5	3.6	489.0	基部付近に縁打痕が残る。基部表面に微細なくぼみが残る。	306	59-2
SI75	—	—	表層	伐採石斧	未成品	緑色玄武岩	13.8	6.9	5.1	766	縁打整形時に破損。	306	59-2
SI76	ZTc	—	1層	削片	—	赤色珸質岩	3.45	2.3	0.54	4.7	石肌もしくは刃部の未成り品。	310	59-3
SI77	ZTc	—	1層	削片	—	赤色珸質岩	2.7	2.75	0.75	63	石斧の裏入あり。	310	59-3
SI78	ZTc	—	1層	削片	—	赤色珸質岩	2.05	1.8	0.25	1.1	表面に広い磨面を残す。	313	60-1
SI79	—	—	表層	礫石	—	砂岩	16.2	9.1	9.8	1729	破砕面、磨面。	317	60-3
SI80	—	—	表層	礫石	—	砂岩	12.8	7.2	3.9	475.0	破砕面。	317	60-3
SI81	—	—	表層	礫石	—	砂岩	11.1	11.5	3.7	590.0	磨面が小さい。仕上げなし。	317	60-3
SI82	AZTc	—	3層	礫石	—	砂岩	6.0	6.7	1.4	81.4	破砕面。全体的に風化進む。手研痕。	321	60-4
SI83	—	—	表層	製形石器	—	緑閃片岩	4.6	1.75	0.61	8.1	両刃。	324	60-2
SI84	—	—	表層	礫石	—	砂岩	6.8	6.3	2.05	112.1	破砕面。	324	60-2
SI85	—	—	表層	礫石	—	砂岩	11.0	9.7	1.8	362.0	破砕面。	324	60-2
SI86	CZTc	—	耕土	伐採石斧	成品	緑色玄武岩	6.3	5.0	0.94	51.5	刃部刃こぼれ。使用時の破損。	327	60-2

論考

幅と厚さの相関図から読む弥生伐採石斧の型式学

—愛媛県大洲市村島石斧生産遺跡の調査によせて—

下條 信行（愛媛大学名誉教授）

はじめに

愛媛県大洲市菅田にある村島宮の首遺跡からは、多数の各種石斧とそれらの未成品が古くから採集されてきた。近年は大洲市教育委員会の発掘によって新たに同種の新資料が検出され、資料の蓄積が進行している。

ところが、それら資料のほとんどが折損しており、完形品をもってして全貌を掴むのは容易ではない。ここは石斧の、ことに伐採石斧の生産遺跡であり、その製品は大洲市域にとどまらず、南接する西予市域にも賣^{ウツ}られており、これからその分布域の調査が重要な課題となってくる。その同定のためにはその型式の特徴の確定が必須であり、多数存する折損品を活かしてその型式の特徴の推定を図って置く必要がある。

筆者は長らく大陸系磨製石器の研究に従事してきたが、従前からその型式学的研究の重要性を説いてきた〔下條 1994〕。土器と同じように磨製石器も取り扱うことによって、磨製石斧もその系譜性、展開性、時代性、地域性を明らかにすることができ、それらの総合として時代と地域の文化性を読み取ることができるだけでなく、機能的展開についても明らかにすることができる。

筆者はこうした観点から及ばずながら伐採石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、大形石庖丁、石戈、石矛などの型式学的研究にトライしてきた〔愛媛大編 2008〕。トータルに取り組んだものもあれば、部分的試行に終わっているものもある。伐採石斧については、東アジアの中での位置づけ、韓日の比較、北部九州での展開などを主な課題としてきたが〔愛媛大編 2008〕、列島レベルでの検討は地域的に限られていて、不十分な状態にある。

弥生時代の伐採石斧の型式学的推定については、敗戦前から「太形給刀」と呼称され規定されてきた。その特徴の余りにも見事な印象的表現がゆえに、弥生伐採石斧＝太形給刀石斧と単純化され、ここで弥生伐採石斧の型式の特徴の追及は思考停止に陥り、学界主流として長らくその深化が図られることはなかった。この単純化は弥生時代の始まりから太形給刀石斧があるものと考え、その淵源は半島にあって、それが北部九州に伝わり、太形給刀という画一的型式でもって列島各地に伝わったとする誤った思考を導くことにもなった。

筆者のこれまでの弥生伐採石斧研究を総括しようれば次のような課題がある。

①弥生伐採石斧は出現期、盛期、終末期とでは型式を異にするものであり、時期に応じて型式変化をおこしている。したがって単純に「太形給刀」という型式規定だけではこのように各期あるいは各段階のダイナミックに変転する変化の様子を流動的にしなやかにとらえきれないだけでなく、なぜにそのような変転がおこるのかその背景も説明できないのである。そのためには伐採石斧の編年的研究が必要である。

②いわゆる太形給刀石斧が盛行するのは大雑把に言って前期後半から中期であるが、弥生伐採石斧は1種類の質量（機能）でまとまっているのではなく、出現期においても盛期においても大まかには大小の2種類の伐採石斧で構成されていたようである。このことは伐採加工工程において伐採石斧の分化が図られていたことを示しているといえるが、ただその分化も後期から終末期にい

たつては小形類に限られてくるような変動を示すので、大小の区分の明確化とその変動が明らかにされなければならない。

③伐採石斧、ことに「太形蛤刃石斧」の生産においては、集中的に多量に製作するケースと、自己使用目的に個別に製作するケースとがあるが、前者と後者とはその成品の質において違いが生ずる。その違いとは、前者においてはその成品は均質的であり、後者においてはバラツキがみられると考えられるが、その検証が必要である。この相違は幅厚相関図で視覚化が可能である。これは生産体制の相違に基づくものであり、流通問題の解明にも関わってくる。

④蛤刃石斧の大量生産を集中的に図ったいくつかの遺跡の製品はその分布に広狭はあれ各地に散出し一定の流通網を形成している。しかしその間にも製作技法に相違がみられるだけでなく、その製品の形質にも相違がみられ、このことが分布の広狭と関連するようである。その基底に素材差が

あることも考慮の必要があるが、製品差が流通網の形成に深くかかわっているとみられるので、その相違を幅厚相関図などにおいて確認が必要かと考えられる。

⑤土器が一定の地域ごとに特有の型式を保持するように、弥生伐採石斧も一定の範囲においてやはり地域型をもっている。この型式差は風習差を示していることが多いが、その差が機能差を示していると考えられることができるケースもある。前者においては文化差として捉えることができ、後者の場合、個々の樹木の伐採能力に密接に関連し、それはひいては地域の開発能力の差に関わりと想定される。

以上の事柄の解明のためには、幅と厚さから得られる各地毎の段階に応じた地域形の設定と相互比較が試みられなければならない。

上記の諸課題を解明しようとするなら、多数の完形伐採石斧に依拠して、それを分析するの

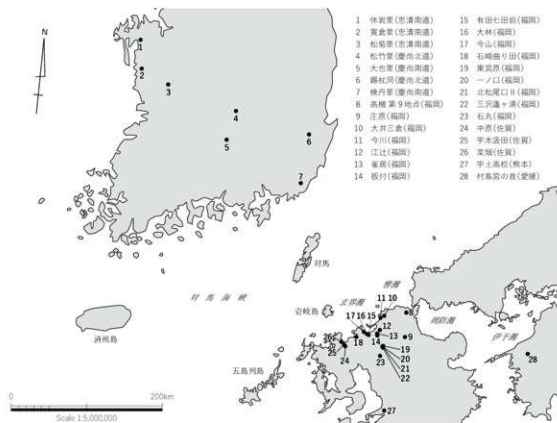


図4-01 関係遺跡分布図

もっとも堅実かつ安定的と思える。確かに、そうした条件を満たす伐採石斧を出土する遺跡は例には存在することもある。しかし、圧倒的にはこうした完形石斧はおろか石斧破片1点すら出土しない遺跡も多々あって、良質資料の収集はそう簡単ではない。そうした状況のなか、しばしば遭遇するのは、完形伐採石斧が何かの要因によって損壊され、石斧破片として出土するケースで、むしろこのケースがもっとも多いと言える。そうした破片資料を活かして、上記課題の解明に資する方法として考えたのが表題の「幅と厚さ」の相関法である。

「幅と厚さ」に着目したのは、北部九州の伐採石斧の発展を説明する上での便法からであった。北部九州では弥生文化出現期における伐採石斧は身が薄い薄斧であることが多く、それがいくつかの径庭を経て、前期後半から中期の盛期になるといわゆる「太形蛤刃石斧」と言われる身が厚い厚斧となる。この現象を数字的に表現する手段として、身幅に対する厚みを厚斧率と称して石斧の発展展開を説明した〔下條 2014〕。その結果だけを簡明に述べると出現期の縄文晩期後半から板付Ⅰ式段階では厚斧率は40%台、板付Ⅱ式古段階では50%台、板付Ⅱ式後半から中期の伐採石斧盛期になると60%以上と厚斧率が徐々に増加してゆくことが判った。太形蛤刃石斧はまさにこの盛期の例である。このことから所要の幅と厚みを残している石斧破片は、石斧分析の資料として有効であるとすることにいった。

伐採石斧を型式規定するには、これが大木を伐採するという機能を本質とする道具であるから形質において取り扱われなければならない。そのためには次のような観点からの検討が必要であり、

伐採石斧が報告されるときはこれらの要素が満たされていなければならない。また厚さは箇所箇所と異なるので、任意の横断面図だけでは不十分で、側面図ないし縦断面図が不可欠である。

- ①平面形、②長さ、③幅
④厚さ、⑤重さ、⑥石質

完形品であれば容易にデータがとれそうであるが、注意を要するのは幅と厚さの測点である。太形蛤刃石斧の場合、平面形はおおよそ長方形をなすので、幅はどこを測点としてもそう変わらないことが多いが、それでも厚さは箇所によって異なってくる。伐採石斧を基部（頭部）、体部、刃部に分けるとその厚みの形は2種類に分かれる。1は基部から体部へとその厚みはそう変わらないままに下降し、下方の刃部に及ぶにいたって薄くなるケースである。2は基部から体部に向かって徐々に厚みを増し、石斧下方の刃部の直上において最厚となるケースであるが、この最厚部で幅と厚さを採寸することが適当である。したがって前者の場合も刃部直上で採寸することになる。

少し厄介なのが、出現期の伐採石斧の場合である。この期の伐採石斧は平面形が長台形をなすので基部に狭く、刃部に広い基窄刃寛形であるから、測点次第で幅の寸法に相当差が出てくる。基部で採寸すると刃部で採寸するのとは相当の違いが出てくる。厚みは基部体部が一体のものも多く、刃部にいたって変化が生ずる。基部体部一体とはいえ、体部から刃部への変換部で最厚となるものもあるので、太形蛤刃石斧同様、体刃変換部の直上あたりに測点を求めるのが適当である。こうして平面長台形も長方形も1つの基準でデータをうることができるが、前者は扁平品だけにその見分けが難しいものもある。

1. 長さの違いは幅・厚さの違いとして現れる

平面同一形の伐採石斧を分類するとき、最もわかりやすい視点は長さである。長さは短くても10数cm、長いものは20数cmもあるので、もしそこに大小があるとすれば、長手群、短手群と容易に分別することが可能である。これが石斧破片となると、その残存度合いが小さいほどその大小の識別は困難のようにみえる。

ところが、実際の出土事例からすると破片が圧倒的であるから、この破片に依拠して何とか分類の手立てをたて、破片からでも大小の分別が可能にしたものである。その手立てとしては生産地が明らかな完形石斧をとりあげ、長さから分別した大小と幅・厚さの大小とが相関する関係にあるかどうかを検証する必要がある。その検証事例として、九州に広域に流布する今山遺跡(福岡市西区今宿)で生産された今山製石斧例と、高槻遺跡第9地点(北九州市八幡東区松尾町)の例を取り上げてみよう。今山産石斧であるなら、材質は1つ、時期も産地も限定されているのでどこから出土しようと同じ出自のものとして扱うことができる。

こうした検証事例に一番いいのは、1つの生産工房でつくられたものである。製品の類似性が高いからである。ついで望ましいのは時期を特定し

ての1遺跡からの出土品であろうが、この場合あちこちの産品が混じっている可能性があり、それだけにデータにノイズが入り込む余地が高くなる。資料の量としては10点程度は欲しいところであるが、そうそううまくはゆかないのが現状である。

(1) 今山遺跡の場合

(図4-02,03,07上段、表4-01)

今山遺跡の伐採石斧は高さ80m余の同山を構成する柱状節理が崩壊して塊石となった玄武岩を利用して石斧生産を図ったもので、前期後半に始まり、中期中ごろまで生産された。生産数は数えきれないほどの多量で、現地からは欠損した未完成品が数多く出土し、佐賀・福岡の北部九州を中心に、熊本・大分の中部九州から数は少ないが南は南部九州の鹿児島に及ぶ。ほとんどが破片としての出土品であるが、管見によればそのなかに15本ほどのほぼ完形品が存在する。

図4-03は完形の今山石斧を長さ(L)、幅(W)、厚さ(T)の3点から表現したものである。グラフの縦軸上に長さを、その底辺で縦軸に直交する横軸の、縦軸の左側に幅を、右側に厚さをプロットして、その3点を結んで三角形に表わしたもので

表4-01 今山石斧の分類と法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法 量			厚率率 (W/T)	
				全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm		
大形品	L1	中原	佐賀県	26.1	7.30	5.5	1.801	75.3%
大形品	L2	北松尾口Ⅱ	福岡県	22.9	7.95	5.3	1.660	66.7%
大形品	L3	北松尾口Ⅱ	福岡県	22.7	7.70	4.2	1.150	54.5%
大形品	L4	飯付	福岡県	22.0	7.25	5.1		70.3%
大形品	L5	三沢藤ヶ浦	福岡県	22.0	8.60	5.3	1.580	61.6%
大形品	L6	宇土高校	熊本県	22.0	8.00	5.2		65.0%
大形品	L7	北松尾口Ⅱ	福岡県	20.8	7.70	4.2	1.150	54.5%
大形品	L8	一ノ口	福岡県	20.8	8.20	5.0	1.420	61.0%
大形品	L9	一ノ口	福岡県	20.6	7.80	4.7	1.285	60.3%
大形品	L10	大林	福岡県	20.4	7.10	3.3		46.5%
大形品	L11	一ノ口	福岡県	19.4	7.10	4.6	945	64.8%
小形品	S1	一ノ口	福岡県	16.4	7.0	4.1	795	58.6%
小形品	S2	一ノ口	福岡県	15.4	6.3	4.2	700	66.7%
小形品	S3	佐原	福岡県	15.1	7.1	4.4		62.0%
小形品	S4	兼宮塚	福岡県	14.1	7.0	4.3	750	61.4%

※ゴシック体は特定産

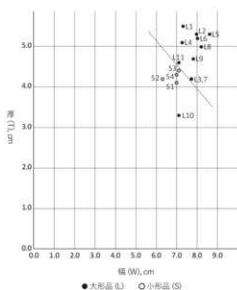


図4-02 今山石斧の幅厚相関図

ある。これを見ると三角形の群が実線の群と破線の群とに大きく2つに分かれていることが直ちに見て取れよう。

なかでも長さ(L)において、2つの間に群差が存在することは一目瞭然と言えよう。大が11点で、小が4点である。大は長19.4～26.1cmで、小は14.1～16.4cmの間にあるから最小でも3cmの差があり、両者は歴然と分別できる。大は通常20～23cmで、小は14～16cmであるから通常には長5cm前後の差としてとらえることができる。

この長さによる大小差がどのように幅・厚さに投影してくるのか。幅の方から検討すると、大の方の幅を見ると、幅(W)は7.1～8.6cm間にあり、7cm台の後半から8cmの間に集中している。小の方は6.3～7.1cm間にあり、ほぼ7cmに集中している。小の上限と大の下限が接しているが通例的には0.5～1.0cmの差がある。長さに比べ幅の広がりには限界があり、大小が接近せざるを得ないが、通例では0.5～1.0cmの差異が認められるように長さに応じて幅も差がつく。

厚さ(T)は、大は3.3～5.5cmの間にあるが3.3cmと異常に薄い大形遺跡(福岡県福岡市西区)例を除くと4.2～5.5cm間となるが中心的な厚さは4cm台後半から5cm前半の間にある。小は4.1～4.4cmと4cm前半でまとまっているので、厚さは4.5cm

を境にして大小分かれている。やはりこのように長さに応じて厚みにも大小の差が反映している。大で最も薄身の北松尾口遺跡II地点(福岡県小郡市)出土の2例などは、厚さだけとると小の範疇に入るが、幅を見れば2例とも7.7cmで完全に大の範疇にあることでもあり、一面からだけの指標で判断するのではなく、幅・厚さの両者から同時に、相関的に評価しなければならない。その同時的相関的に表現したのが図4-02の幅厚相関図で、これによるとこの2例は全く小の領域に属さないことがわかるであろう。さらにその重量をみると、この2例は一部欠けていても1,150gの値を示して、小の700g台の値を大きく凌駕して大の実力を表している。

先に除外して扱った大林遺跡例は、3.3cmと常識外の薄さを示している。これは採集品で共伴時期が明らかでないが、この厚さは小よりもさらに薄身の異常な数値である。玄武岩製品のなかでも製作開始時のそれには初期弥生期の特徴を引いて薄身につくられたものがあり(吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼市・吉野ヶ里町)のSD001出土品などは厚さ3.0～3.7cmの薄身品で、他にも例がある)、大林遺跡例もその類品と考えたい。

図4-02の幅厚相関図を観ると、2つのグループに分かれることが判るであろう。右上が長さで分けた大のグループに相応し、左下が小のグループに相応するのである。これが示すように、長さ基準の分類が幅・厚さにも投影しており、的確な破片から幅・厚さを採寸すれば、実長は判らなくても大小が存在することは明らかにすることができる。いくつかの完形品が存在すれば直ちに幅・厚さから実長や重量をも復元することができる。

今山石斧の大形品小形品の標準的な諸属性をまとめると下記ようになる。

	大形石斧	小形石斧
長さ(L)	20～23cm	14～16cm
幅(W)	7.5～8.0cm	7.0cm
厚(T)	4.5～5.5cm	4.0～4.5cm
重(We)	1.5～1.8kg	0.7～0.8kg

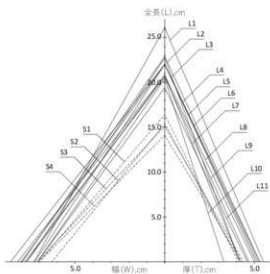


図4-03 3点法(長・幅・厚)による今山石斧の型式表現

(2)高槻遺跡第9地点の場合

(図4-04,07中段、表4-02)

この遺跡も早くから弥生伐採石斧の生産遺跡として著名で、主に付近に産する安山岩質凝灰岩によって多量の伐採石斧を生産している。前期末を中心に中期に及んでいる。

伐採石斧のみならず、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、鑿形石斧、石葱丁、大形石葱丁、石戈などの未成品や成品が出土し、成品の多くが欠損しているところを見ると、その生産は自己使用にも振り向けられていたことが判る。

伐採石斧には多量の未成品と若干の完成品とが出土しているが、完成品の多くはどこかが欠けており、この集落で使用されていたことが推し量られる。完成品には大形品と小形品がある。小形品にはほぼ完形品が数点あり、その全長をつかむことができる。大形品としたものはすべて折損品で完形品がなく、明確にその全長を把握できないが、折損品でもその残存長は小形品の最長品と同等ないしは凌駕する大きさであるから、大形品が存在することは明らかである。幅・厚さも容易に大小が存在することを示している。

小形品の例としてとりあげたのは7点で、うちほぼ完形品が4点である。完形品の長さは13.6cm(718—斜字は遺物番号を表す、以下同じ)、14.4cm(722)、15.0cm(712)、16.4cm(715)で、13cm後半～16cm前半に収まる。

刃端が1cmほど欠ける残りの3点は14.8+cm(700)、12.0+cm(708)、14.8+cm(713)で、復元すれば前掲の諸例とほぼ同長となる。

7点の幅は5.2～5.8cmと僅か0.6cmの間に収まり、その均一性は高い。残余の同類品4点をみても5.3～5.8cmの間にあり、上掲例にビシヤリと一致し、横幅の均質性を裏付けることができた。7点の厚さは、3.7～4.2cmの僅か0.5cmの間に収まり、残余の例も同断である。

重さについては、558g(712)、617g(715)、527g(722)、416g(718)と、500g後半～600g前半の間にある。718がやや軽量であるのは、欠損部が

少し大きいためである。残余の3例は599g(700)、528g(713)、460g(708)で欠損部分を割り増しする必要があるが、上掲のなかで収まるとみられる。

次に、大形品の10点である。すべて折損品だが、その残存長は長い方から17.0+cm(691)、16.8+cm(680)、16.3+cm(679,681)、16.2+cm(683)で、復元すれば優に小形品の全長13cm後半～16cm前半を超える。完形品はおそらく全長20cm未満くらいであろう。北九州市域内で製作された伐採石斧を受容したと考えられる下井田遺跡(福岡県行橋市)出土の伐採石斧を分析した梅崎の分類からすると、17～19cmほどになろうか(梅崎1996)。

幅は8点が6.5～7.2cm間に集中し、7cm前後を6点が占めている。もっとも細いのが6.3cmで2点あるが、小形品の幅5.3～5.8cmとは明らかに一線を画している。厚さは4.5～5.5cm間に分布するが4cm後半から5cm前半の5cm前後に集中している。中に1点、3.7cmという小形斧並みの厚みしかない例がある(680)。しかし幅は7.1cmと広く、重量は784gもあり、十分に大形品としての要件を揃えている。後に示す図4-04の幅厚相関図を見れば、大形品の領域に属していることが了解できるであろう。大形品と小形品の長さの違いは当然ながら幅・厚さの違いとして現れ、さらには重量において大きな差として現れる。小形品は460～617g間のものであるが、大形品は折損品でありながら700～900gもあり、完形品ともなればさらに差は大きくなるであろう。上記した梅崎の分析によれば900～1,100gほどになり、ここに大小差が歴然と表明している。

高槻遺跡第9地点出土の完成伐採石斧の各属品の標準的な法量を整理すると下記ようになる。

	大形品	小形品
長さ(L)	16.6+～(19)cm	13cm後半～16cm前半
幅(Wi)	6.5～7.2cm	5.2～5.8cm
厚(T)	4.5～5.5cm	3.7～4.2cm
重(We)	700+～900+g	500g後半～600g前半

表4-02 北九州市・高槻遺跡第9地点出土伐採石斧

法量一覧

分類	No.	注 記				重量 g	厚比率 (W/T)
		全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g		
大形品	678	15.6	6.8	5.3	878	77.9%	
大形品	679	16.3	6.8	5.2	870	76.5%	
大形品	680	16.8	7.1	3.7	784	52.1%	
大形品	687	16.3	7.1	4.5	890	63.4%	
大形品	682	16.0	7.1	4.8	950	67.6%	
大形品	683	16.2	7.2	5.5	880	76.4%	
大形品	691	17.0	6.7	5.0	950	74.6%	
大形品	692	13.5	6.5	4.8	617	73.8%	
大形品	693	13.5	6.3	5.2	743	82.5%	
大形品	694	13.5	6.3	5.0	739	79.4%	
小形品	700	14.8	5.6	4.2	599	75.0%	
小形品	708	12.0	5.8	3.8	460	65.5%	
小形品	712	15.0	5.6	4.1	558	73.2%	
小形品	713	14.8	5.4	4.1	528	75.9%	
小形品	715	16.4	5.7	3.8	617	66.7%	
小形品	718	13.6	5.4	3.7	416	68.5%	
小形品	722	14.4	5.2	4.1	527	78.8%	

※ゴシック体は推定値

大形品と小形品を比較すると、長さで3cm前後、幅で1cm強、厚さで1cm弱、重さで4～500gの差があり、両者の間には歴然とした差があり、弥生伐採石斧には大小の2種の存在が確立していることが判る。

図4-04は横軸を石斧幅、縦軸を石斧の厚さとし、採寸した各々の数値をプロットして得た高槻遺跡第9地点の幅厚相関図である。図が示すように、明らかに大形品と小形品とは分布領域がことなっており、2者が存在することを示している。そしてそのことを視覚的にわかり易く示している。

また幅と厚さは有機性をもった存在で、個々にはなく両者を同時的に把握することによって型式的位置づけが明確になってくる。

大小の違いは完形品であれば長さについては視覚で、重さは手持ちによって直感的に確認することもできる。しかし残念なことに、伐採石斧の完形品の残存例は極めて希少なので、その少ない資料では安定したデータは得ることができない。型

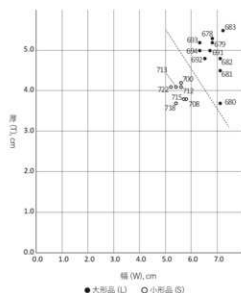


図4-04 高槻遺跡第9地点出土伐採石斧の幅厚相関図

式化に安定性が欠ける。そこで圧倒的に出土事例が多い伐採石斧の破片に着目し、その中からデータを得るのに適切な破片を選定し、幅厚的確な数値を得ることによって、この面から当該石斧の型式化の一助を得ることができる。それら破片に伴って若干の完形品を得ることができれば、それらと合わせて、完全形をもってして型式化を果たすことが可能となる。そうでなくても、幅・厚さのデータだけでも、時代性、地域性その他のことは示すことができるが、それについては以下においておいと述べてゆくこととする。

こうして得られた大小の石斧の同時的存在は多分、用途の違いによるものと想定される。大形品はいままでもなく木製農具などの作製の材となる堅緻なカシの大径木の伐採に供されたこととみられ、小形品は小径木や枝打ちの伐採やくきなどとして使用されたことなどが考えられる。これは伐採石斧の用途分化がすでに進行または確立していたととらえることができ、いつまでも伐採の一語で片付けておくことができないことを示している。

2. 北部九州の初期稲作期の伐採石斧と

韓半島南部および北部九州中期の伐採石斧との比較

(1) 玄界灘沿岸における初期稲作段階の

伐採石斧の特徴 (図 4-05, 07 下段、表 4-03)
 初期稲作段階(縄文晩期後半～板付Ⅱ式古段階)における伐採石斧の特徴は如何なるものであろうか。初期稲作受容地である玄界灘沿岸(佐賀唐津平野、福岡県糸島平野、福岡平野、同柏屋平野など)における伐採石斧の特徴を分析してみよう。上述の今山や高槻遺跡のように1遺跡での集中生産が始まる前の段階であるため、その製作は個々の遺跡を単位として行われた。そのため、同一遺跡内でも、また遺跡間でも形態や法量においてのパラッキがあるのを前提のうえ、図4-05の幅厚相関図を参考として以下に最大公約的にまとめてみよう。

①上記地域出土の該当期のほぼ完形の伐採石斧18点を検討対象とした。

②平面形は基部(頭部)が狭く、刃部が広い、基窄刃寬の台形をなす。大方は基部から刃部に向けて徐々に緩やかに拡大する長台形をなすが、中

には急激に拡大して、三角形に近いものもある。

③全長が15～20cmの大形品と9～13cm前半ばの小形品とに分けることができる。盛期の伐採石斧が大小から組成されることはすでに今山、高槻遺跡例でみたが、こうした組成は稲作出現期からあったようだ。

④厚みは薄く、2～3cm前半の板状をなし、弥生伐採石斧通有の厚みのある太形蛤刃形をなすことはない。

⑤一方、幅は大形で7～8cm前半、小形で5～6cm半ばで、太形蛤刃と同等か広い。幅はすでに記したように刃部に移る直上あたりの最厚部を採寸位置にしている。

⑥したがって、厚みの度合いを示す厚率(厚みを幅で除した数値)は30～40%台と低い。太形蛤刃石斧の場合、通常60～80%台であるので、厚みが相当に薄いことが特徴といえる。

⑦重量は大形品で5～600gで、縄文時代の伐採石斧と変わらない。そのなかで厚さは扁平(厚

表4-03 玄界灘沿岸の初期稲作期の伐採石斧法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法 量				厚率 (W/T)
				全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g	
大形品	L1	粟積	佐賀県	19.2	7.2	3.0		41.7%
大形品	L2	粟積	佐賀県	15.0	7.0	3.2	580	45.7%
大形品	L3	石崎曲り田	福岡県	16.7	7.2	3.7	554	51.4%
大形品	L4	倉原	福岡県	18.6	8.0	2.5	505	31.3%
大形品	L5	江辻	福岡県	16.2	6.6	2.9		43.9%
大形品	L6	今川	福岡県	21.0	8.5	3.4	1,038	40.0%
大形品	L7	板付	福岡県	15.0	7.6	3.0		39.5%
小形品	S1	粟積	佐賀県	11.3	5.8	2.7		46.0%
小形品	S2	粟積	佐賀県	12.8	7.5	3.5	500	46.7%
小形品	S3	宇木渡田	佐賀県	13.5	6.7	4.2		62.7%
小形品	S4	宇木渡田	佐賀県	11.4	5.6	2.0		35.7%
小形品	S5	倉原	福岡県	9.4	5.0	2.8		56.0%
小形品	S6	倉原	福岡県	9.7	5.8	2.5		43.1%
小形品	S7	板付	福岡県	12.4	6.5	2.3		35.4%
小形品	S8	有田七郎館	福岡県	13.4	6.6	2.4		36.4%
小形品	S9	石丸	福岡県	10.6	4.2	2.2		52.4%
小形品	S10	江辻	福岡県	13.6	6.0	2.2		36.7%
小形品	S11	大井三倉	福岡県	13.6	5.4	2.8		51.9%

※ゴシック体は推定値

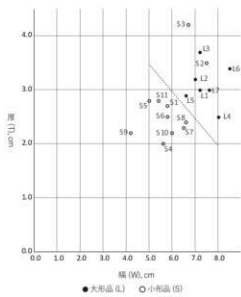


図4-05 玄界灘沿岸初期稲作期の伐採石斧の幅厚相関図

斧率40%)ながら1,000gに及ぶものが1例(今川遺跡(福岡県福津市)があるが、これは太形蛤刃石斧製作に向かったの胎動品とみられる。

相関図のなかに、小形品でありながら、大形品の領域に属しているのが2例ある。その一の宇木汲田遺跡(佐賀県唐津市)例は長さ、幅は小形品の領域に収まるが、厚みが極端に厚く、大形品の厚みさえ凌駕する数値を示している。厚斧率も60%を超え、太形蛤刃並みであるが、かといってその領域にも属さない一種の特殊品かと考えられる。

2) 韓半島南部の伐採石斧との比較

(図4-06.08、表4-04)

北部九州の玄界灘沿岸にまずもって稲作文化を伝えた韓半島南部の伐採石斧と玄界灘沿岸のそれとを比べてみよう。玄界灘沿岸に稲作を伝えたのは無文土器文化前期の終わりの松菊里・椀丹里段階であるが、半島で伐採石斧の出土事例が豊かになるのはその前の段階の駅三洞段階(孔列文土器期)からである。

孔列文土器に伴う伐採石斧例はあまり明確では

ないが大形伐採石斧と小形伐採石斧の2者があるのであったようである。それが次の松菊里・椀丹里段階になると大小とも器体の大きさに変化が生じ、長さ、幅、厚さにおいて少し大きくなる。長さにおいて8~17.5cmくらいであったものが12~22cmに、幅において4.5~7cmであったものが6.5~8cmに、厚さにおいて2.5~4cmであったものが4~6cmへと伸長するのであるから、石斧能力は一段と強化されたものとみていい。因みに厚斧率は孔列文土器期には50%台のもあるが70%近くに達したのも多く、厚斧段階に到達している。幅と厚みがバランスよく設計されて厚斧となっている。しかるに松菊里・椀丹里段階の厚斧率は60%後半~80%近くにも達し、一段と成長した厚斧となっている。図4-06にみるように、大形品と小形品があり、幅・厚さだけでなく、他のデータを付加すると次のようになる。

	大形品	小形品
長さ(L)	20~22cm	11.5~15.5cm
幅(Wi)	7.3~8.0cm	6.0~7.0cm
厚(T)	4.4~6.0cm	4.0~5cm強
重(We)	1,759g	

表4-04 韓国無紋土器時代の伐採石斧法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法量				厚斧率(W/T)
				全長(L) cm	幅(W) cm	厚(T) cm	重量(g)	
大形品	L1	松竹里	慶尚北道	21.8	8.2	6.4	1,759	78.0%
大形品	L2	松竹里	慶尚北道	20.0	7.3	4.0	855	54.8%
大形品	L3	露杖洞	慶尚北道	19.2	8.0	4.4		55.0%
大形品	L4	夏倉里	忠清南道	17.0	6.5	4.2		64.6%
小形品	S1	椀丹里	慶尚南道	12.2	6.8	4.5		66.2%
小形品	S2	椀丹里	慶尚南道	13.4	6.9	5.0		72.5%
小形品	S3	椀丹里	慶尚南道	13.3	7.0	4.5		64.3%
小形品	S4	椀丹里	慶尚南道	11.8	6.9	4.6		66.7%
小形品	S5	椀丹里	慶尚南道	13.2	6.5	3.9		60.0%
小形品	S6	大苞里	慶尚南道	10.0	6.2	4.2		67.7%
小形品	S7	休岩里	忠清南道	15.4	6.2	4.5		72.6%
小形品	S8	夏倉里	忠清南道	14.7	7.2	6.2		86.1%
小形品	S9	松菊里	忠清南道	14.6	6.5	5.2		80.0%
小形品	S10	松菊里	忠清南道	13.5	7.0	5.0		71.4%
小形品	S11	松菊里	忠清南道	14.2	5.9	2.5		42.4%

※ゴシック体は推定値

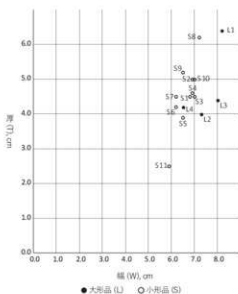


図4-06 韓国無紋土器時代の伐採石斧の幅厚相関図

大形品の1,759g例は松竹里（慶尚北道）出土品であるが、重さのみならず長さ、幅、厚さは先記した今山製品並みである。ただ、大形品の完品はこの例くらいで、さらなる出土例の充実が期待される。大形品と小形品の法量関係はほぼ相似的關係にあるが、長さはもちろん幅において2者間の差が顕著で、厚さにおいても差が明確な例もあるが、両者が接触しないし重なる部分があり、この点曖昧さをこしている。大形完形品の類例の増加をまってこの点は明らかにしてゆきたい。大形品の出土例は散発的で、小形品の方が出土例が多く各地から満遍なく出土する。

次段階の粘土帯土器の段階にも類似形態の伐採石斧が大小とも存続するが、そこからデータを借用すると大形品は重さおおよそ千数百gで、小形品は7～800gほどになりそうだ。

玄界灘沿岸の稲作初期伐採石斧の幅厚相關図である図4-05と、韓半島松菊里・椋丹里段階の幅厚相關図である図4-06を比較すると、両者の間には大きな懸隔がある。

韓半島の松菊里・椋丹里段階の伐採石斧の平面形が大形品は少し中彫れの長方形で小形品は刃部方向に僅かに広くなった長台形であるのに対し、列島初期稲作期のそれは強長台形といえるもので両者の間には平面形のうえでの連絡関係はない。また身の厚さは厚弁率が示すように半島のそれは60%以上の厚弁であるのに対し、列島のそれは40～50%前半の薄弁であるなど異質の関係にある。そのことは重量にもよく現れていて、半島の大形品が千数百gであるのに対し、列島の大形品は5～600gしかなく、伐採石斧の機能の上でおおきくものをいう重量が両者の間で大きく懸隔があり、両者間の機能差は著しい。

かようにみると、半島南部からは初期稲作の伝播にともなった多様多量の文物が伝わるとはいえ、水田経営において鋤耨などの農具作成に供する直径60～80cmもあろうかという堅緻なアカガシなどの大径木の伐採に不可欠な、強力な伐採石斧を列島は受容することはなかった。縄文レベルと変わらないような低能力の伐採石斧でそれ

に対応していた。したがって初期農耕時の開発は実にスローな展開にならざるを得なかった。したがって伐採石斧に関する限り初期稲作期に韓半島から影響を受けることはなく、縄文斧の改良で対応していた。高速の開発を望んでいなかったのである。

(3) 今山石斧との比較 (図4-02,05,07)

北部九州の初期稲作期である古期段階の伐採石斧と前期後半から中期の新期の伐採石斧とを幅厚相關図を使って比較してみようとするものである。図4-05が前者の幅厚相關図、図4-02が後者の幅厚相關図で、図4-07の上段と下段で視覚的に確認しながら以下に両者を比べてみよう。

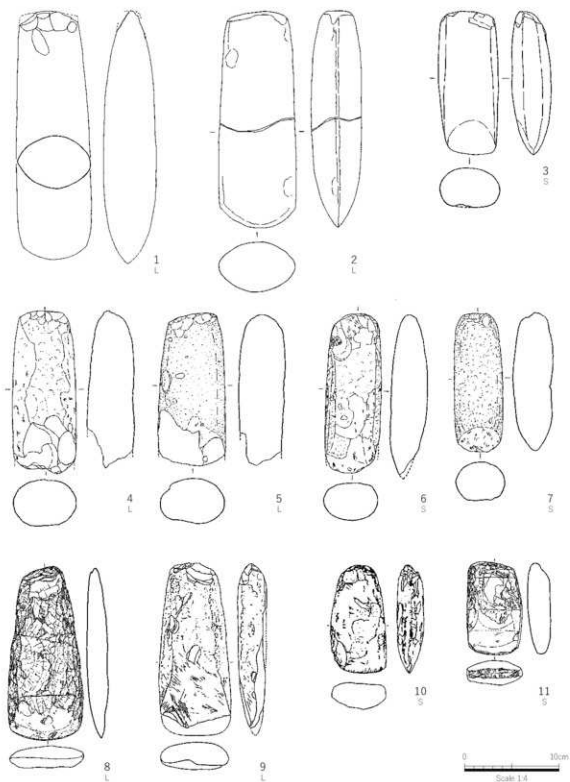
両者とも大形品と小形品とからなるが、いずれもその間には大きな差がある。

小形品をみると、その幅は古期が4～7cmで、新期が6～7cmで、新期は古期の上限付近にまとまっている。古期の幅は多くは5～6cm間に集中していることからすると新期は1cmほど幅広ということになる。また古期の幅には集約性がないのが特徴で、3cmものブレがあるのはまだ弥生的伐採石斧の定式化が確立していないからとみられる。

両者の差が顕著なのは厚さにおいてである。古期は3～4cmの間にあるのに対し、新期は4cm強で、その間に1cm強の開きがある。

大形品については、その幅は古期が7cm弱～8cm間にあるのに対し、新期は7～8cm強の間で、大形品がわずかに勝る程度である。両者の差はここでも厚さにおいて顕著に現れる。古期が3cm弱～4cm弱間であるのに対し、新期は5cm前後で1cmの差がついている。つまり小形品も大形品も新期は古期よりも厚さにおいて1cmも厚く、厚さにおいて両者の間に著しい差異があることが判る。そのことはこの幅厚相關図をみれば一目瞭然である。

長さにおいては、古期は小が10cm弱～13cm強、大が15cm～20cm弱で、新期今山の小が15cm前後、大が20cm強に比べていずれも短め

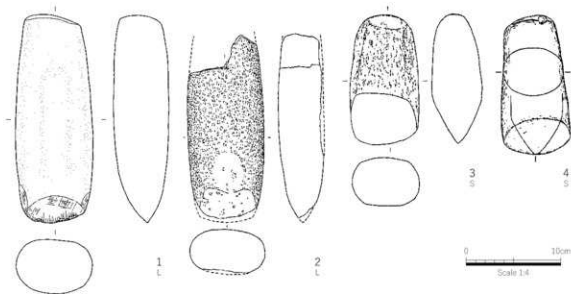


上段：今山製石斧—1. 佐賀 中原(L), 2. 福岡 北松尾口(L), 3. 福岡一ノ口(S)

中段：福岡 高槻遺跡第9地点出土石斧—4. 691(L), 5. 682(L), 6. 715(S), 7. 722(S)

下段：玄界灘初期稻作期石斧—8. 福岡 雀居(L), 9. 佐賀 菜畑(L), 10. 佐賀 菜畑(S), 11. 福岡 雀居(S)

図4-07 各地域および各遺跡出土の大形・小形の伐採石斧



1. 松竹里(L), 2. 鶏杖洞(L), 3. 桃丹里(S), 4. 松崎里(S)

図4-08 韓半島南部の大形・小形の伐採石斧

であるばかりでなく、古期は振幅が大きく均等性を欠いている。これも安定的作に欠けた初期段階の姿であろう。

両者のあいだの差異は、平面形（長台形と長方形）などにもみられるが、重量差において極端に顕現している。古期の大形品が6～700gと縄文伐採石斧とそう変わらない重量でしかないのに対し、新期の大形品は1,500g前後と2～2.5倍以上もあり、圧倒的な能力差を示している。伐採石斧の能力が刃の鋭さ前提にその重量による衝撃力に依拠することからすれば、その差は伐採という大地の開発行為の差を示すことになり、古期段階

における開発能力は、稲作開始期だからといって単純に高評価することはできない。稲作導入期、それを先進地として受け入れた玄界灘沿岸地域では、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、鬚状石斧や石廂丁その他、新たな農工用石器を韓半島から受け入れ駆使しながらも、開発の先頭に立つ伐採石斧を受け入れず、縄文石斧的能力の伐採石斧を使用することで対応した。こうした径庭を経てやがて今山石斧のような、ある種、韓半島のそれを凌駕するような太形始刃石斧を生み出していったのである。

（以下は次回報告書に掲載）

【参考文献】

- 梅崎恵司 1996「東北部九州（豊前・豊後）の弥生時代高機型石斧身の生産」『北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要』第10号、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 愛媛大学考古学研究室 編 2008『大陸系磨製石器論—下條信行先生石器論叢集—』、下條信行先生石器論叢集刊行会

- 下條信行 1994『弥生時代・大陸系磨製石器の編年期的作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 下條信行 2014『生産具から見た初期稲作の担い手』『列島初期稲作の担い手は誰か』、すいれん舎